ルートヴィヒ・ベヒシュタイン編著
『ドイツ伝説集』（一八五三）試訳（その十一）

鈴木　滿　訳・注

＊凡例

1．ルートヴィヒ・ベヒシュタイン編著『ドイツ伝説集』（一八五三）（略称をＤＳＢとする）の訳・注である本稿の底本には次の版を使用。

Deutsches Sagenbuch von Ludwig Bechstein. Mit sechzehn Holzschnitten nach Zeichnungen von A. Ehrhardt. Leipzig, Verlag von Georg Wigand. 1853.; Reprint. Nabu Press.

初版リプリント。因みに一〇〇〇篇の伝説を所収。

2．ＤＳＢ所載伝説の番号・邦訳題名・原題は分載試訳それぞれの冒頭に記す。

3．ヤーコプとヴィルヘルムのグリム兄弟編著『ドイツ伝説集』（略称をＤＳとする）を参照した場合、次の版を使用。

Deutsche Sagen herausgegeben von Brüdern Grimm. Zwei Bände in einem Band. München, Winkler Verlag. 1981. Vollständige Ausgabe, nach dem Text der dritten Auflage von 1891.

因みに五八五篇の伝説を所収。

なお稀にではあるが、ＤＳの英語訳である次の版（略称をＧＬとする）も参照した。

The German Legends of the Brothers Grimm. Vol.I/2. Edited and translated by Donald Ward. Institute for the Study of Human

Issues. Philadelphia, 1981.

4. ＤＳＢ所載伝説とＤＳ所載伝説の対応関係については、分載試訳冒頭に記すＤＳＢの番号・邦訳題名・原題の下に、ほぼ該当するＤＳの番号・原題を記す。ただし、ＤＳＢ所載記事の僅かな部分がＤＳ所載伝説に該当する場合はここには記さず、本文に注番号を附し、「ＤＳ＊＊＊に詳しい」と注記するに留める。

5. 地名、人名の注は文脈理解を目的として記した。史実の地名、人名との食い違いが散見されるが、これらについては殊更言及しないことを基本とする。ただし、注でこれが明白になる分はいたしかたない。

6. 語られている事項を、日本に生きる現代人が理解する一助となるかも知れない、と、訳者が判断した場合には、些細に亘り過ぎる弊があろうとも、あえて注に記した。こうした注記における訳者の誤謬へのご指摘、および、このことについても注記が必要、といったご高教を賜ることができれば、まことに幸いである。

7. 伝説タイトルのドイツ語綴りは原文のまま。

8. 本文および注における〔　〕内は訳者の補足である。

『ドイツ伝説集』（一八五三）試訳（その一）　一――六〇　所収「武蔵大学人文学会雑誌」第四十四巻第一・二号　一一七～二三五ページ、平成二十四年十一月

『ドイツ伝説集』（一八五三）試訳（その二）　六一――九〇　所収「武蔵大学人文学会雑誌」第四十四巻第三号　四六三～五三〇ページ、平成二十五年二月

『ドイツ伝説集』（一八五三）試訳（その三）　九一――一三四　所収「武蔵大学人文学会雑誌」第四十四巻第四号　七五～一七六ページ、平成二十五年三月

『ドイツ伝説集』（一八五三）試訳（その四）　一三五――一八四　所収「武蔵大学人文学会雑誌」第四十五巻第一・二号　一五七～二八五ページ、平成二十五十一月

『ドイツ伝説集』（一八五三）試訳（その五）　一八五――二二五　所収「武蔵大学人文学会雑誌」第四十五巻第三・四号　九五～一八〇ページ、平成二十六年三月

『ドイツ伝説集』（一八五三）試訳（その六）　二二六――二八八　所収「武蔵大学人文学会雑誌」第四十六巻第一号　二〇九～三三〇ページ、平成二十六年十月

『ドイツ伝説集』（一八五三）試訳（その七）　二八九――三三九　所収「武蔵大学人文学会雑誌」第四十六巻第二号

『ドイツ伝説集』（一八五三）試訳（その八）　三四〇――　三九四　所収「武蔵大学人文学会雑誌」第四十六巻第三・四号　一五一～二四六ページ、平成二十六年十二月
『ドイツ伝説集』（一八五三）試訳（その九）　三九五――　四四四　所収「武蔵大学人文学会雑誌」第四十六巻第三・四号　一～九八ページ、平成二十七年三月
『ドイツ伝説集』（一八五三）試訳（その十）　四四五――　四八四　所収「武蔵大学人文学会雑誌」第四十七巻第一号　九九～一九六ページ、平成二十七年三月
八三～一七八ページ、平成二十七年十二月

＊本分載試訳（その十一）の伝説

四八五　あの犬が埋葬されてるとこ Wo der Hund begraben liegt.
四八六　樹樹の上の魚たち Fische auf Bäumen.
四八七　テンネベルク城の白衣夫人 Die weiße Frau auf Tenneberg.
四八八　耳を付けた（オーア・ドゥルッフ） Ohr druff.　*DS12 Die Schloßjungfrau.
四八九　聖ヨハンニス教会（ザンクト・キルヒェ） Sankt Johannis Kirche.　*DS291 Die Altenberger Kirche.
四九〇　アーゾルフェロート Asolverod.
四九一　ルターの泉（ルタースブルンネン） Luthersbrunnen.
四九二　悪魔の浴場（トイフェルスバート）と幾つかの悪魔の環（トイフェルスクライス） Teufelsbad und Teufelskreise.
四九三　猟師の記念碑（イェーガーシュタイン） Jägerstein
四九四　山山の不思議 Die Wunder der Berge.
四九五　赤巌（デア・ローテ・シュタイン） Der rote Stein.

四九六　ハインリクスの魔法 Zauberkünste im Heinrichs.
四九七　酸塊（すぐり）の生け垣 Die Harchelsbeerhecke.
四九八　呪われた村 Das verwünschte Dorf.
四九九　鉱夫と花嫁の話 Von einem Bergmann und einer Braut.
五〇〇　ファールの種（ファール・ザーメン） Fahrsamen.
五〇一　ホレ夫人と忠実なエッカルト Frau Holle und der treue Eckart.　*DS7 Frau Holla und der treue Eckart.
五〇二　樅（もみ）の木立 Der Tannenbusch.
五〇三　古城ハレンベルクの話 Vom alten Schloß Hallenberg.
五〇四　エーバース村（ドルフ）とエーバース地所（グルント） Ebersdorf und Ebersgrund.
五〇五　ガダマールの見た幻影 Gadamars Gesicht.
五〇六　ハーバー森（ホルフ）と鷹（ファルケンブルク）の城 Haberholz und Falkenburg.
五〇七　ヘルマンス山（ベルク）の騎士たち Die Ritter des Hermannsberges.
五〇八　冷たい泉（デア・カルテ・ブルンネン）の畔（ほとり）の蛇 Die Schlange am kalten Brunnen.
五〇九　ルップ山（ベルク）の姫君たち Die Ruppbergs-Jungfern.
五一〇　ライスィゲン巌（シュタイン）の話 Vom Reißigenstein.
五一一　神の野（ゴッテスフェルト）の鐘 Die Glocke vom Gottesfeld.
五一二　盗賊城（ラウブシュロス）ヘルマンシュタインその他 Raubschloß Hermannstein und andere.

五一三　部屋の洞窟群の小人たち Die Zwerge der Kammerlöcher.
五一四　歌人の山の話 Vom Singerberge.
五一五　歌人の山城を呪詛したルター博士 Doktor Luther verwünscht das Singerberger Schloß.
五一六　パウリーナの庵 Paulina's Zelle.
五一七　パウリーナの労賃支払いの奇蹟 Paulina lohnt die Arbeiter wundersam.
五一八　教会の列柱と悪魔 Die Kirchensäulen und der Teufel.
五一九　黒騎士ヴィッテキント Wittekind, der schwarze Ritter.
五二〇　グライフの巌 Der Greifenstein.
五二一　ブランケンブルクの修道士 Der Mönch auf Blankenburg.
五二二　危険な担保 Das gefährliche Pfand.
五二三　愚かな楽士たち Die thörichten Musikanten.
五二四　癒やしの山 Heilsberg.
五二五　死者が見える女 Die Todtenschauerin.
五二六　朝餐 Das Frühmahl.
五二七　首縊りの柏 Die Hange-Eiche.
五二八　男の水の精 Der Wassermann.　*DS49 Der Wassermann.
五二九　グロースヴィッツの取替え子 Der Wechselbalg zu Großwitz.
五三〇　鰊小人 Das Hähringsmännchen.

五三一　教会と橋が同価格 Kirche und Brücke ein Geld.
五三二　髭の生えた乙女 Die Jungfrau mit dem Bart.　*DS330 Die Jungfrau mit dem Bart.
五三三　ザールフェルトの女子修道院 Das Nonnenkloster zu Saalfeld.
五三四　銀の風琴 Die silberne Orgel.
五三五　神の御手 Gottes Finger.
五三六　授かった幸運 Das bescheerte Glück.
五三七　小鼠 Das Mäuselein.　*DS248 Das Mäuselein.
五三八　寡婦の呪い Der Fluch der Wiwe.
五三九　荒れ狂うベルタ Die wilde Bertha.　*DS269 Die wilde Berta kommt.
五四〇　頭に刺さった斧 Das Beil im Kopfe.
五四一　ホーエンヴァルトの半分ゾ Halbpart auf der Hohenwart.
五四二　疫病神どん Hünschchen.
五四三　ヴェレ夫人 Frau Welle.
五四四　ザーレ川の女の水の精たち Die Saalnixen.　*DS53 Der Wassemann an der Fleischerbank. / *DS60 Die Elbjungfer und das Saalweiblein. / *DS65 Vor der Nixen hilft Dosten und Dorant.

四八五　あの犬が埋葬されてるとこ

ヴィンターシュタイン[1]にはあの犬が埋葬されている。ヴィンターシュタインとはインゼルベルクのすぐ傍にある村で、エムゼ川が貫流している。以前ここにはたくさんの鉱夫も住んでいたし、ヴァンゲンハイムの殿たちの山城もあった。これは現在廃墟になっているが、他にまだ同家の城が三つ存在する。この殿たちの一人――その先祖・後裔のほとんど全てと同じくゴータ公[2]の主猟官[3]だった――は大層頭が良くかつ忠実な犬を持っていた。その名はシュトゥッツェル。ヴァンゲンハイムの殿が亡くなってからも、長い間未亡人はこれを飼っていた。シュトゥッツェルは頗る気が利き怜悧だったので、頸環に手紙を結びつけてもらうと、たった独りでゴータなるフリーデンシュタイン城[4]へ歩いて行き、返書を携えて戻って来た。そこでゴータの飛脚はヴィンターシュタイン経由の道を辿らずに済んだしだい。ヴァンゲンハイムの未亡人はシュトゥッツェルを殊の外可愛がっていたので、この犬がとうとう大自然に年貢を納める〔＝死ぬ〕と、柩に入れさせ、傷ましく涙を流し、召使い一同にも、共に泣いて欲しい、と望んだ。召使いたちは女主人とシュトゥッツェルがやはりとても好きだったので、善良な犬を偲んで思い切りわあわあ嘆き悲しんだ。ただし、年老いた女料理番は別で、これは北欧神話で女巨人トゥクがバルドゥール[5]を「乾いた目」で悼んだような泣き方をした〔＝泣かなかった〕。そこで女主人はかんかんに怒り、女料理番には他の召使いが頂戴した喪服を与えなかった。けれどもやがて彼女が厨房に入ると、女料理番が玉葱を刻んでいて、そのせいで涙を流していた。そこで女主人はおろおろして「おやまあ、おまえも好い子のシュトゥッツェルのために泣いているのかい。それならおまえにも喪服をあげるよ」と言った。料理番の婆さんは涙を流しながらにん

まりして、否定はしなかった。――さてヴァンゲンハイム令夫人は、シュトゥッツェルは儀式に則って埋葬されなくてはいけない、それもきちんと神の土地（ゴッテスアッカー）〔＝教会墓地〕に、との意向だったが、城へやって来た牧師いわく「奥方様、それはしかるべきことではござりませぬ。神の土地はキリスト教徒のためのもので、犬のためのものではありませぬ。わたくしはユダヤ人ですらかしこには埋葬つかまつりませぬ」。――「あら、そう」とヴァンゲンハイム主猟官未亡人。「しかるべきことではない、とおっしゃる。そりゃまあ残念ですわ。あのシュトゥッツェルは全然犬なんかじゃありませんでしたよ。人間同様の分別の持ち主でした。あの子は遺言状を作っておりましてね、その中であなたの教会に百ターラー遺贈していますし、注意書き（ノタベネ）で、もし教会墓地にちょっぴり地面を割いてくださったら、あなたご自身に五十ターラー差し上げるとのこと。さもなければ一文も、ですけど」。「そうなりますと、奥方様、もちろん話は別でござります。なにせ教会はしごく貧乏でして」と牧師は応じた。「さようさ、あの善良な信心深いシュトゥッツェルなあ。あれは人間のように大層物分かりがようござったで、人間が魔法に掛けられてああなっていたのかも知れませぬて。さあて――考えまするに――教会墓地のどこか隅っこをな。わたくしぜひとも奥方様のお役に立ちとう存じまするので」。かくして厳かな葬儀が執り行われ、下僕たちも下女たちも全員喪服を纏って、犬の柩の後えに随き従った。しかしこれには教区民がぶつぶつ言い出し、界隈の土地に噂が広まった。ヴィンターシュタインの者を見掛けると、人人はげらげら笑っておちょくった――そうでなくたってテューリンゲン人は嘲弄好き。「おいおい、おめえっちのヴィンターシュタインじゃああの犬が三昧場（キルヒホーフ）（教会墓地）に埋められてるってなあ」。そこでことは君侯の御前にまで達し、君侯は大層ご不興におなりあそばす。更に一件はゴータ公国宗教局委員会に持ち出され、かの牧師は職務上の事情聴取に喚問された。牧師は、貧寒を託つ教会のためによかれ、と考えて認可つかまつりました、と陳述したが、そうした言い訳は何の役にも立たなかった。牧師は譴責

され、シュトゥッツェルは教会墓地から掘り出された。ヴァンゲンハイムの奥方が喜捨した金子を返してもらったかどうか、なんとも疑わしい。自身この話を語ったヴァンゲンハイムのさる殿はそれについては何もご存じなかった。ヴァンゲンハイム主猟官未亡人はシュトゥッツェルを再度埋葬させたが、それは城の庭にだった。そして思い出のよすがとして石碑を建立、忘れられないシュトゥッツェルの俤をありし日そのままに刻ませた。シュトゥッツェルの不朽の美徳を後世に伝える立派な銘文も記された。そして今日なおこんな文句が聴かれる。ヴィンターシュタイン――あの犬が埋葬されてるとこねえ。

四八六　樹樹の上の魚たち

テューリンゲン山地縁辺に位置する住み心地の好い都市ヴァルタースハウゼン(7)――ラインハルツブルン修道院、シュネプフェン谷およびインゼルベルクから程遠からぬ――はその極めて古い都市紋章として三本の樹の上に鯉を一匹描いている。昔同市の上手、シュトレーメルベルク山麓に向いた森の門の外に美しい泉があり、市中へ導水されていた。ところがある日この泉が恐ろしい激流を迸らせたので、市とその周辺全域はすっかり水浸しになった。だれもかれも震え上がった。なにしろ多くの家で水が一階まで充満しており、中には上屋がない家もあったから、まことに由由しい事態だったのだ。洪水が引くと、魚がいろいろ見つかった。樹樹の上に鯉だの鰻だの鱒だのがいた。そこで、この洪水を幾久しく記憶しようと、樹樹の上の鯉を市の紋章兼象徴と定めたしだい。こうした水難が再び起こらないように――なにしろ泉は相変わらず滔滔と水を噴き出していたから――市参事会はラインハルツブルンのある修道士に来てもらって、泉を封じさせた。修道士は山の手へ上がって行き、天鵞絨の上着だか僧衣だか

の袖を泉に突っ込んで、なにやら呪文を唱えた。すると泉からの水流はぴたりと止まった。その場所は今日に至るまで天鵞絨袖（ザムトエルメル）ないし僧衣袖（クッテンエルメル）と呼ばれている。さて袖が水を一滴たりとも流さなくしたので――まことに知恵はなかなか回らぬもの――、その後市当局はヴァールヴィンケル村と交渉、樅（もみ）の市有森の一部と村の小川とを交換し、これを市へ導水した。市当局は聡明だったわけ。さもなければヴァルタースハウゼンは水飢饉（きゅう）に陥り、同地産の上物麦酒（ビール）も醸造されなかったであろう。

四八七　テンネベルク城の白衣夫人

ヴァルタースハウゼン市のすぐ向こう側にテンネベルク城がある。楽天方伯（デア・フロイディゲ）フリードリヒが生まれたばかりの息女を連れて行き、洗礼を受けさせたところである（ＤＳＢ四六九）。この城は方伯アルブレヒトの子息〔＝アピッツ〕も〔その母〕クンネ〔＝クニグンデ〕・フォン・アイゼンベルクから受け継いで暫（しばら）く所有していたが、まもなく明け渡さざるを得なくなった。テンネベルク城には白衣を着た女性の姿の幽霊が徘徊（はいかい）する。これはしばしば小さい明かりを見掛けることのある塔から出て来て、部屋部屋を通り抜け、片手を頭に――被（かぶ）っているはずの冠か何かを摑（つか）もうとするかのように――挙げ、それから探るように床に目を落とす。かつて一人の貴婦人が堂堂たる伴回りと共に城へ到着、滞在したのだが、戸外へ足を踏み出すことは二度と再び許されなかった。彼女の居場所は例の塔で、白い長衣を纏（まと）っていた。一体どこのだれなのか、全く分からなかった。イングランド王ヘンリーの亡くなったとされた妃（きさき）アンナ――生まれはクレーフェの公女[8]――だ、との好い加減な噂が流れただけである。本物の王妃アンナではなく、アンナだと自称する別人で、だからこそ幽閉されているのだ、と唱える者もあった。もっとも、女性

がそんじょそこらの女詐欺師なら、そんなに大騒ぎせず、はたきを渡し〔＝公衆の面前で笞打ち[9]〕、国外追放処分にしただろう、というのが大方の意見だった。女性が王妃であるにせよないにせよ、真相は明るみに出なかった。しかし、彼女は辛い目に遭わされ、監視され、気が触れてしまい、悪魔が彼女を責め苛み、ひどく苦しめ、とうとう彼女は囚われたまま死んだのである。そこで今彼女は白衣夫人となり、ほとんど荒廃した城内の、昔の狩猟の絵と古ぼけたがらくたで一杯の広い部屋部屋をさまよい歩き――失われた王冠を探している。

四八八　耳を付けた

ヴァルタースハウゼンから遠からぬところにオーアドゥルフの町[10]がある。町の向こう側には城山もあるが、城はとっくになくなっている。城山の麓ではヘーアリングス泉（綴りはHerlings-あるいはHörlingsbrunnen）が湧き出ている。時折真昼刻に大きな鍵束を提げた白衣の乙女が城山からヘーアリングスブルンネンに降りて来て、泉で沐浴し、また城山へ上がって行く。どういう条件で乙女が救済されるかはだれも知らない。この悪い噂の場所にさしかかると、それだけでもう体がぞくぞくする。土地の衆はよく妖怪変化を見掛けるが、黙って避ける。峡谷にはテューリンゲンに発する急流オーレが流れている。水源は遙か高みのオーバーホーフの近くである。昔この周辺は水が不足だった。ある時さる修道士が僧衣を纏って山に登った。修道士は占い棒[11]を携え、探した。棒がぴくっと動いたので、そこの地面に片方の耳を付けたところ、地下で泉が流れている音が聞こえた。そこで掘って、オーレの水源に日の目を見せたというわけ。

この界隈へボニファチウス――テューリンゲンの使徒――が布教に来て、住民を改宗させ、土地と森を授けられ

た。大天使ミカエルが大いなる光輝に包まれてオーレ川の川辺で聖者に顕現し、使命を続けるよう鼓舞した。荒寥とした森林で聖者とその伴人たちは全く食糧が不足していたのだが、オーレ河畔で一人の漁師が彼に食べ物を提供した。そこで聖者はオーアドゥルフに大天使ミカエルのために教会と修道院を建立して奉献した。これらは九〇九年フン族によって破壊されたが、後に更に立派に再建された。

四八九　聖ヨハンニス教会

聖者ボニファチウスは当初オーレ河谷とテューリンゲンのこの地域に滞在、それから足を伸ばしてアルンシュタット[12]、エアフルト、ザルツァ、ランゲンザルツァ、トーマスブリュック、ファルグーラ、トレフフルト、クロイツブルク、ザルツンゲン等でキリストの教えを説き、教会や修道院を建立したので、最初彼が小さい教会を造ったのはアルテンベルク山頂で、聖ヨハンニスを顕彰して奉献したとのことである。そこへ大勢の民衆が引きも切らずにやって来るようになった。そうなると小さな堂宇では夥しい信仰告白者を収容できなかったから、かの敬虔なお人は戸外へ出て説教した。するとところが、数え切れない大鴉小鴉の群れが寄り集まり、説教者の言葉を掻き消すほど、こやつらの流儀でぎゃあぎゃあ啼き交わした。そこでボニファチウスは諸手を差し伸べて、鳥たちを追い散らしてくださるよう、神にお願いした。――と、たちどころに群れは舞い上がって飛び去り、聖ヨハンニス教会が建っている限り、この種の鳥はついぞ見掛けられなくなった。さて、教会の周囲は最初のキリスト教徒たちの埋葬地にもなった。しかしやがて、山登りしたり、死者の亡骸を高みへ運んだりするのが重重難儀になると、建物が壊れかけて来たこともあって、人人はこの小教会を解体、石材や梁の材木を運び下ろして、アルテン

ベルク村が建設されていた山麓に建て直した。ところが翌日になると、何もかもなくなっていることが再三。教会は元の場所にちゃんと組み立てられて戻っていた。聖ヨハンニス教会は谷間にいたくなかったのである。そこでこれはそのまま置いておくことにして、山麓に――とは申せこれも充分高い位置だったが――村を見下ろす新しい教会――聖イマヌエル教会と呼ばれる――が建立された。永劫の流れである時の経つ内にとうとうヨハンニス教会には詣でる人もなくなり、建物は高い山巓に吹き荒ぶたびたびの嵐に敗退、僅かな遺構を除いて跡形もなくなった。ある日のこと、一人の木樵が大層な老樹の下枝に極めて古めかしい鍵がぶらさがっているのを見つけた。ヨハンニス教会の鍵だった。その後ある信心深い木樵の発議で山上に高い燭台〔型記念碑〕が設けられることになった。これはボニファチウスの記念碑かつこの地域における彼の教化活動の思い出としてお祭り騒ぎで奉献され、キリスト教三宗派の聖職者らが麗しくも同胞として宥和し、もろともに祝福した。燭台はいまだに建っており、テューリンゲンの燭台と呼ばれる。周辺の土地から遠望できる。

四九〇　アーゾルフェロート

オーアドゥルフから行程数時間、アルンシュタットの後方半時間ほどのところにケーフェルン城があった。昔ここにジッツォ[14]という名の敬虔な伯爵が住んでいた。アルテンベルク[15]周辺の森林区域までを所領としていた。かれは聖ヨハンニス教会の後背地にこれまた小さな教会を建立、聖者ゲオルクに奉献した。これがあった場所を森暮らしの人たちは今日に至るまでジンゲルゲンと呼んでいる。かつてマルク伯にしてベルクの殿エーバーハルト[16]はケーフェルンブルクを訪ねて――これは先にDSB一〇七で記した――ジッツォ伯、伯の奥方ギゼラおよび伯夫妻の子

息ハインリヒ、ギュンターとともに信仰篤いもろもろの事業についてまことに多くのことを語り合った。エーバーハルトは巡礼として懺悔行の途次にあり、騎士としての華飾・体面を悉く棄て去っていたのである。ジッツォとエーバーハルトはアルテンベルク山頂のゲオルゲン教会をどこかの谷に移し、その傍に修道院を建てようと意見が一致し、ラインハルツブルン修道院の所在地と同様こよなく美しい谷を見つけた。この谷はゴータとエアフルトに向かって平地が開けており、山山や森林に気持ちよく囲まれ、敬虔な師父がたのためにこの上なく素晴らしい養魚池を幾つも作れる(17)愉快なせせらぎが貫流していた。アーゾルフなる男が既にここを開墾、耕作できるようにしていたから、この新開拓地はその名に因んでアーゾルフェロート(18)と呼ばれたが、聖ゲオルゲン教会が谷に降りて来る――これはアルテンベルクを去るのを聖ヨハンニス教会みたいに厭がりはしなかった――と、ゲオルゲン谷という名称の方が専らになった。さて修道院はシトー会派修道士たちに占められ、エーバーハルトが初代修道院長になった。しかしやがてこうした地位は彼にとって高過ぎる、僭上過ぎると思われるようになったので、辞任して修道院を去り、シャンパーニュのモリモン修道院で牧人となった(19)。一方ゲオルゲンタール修道院はラインハルツブルンと並んでテューリンゲン有数の修道院の一つとなったが、現在は四囲の壁と立派な養魚池を除き修道院の大半が無くなっている。とはいえまことに壮麗な場所ではある。昔の修道院の壁に囲まれた敷地内にはどうやらかつての礼拝堂の名残と覚しきものが小さな穀物倉となっている。この建物には技巧を凝らしたゴシック様式の薔薇型窓(20)がある。巷説によれば、この窓の円周はエアフルト大聖堂の巨鐘「栄光ノまりあ」の円周と正確に一致する由。薔薇の下には莫大な財宝が埋められている、さよう、薔薇ノ下――神秘の薔薇の封印の下。現在のゲオルゲンタール教会はかつての修道院の羊小屋に過ぎないそうな。昔の教会は何ら跡を留めていない。富裕だった修道院をかの農民戦争が劫略かつ破壊したのだ。

四九一　ルターの泉

ゲオルゲン谷から上手へ遡ること一時間、同じ谷合いに家数の多い大きな村タンバハ[21]がある。その近くには地域伝説がまことに夥しい。ここにはかつてほぼ全ての巌山の頂きに小城があった。その名は森の巌、鴉砦、高き物見、鷹の巌。ファルケンシュタイン城からは〔城主の盗賊〕騎士が身代金を支払えなかった虜囚を突き落とし、その血が飛び散って巌肌の白い花を濡らし、花は紅く染まった。これは今日血染め撫子と呼ばれている。ここではかつて山の幸〔＝鉱産物〕も豊かだった。もっとも現在は涸渇している。ここには至るところ素晴らしい泉、湧き水がある。ルター博士が一五三七年シュマルカルデン[22]で諸侯会議に列席していた折、ひどい病状を発症[23]、あわや死ぬかと危ぶまれるまでになった。そこで彼はどうしても家族の許に帰りたい、と言い出した。そこでザクセン選帝侯[24]は自分の馬車、輓馬、扈従を与えた。レンシュタイクまで長い登り坂で、頂きに薔薇の園という平地があり、それからまた谷へと降るのだが、ルターは灼けるような渇きを覚え、（旧）道の近くにある泉の畔で馬車を止めさせた。この水を飲むととても楽になったので、タンバハの旅籠屋に着いたルターは炭を手に取り、壁にこう記した。「たんばはハ我ガぷにえる――ヤコブが神と格闘した地の名――ナリ。カシコニテ主ハ我ニ現レタモウ。M・L・[25]」。これは長いことその家に残っていた。そしてルテルスが水を飲んで恢復した泉は今日なおルターの泉と呼ばれている。

あの界隈の山山の胎内は極めて水が豊かだ、と信じられているので、巷間このように伝えられている。エアフルトでは毎年シュペア丘（海抜二七三九メートル）のために、胎内を開きませんように、と祈りが捧げられるのだ、

と。なにしろ、いつかそうしたことが起こるだろう、という古い言い伝えと予言があるとか。――もしそんなことになったら、厖大な水量がヴェーデル川に流れ落ち、更にアプフェルシュテット川に入る。この川はオーレ川に合流してコラー川になる。――さてこのコラー川だが、これはそうでなくても時折激流となり、ごろごろと転石を押し流し、狂暴になる代物だから、ましてこんな事態となれば、ゲラ川にどっと流入して、エアフルト一帯を広範囲に亘って水浸しにしてしまう。そういうしだいでエアフルトでは永代弥撒が執り行われ、絶えずシュペアヒューゲルのために祈りが捧げられるのであって、同地の聖ペトリ修道院にはその謝礼として一区画の森が寄進されたのだ云云。なお、シュペアヒューゲルの長い尾根全体に古いレンヴェークが延びている。[26]

四九二　悪魔の浴場と幾つかの悪魔の環

レンヴェークはシュペア丘からテューリンゲン山地の脊梁部伝いに途切れることなく延びている。一方はインゼル山方向へ、他方はベーア山方向、シュネーコプフ峰[28]近傍へと。ハールツ山地の最高峰ブロッケンの頂き同様、シュネーコプフの頂きも悪魔の居場所であり、〔悪魔の〕遊び場、運動場、駈けっこ場と呼ばれるところがある。悪魔は神に呪われた遊び地獄〔＝博奕場〕の浴場の一つであんまりかっかとなり過ぎると、ちっと涼もうかい、とシュネーコプフ山上の悪魔の浴場にやって来る。それから人間社会の環がもはやお気に召さなくなると、ここの悪魔の環へと登って来る。ここだと悪魔は頗る居心地が良く、通る旅の衆をからかい、たぶらかす。悪魔で間に合わないとなると、シュネーコプフ峰からほんの半時間ほど下ったところにあるシュミュッケ[31]に鎮座ましますかの太っちょの縮れ毛頭[32]――シュミュッケの誉れ、表看板――が悪魔に負けず劣らず人をおちょくるのだ。シュミュッ

ケには若駒牧場がある。ある裕福な田舎者が飛び切りすてきな子馬をここに預けていた。しかし不幸に弄ばれるとなるとねえ。――馬を検分しにこの御仁がここへ登って来た折も折、馬はいなくなって、どこにも見つからないという始末。さてこそ一大事、男はもう無我夢中、馬を探しに自分も森の中を走り回った。「悪魔の野郎め、あれをどこへやった。悪魔の野郎め、あれをどこへやった。」と呟きながら。そうしている内に知らず知らず悪魔の浴場の縁に出た。するとなんと――悪魔の野郎が馬をそこへ突っ込んでいた。下半身のそのまた半ばが外へ出ているだけ。馬の持ち主はかわいそうにびっくり仰天、頭の上で両手を打ち合わせ、大声で叫びまくったが、聞きつけた者は皆目おらず、だれも助けに来てくれない。男独りでは馬を沼から引っ張り出すことはできっこない。それでも彼はどろどろの沼地を憐れな子馬の傍まで一所懸命近づいて考えた。「糞忌忌しい悪魔野郎、てめえなんぞにこんな立派な尻尾をやりはしねえぞ。これだったら、あの縮れ毛頭がおれから買い取って鳥羽をこさえて、杜松鶫を捕まえることができらあ。やっこさん、友だち連にくれてやるって約束するが、みんな自分で喰っちまうけどな」。そして鋭利な懐中小刀を抜くと、臀部ぎりぎりで尻尾をすっぱり切り落とし、再びシュミュッケへ引き返した。戸口に立っていたヨエル氏[34]が愛想良く呼び掛けて来た。「いたぞや、いたぞや」。――「何がいたって」と吝ん坊が訊く。「あの子馬だよう」。「どこに、どこにだ」。「さあて、食堂かも知れんし、屋根裏部屋だかもなあ。ところでよ、おまえさんが持っとるのは一体何だ。もしかして急に馬の尻尾を飾ったトルコ[35]の殿様におなりあそばしたのかね」。馬の持ち主はこれを聞き流して厩に駆け込んだ。するとそこに自分の若駒が立っていた。――しかしなんたる悲劇、尻尾がすっぱり切り落とされていたのである。その尻尾は田舎者が手にしているやつで、馬の尻からはまだ血が出ていた。悪魔が男を嘲弄したわけ。男はこんなどじを踏んだ以上、山の高みのシュミュッケで散散嗤われざるを得なかった。縮れ毛頭は馬毛を買ってはくれず、杜松鶫を振る舞いもしなかった。

ゴルトラウター[36]の鉱夫だが、とある月の晩、山の高みで背が高く堂堂とした騎馬の男に出逢った。男は赤い外套（マント）を纏（まと）っていた。悪魔の浴場（トイフェルスバート）へはどう行ったらよいか訊（き）かれたので、道連れになって案内してやった。目的地に着くと、男は馬から下り、鉱夫に手綱を預けると、突然悪魔の浴場（トイフェルスバート）に潜った。鉱夫は震え上がり、馬はごうっと焔（ほのお）の鼻息を吹き、三本脚だけで立っていた[37]。なにせそれ以上脚の持ち合わせがなかったものでね。暫（しばら）くすると馬乗りは浴場から出て来て、乗馬にまたがると、山を下り、殺しの場（モルトフレック）[38]を越えて暗闇山（フィンスターベルク）[39]指して立ち去ったが、その前に案内人に「あんたの背負（しょ）い籠（かご）に葉っぱを詰めな」と呼び掛けた。――鉱夫は言われた通りにし、嶮岨（けんそ）な道をゴルトラウターへと下って行った。しかし籠がどうにも重過ぎる上、道を教え、三本脚の馬の番をしてやった報酬としてはあんまりひどい――いやそもそも報酬とはいえない――と思われたので、ぶつくさこぼしながら、籠から――汚らしく情けない――葉っぱをまた投げ棄てた。翌朝鉱夫の女房が弁当を籠に入れようとすると、籠の側面にまだいろいろな黄金（きん）の小さな葉っぱがくっついていた。これこそ貧乏人にとってはなによりの元気恢復（かいふく）の栄養剤、鉱夫夫妻は金持ちになった。けれども鉱夫が他の葉っぱを投げ棄てないでいたら、ヘンネベルク伯爵様のところへ出掛けて行って、「ご領地のお値段はいかほどでござんしょう」とお伺いを立てることだってできただろうに。

四九三　猟師の記念碑（イェーガーシュタイン）

幾つかの悪魔の環（トリフェルスクライス）から程遠からぬ、シュネーコプフの森の中、樹樹の下にぽつんと記念碑が立っている。グレーフェンローデのある森番（フェルスター）――その担当管区はこの高みにまで達していた――がここで死を迎えた。彼には狩猟助手（イェーガーブルシェ）が一人いた。実（じつ）の従弟（いとこ）で名前は本当にカスパールだった[40]。森番はこの若者が大いに不満で、主人として

きつく当たっていた。その頃シュネーコプフ管区の高みに狩りの的とするのに絶好の、まことに大きくよく肥えた牡角鹿(ヒルシュ)――数多い枝角、それも十六以上を持った――が一頭、しげしげ見掛けられた。そこで森番は、この牡角鹿(ヒルシュ)を撃て、とカスパールに命じた。けれどもカスパールはどうしてもこの牡角鹿(ヒルシュ)が撃てなかった。なにしろごく接近して狙いをつけても、常に撃ち損なったのだ。そこで家に戻るとへまさ加減をいやというほどいびられ、からかわれる羽目となり、界隈(かいわい)の狩猟仲間が高みのシュミュッケやアウアーハーンやあるいはオーバーホーフなどで寄り集まった大一座(おおいざ)ともなると、森番はカスパールの面前で再再「いやあ、わしの従弟のこのカスパールちゅうのはたいした当たり屋でなあ。真っ暗闇でだって的に命中させるのよ。ただまあ、何を撃ったかはだれにも皆目(かいもく)分かりゃせんがの」といった具合におちゃらかし、更にいろいろ当てこすった。これにカスパールはひどく悩まされた。年取った狩猟仲間に彼の友だちがいたが、この男も同様癪(しゃく)に障っていて、とどのつまりカスパールにこう教えた。「カスパール、あの高みの牡角鹿(ヒルシュ)の一件だがな、ありゃあどうもまともじゃねえ。分かりきったことよ。おまえ、鉛の弾丸(たま)を使っちゃあ未来永劫(えいごう)当たりっこねえぞ。明日朝早くゲールベルク(41)に登ってって、あすこの硝子(ガラス)製造所で硝子の弾丸を作ってもらいな。すぐできるさ。そしたらそれを一切口を利かずに銃に籠(こ)める。で、夕方、また待ち伏せ場まで登ってくんだ」。カスパールはこの忠告に従い、じっと待ち伏せしていると、繁(しげ)みの中でポキポキと音がし、堂堂とした牡角鹿(ヒルシュ)が枝角を振りかざして現れた。そこでカスパールはしっかり狙いを定め、轟然(ごうぜん)と銃を発射した。弾丸はさながら稲妻の火矢のように牡角鹿(ヒルシュ)目掛けて飛び、牡角鹿(ヒルシュ)はへなへなとくずおれた。とうとう首尾良く仕留めた、と喜び勇んで駈(か)けつけたが、頸(くび)に止(とど)めを刺す必要はなかった。相手は死んでいた。――さはさりながら、それは全然牡角鹿(ヒルシュ)ではなくて、上役のヨーハン・ヴァレンティン・グラーナー氏だった。氏は猟師の邪法を用いてしょっちゅう牡角鹿(ヒルシュ)に変身していたのである。驚天動地の事件だったが、できたことはできたこと。なん

ともいたしかたない。カスパールは事のしだいを申し立て、グラーナー氏はきちんと埋葬され、グレーフェンローデの村塾の師匠(シュールディーナー)[42]は新しく羽根筆(ペン)を削り、教会記録簿にこう記入した。

主(しゅ)の紀元一六九〇年九月十六日、ザクセン侯国の森番ヨーハン・ヴァレンティン・グラーナー氏は夕刻四時過ぎ、狩猟助手たりしその従弟カスパールにより、シュネーコプフの森において、牡角鹿(ヒルシュ)の姿に身を窶(やつ)せる折、突如顳顬(こめかみ)より頭部を撃ち抜かれたり。

四九四　山山の不思議

ベーア山(ベルク)とシュネーコプフの展望塔が立っている山の尾根から幾つもの湧き水が東へ、また西へとさまざまに谷へさらさら流れて行く。西を指して轟轟(ごうごう)と流れる愉(たの)しいラウター川[43]の河床にはかつて純金があった。黄金(ゴルト)ラウター村の名はこれに因(ちな)む。村の周囲の山山には貴金属が昔も今もどっさり産出する。ゴルトのせせらぎが流れ出す牡角鹿頭山(ヒルシュコプフ)[44]の下、山の胎内には黄金の牡角鹿(ヒルシュ)が一頭埋まっている――もっともこの採掘場は蹄鉄一つで塞(ふさ)がれているが[45]。採掘場のある巌(いわ)が希望の壁(ホフヌングスヴァント)なる名なのは意味深長。シュネーコプフの中腹に黄金の橋(ディ・ゴルドネ・ブリュッケ)という村がある。ここを通って富がたっぷり運び出されたわけ。東へ流れる泉は愉しいゲラ川となり、誉むべきイルム川となる。そして至るところで、魔法の掛かった場所、秘められた宝物、宝の番をする見張りの乙女、首尾良く宝を手に入れた人人――彼らが特別な場所でうまい時間に拾い上げて運んで来た物、葉っぱとか蛙(かえる)とか甲虫(かぶとむし)とか蜘蛛(くも)とかが全て黄金(きん)になる――に関する伝説が語られる。イルム峡谷の上手には青巌(デア・ブラウエ・シュタイン)[46]がある。殺(モルト)しの場(フレック)の尾根[47]のすぐ下、

フライバハ[48]の畔である。ここには希望と呼ばれる場所もあり、周辺は不気味な雰囲気である。不毛荒寥の主がここで思うが儘に振る舞い、ふざけ散らしている。幾つかの城の廃墟は秘められた地下の穴蔵に少なからぬ財宝を隠している。またそこには数数の酒樽もあって、樽の板はとっくの昔に腐っているが、酒石が水晶の容器のように葡萄酒を包み込んでいる。ここの大小の谷谷で、かつてヴェネチア人が入り込み、銀の採掘をしなかったところは一つとしてない。火男[49]どもがさすらい歩く。とりわけ生きていた時不正を働いたり、民衆をあまりにも苛酷にいたぶった領地管理官や森番である。こうしたことどもを物語るとなると、差し当たってどこから始めたものか、さて見当も付かない。

四九五　赤巖

山間の都市ズール[50]――この地では主の紀元一二三八年五月五日、大嵐の際肉の雨が降った[51]――近傍には斑岩でできた巖があり、赤巖と呼ばれている。この巖の中には一人の乙女が呪封されていて、あのアイゼナハの乙女のように[52]、続けざまに何度も何度もくしゃみをする癖がある。この巖はズールと町から半時間ほど離れたところにある旅籠「快漢亭」の中間にある。かつて婚礼行列が楽隊を先頭に大騒ぎしながらやって来た。新郎新婦と婚礼の客たちが快漢亭で楽しくやろうとしたしだい。すると赤巖の中から皆の心魂に徹するような鋭い声が聞こえた。いわく「今日は紅顔、来年は白骨」。――一年後若妻は死んだ。それからというもの、快漢亭で大いに祝おうと、町からやって来るにせよ、山の方から下りて来るにせよ、婚礼行列は黙りこくり、しんと静まりかえって赤巖の傍を過ぎることにしている。

四九六　ハインリクスの魔法

ズーラ[53]の下方にハインリクス[54]の村がある。この村を見下ろす石造りの城には呪封された財宝があるが、これはなまなかなことでは取り出せない。ある牛飼いが山の高みで白百合を摘んだ。そして同類と同じく、山の胎内に一番大事な物〔＝開錠根である白百合〕を忘れて来た。巌窟の扉が閉まる時、踵を挟まれて怪我をし、長いこと療治をしなければならなかった。

かつてハインリクスに三人の大物撃ち猟師がやって来たことがある。この連中の腕前はまことに確かなもの、フランクフルト・アム・マインでエッシェンハイム塔の風見に「九つ当たり」の射撃をやってのけたあのヘンゼル・ヴィンケルゼー（DSB六九）さながらだった。彼らは――その頃からもう評判が高かったので――旅籠「黄金牡角鹿亭」に泊まり、地下の酒蔵がある奥庭で上等の麦酒やらなにやらをきこしめしていた。するとそこで酒を酌み交わしていた客たちの間で巧妙な射撃が話題に上り、猟師の気の利いた伎倆の数数が語られた。なにしろ界隈には猟師、ことに射撃の上手がうようよいたし、当時は、この三人のように隠れた名手がたくさん存在したけれども、まだ獲物に事欠かなかったからである。皆いつも確実に当たる弾丸とかといったおもしろい話の種を心得ており、手柄自慢の者もだれかれとなく居合わせたが、やがて、例の三人が大物撃ちだというなら、ぜひ手並みを拝見したいものだ、とあいなった――三人は別に自分からそう言い触らしたりはしなかったのだが。すると彼らの一人が三つ葉の和蘭紫雲英を摘み、もう一人が梯子を持って来て、これを黄金牡角鹿亭の奥庭を穴蔵のところで遮断している建物の石壁に立てかけた。三人目は旅籠から外に出て、道を横切り、向かいの家並みまで行った。旅籠

の門から玄関までの門通りは開けていたし、屋内通路の天井は高く、奥庭まで障害物は無かったので、〔梯子の天辺に附けられた〕和蘭紫雲英は道の向かい側からちゃんと見えた。彼我の距離は九十歩だった。それから射手たちは和蘭紫雲英目掛けて火蓋を切った。各各ただの一発づつだった。撃つたびに和蘭紫雲英の葉が一枚消し飛んだ。山なりに三つ並んだ弾痕は今日に至るまでありありと残っている。そして三人の大物撃ちは何も言わずに村から立ち去った。

ハインリクスの数人の農夫の家畜に魔法が掛けられた。牛酪ができなくなったのである。そこで農夫らはある魔女の許に行き、どうしたらよいものか、と相談した。すると魔女は農夫たちにこう指図した。「あんたらはありとあらゆる悪魔の名においてどこか陶工のところに行きな。そこでやっぱり悪魔の名において壺を一つ注文するのさ。陶工もありとあらゆる悪魔の名においてその壺を作らなくちゃいけない。壺ができたら四頭立ての馬車を仕立て、ありとあらゆる悪魔の名において取りに行く。そうして値段の駈け引き無しにして、くれ、と言われただけの代金を払う。で、この壺に乳をだんだんに入れては、まただんだんに出す」。ハインリクスの農夫らはこうした魔女および悪魔の助言にそっくり従った。この村では——全ヘンネベルク伯爵領がそうだったのだが——魔女信心が大流行で、さるザクセン公妃——遺産相続でこの伯爵領の土地の幾分かがその配偶の手に落ちることになった——は「わらわはあのような黒い雌鶏の領分[55]にはまいりませぬ」と宣言、事実足を踏み入れなかったそうな。もっとも、夫が相続する前に彼女は死んだのだが。——しかしながら、壺が陶工のところに取りにやられた時は目引き袖引きという有様だったし、壺には十五グロッシェンも支払われたし、四頭立ての馬車でだったし、という具合なので、壺が使われない内に事のしだいは広く知れ渡り、宗教局にまで達し、どたばた悪魔騒動は恐怖の結末を迎えた。小百姓連は懺悔襯衣を着て教会規定の悔悛行を務め、ハインリクス村で一年に生産される牛酪総量の価

格を上回る罰金を支払わねばならぬとされ、問題の壺は皮剝場（シンダースラーゼン）[56]で刑吏の手により打ち砕かれ、この同じけっこうな場所で例の魔女が火炙（ひあぶ）りの刑に処された。小百姓連にとって不幸中の幸いは、壺がまだ使用されていなかったこと。さもなければ彼らも魔女もろとも情け容赦なく焚殺（ふんさつ）されざるを得なかったろう。

四九七　酸塊（すぐり）の生け垣

ハーゼル河谷のハインリクスから谷を下るとディルシュテットなる村に達する。ここにマルシュトとしか呼ばれない場所がある。実はマールシュテッテ[57]なのだ。以前は新郎新婦が婚礼の客たちとともに旅籠屋（はたごや）へ踊りに行く時、この場所を通っていた。ズーラの人たちが快漢亭（ツム・フレーリヒェン・マン）へ赴くのにあの赤巌（デア・ローテ・シェタイン）の傍を過（よ）ぎったように。路傍には昔酸塊（ハルヒェル）（シュタッヒェル）の生け垣があった。かつてやはりある新婚夫婦が演奏する楽士らとともにここを通り掛かると、生け垣の中から一羽の小鳥が高らかにこう囀（さえず）った。

今日のもてなし鳴り物入りだが、
来年は唄でのおもてなし[58]。

年が改まると、葬列が挽歌（ばんか）に送られてマルシュトを通った。これはあの若夫婦だった。彼らは二人ながら急病で死んでしまったのである。以来もはや新婚の行列はマルシュトを通ることはない。旅籠屋に赴くならうんと遠回りしなければなるまい。

四九八　呪われた村

ディルシュテットの区域内に廃村がある。その名はガーメルスハウゼン[59]。昔村があったし、今もある。ただしだれにも見えない。これを目にするのは良いことではない。およそ百年ほど前、ディーツハウゼン（ディルシュテットとハインリクスの中間にある）の軍医[60]がローラ川とマリスフェルトの間に拡がる寂しい土地――ゲルツ川が貫流している――を通っていたところある村に入った。村人たちが教会に詣でるのを目にし、その服装がなんとも古風なのを訝しく思った。ローア[61]――ここの人たちの装いは当世風だった――まで来て、一体あれはどういう村か、と訊ねたが、だれも教えることができず、あんたの説明するような村はゲルツバハ沿いに無い、と言われた。

時代は同じ、ミカエル祭[62]の日でディルシュテットでは教会堂開基祭が行われていた。ヴィヒツハウゼン（ディルシュテットとディーツハウゼンの中間にある）の靴職人で単純素朴な男がマリスフェルト指して歩いていた。その辺りへ行くのはこれが初めて。途中ある村の近くを通り掛かった。村では雄鶏どもが啼き、犬たちが吠えていた。男のすぐ前を女が歩いていて、村の方へ急いでいた。男は道を訊こうと女に呼び掛けたが、女は聞こえなかった様子で、すっかり草が生い繁っている小径を踏み分けて行った。男の進む道は脇へ逸れて、水草に覆われた池の畔を通っていた。男は村人がこの池をなげやりにほったらかしているのが不思議でならなかった。マリスフェルトでの用事を終えて、家路につくと、例の池も村も消えていた。

靴職人がこの話をした隣人はこう言った。「おぬしゃあ、その女に随いて行かなんでよかったよう。そんなことしたら、多分二度と家に帰れんかったろう。おぬしが見たなあ呪われた村のガーメルスハウゼンさね。あそこいら

へんはほんとに気味が悪いったら」。

四九九　鉱夫と花嫁の話

ディーツハウゼンの谷から山道がベンスハウゼンに通じている。ベンスハウゼン周辺には昔幾つも採掘場があり、村には鉱夫たちが住んでいた。彼らの一人が土曜日に告解に出掛け、翌日の日曜日には聖体拝領に行くつもりだった。さて、古い習慣では、告解を済ませた後はもう働くべきではなく、いろいろ信心深いことを考え繞らすものだった。しかしこの鉱夫は少しばかりの賃銭を失いたくなかったので、告解したのに再び村を出た。ところが鉱坑に入ったとたん、縦坑がどっと崩落、彼は跡形もなく行方知れずとなった。百年経って漸く他の鉱夫たちがそこまで掘り進み、切羽を作ったところ、坑道で大きく長い髭を生やした鉱夫が一人、どうやら眠っているらしいのを見つけた。一同が男の周りで喋っていると、男は目を覚まし、すぐに「もう鐘が鳴っただかね。わしゃあ聖体拝領せにゃなんねえ」と訊いた。他の者が「今日は日曜じゃねえし、ここは教会でもねえ。今日は仕事日だに」と言うと、「だけんどよ、わしゃあ昨日の夜告解に出掛けたで、今日は聖体拝領に行かにゃあ」との返辞。そこで皆は男を鉱坑から連れだし、教会まで送り、司祭を呼んで来た。司祭が聖体を拝領させたところ、男は拝領したとたん、くずおれて一山の塵と化した。

似たようなことがベンスハウゼンのある花嫁に起こった。この娘は強いられて結婚する羽目になったのだった。婚儀の前、二度目に鐘が鳴った時、彼女はきちんと衣装を調えていたが、ひどく涙を流し、「ほんのちょっとの間独りきりでお庭に出させて。あたし、いい空気を吸わなくちゃ」と言った。なにしろ胸が締め付けられるように苦

しかったので。庭で身の不幸せを痛切に嘆き悲しんでいると、一度も見たことのない見知らぬ男性が歩み寄り、なぜ辛がっているのか訊ねた。そこで娘は何もかも打ち明けて訴えた。男性は穏やかな声音で彼女を慰め、一緒に歩き回り、いろいろなことを語らったが、庭を誉めそやしもし、「わたしの庭もかなり見事なのです。あなたがご覧になりたければ、すぐお隣なのですよ」と誘った。すると小さな門が開いており、二人は中へ入った。花嫁はこれほど多くの景物があるこんなに素晴らしい庭園を見たのは初めてだった。この上もなく美しい花卉や鳥類、噴水、並木道、園亭、林、芝生、ありとあらゆる種類の木の実、草の実。若い花嫁はそれらを眺めて楽しみ、押しひしぐ胸の苦悩を忘れた。男性との会話はまことに快かった。突然鐘が鳴り響き、花嫁は義務を思い出し、男性に鄭重かつ淑やかに別れを告げ、再び自分の家の庭に戻り、そこを抜けて家に入り、新郎やお客様たちと共に教会へ行こうとした。ところが何もかも様変わりしていて見慣れない物ばかり。それから見慣れない人たちが彼女に、彼女のなんとも古めかしい花嫁装束にびっくりして目を瞠り、「何の御用でしょうか、どちらからいらっしゃいました」と問い掛けて来た。――新郎も父親も母親も、そして婚礼の客たちもいなかった。調べた結果、次のようなことが判明した。百年前ある花嫁が鐘の鳴るちょっと前に庭に出て行って、再び戻って来なかった、と。婚礼の道具を借りにキフホイザー山に登り、下り道ではそれらを担ぐのが重くてならなかった――寄る年波という荷物が重くのしかかったに過ぎなかったのだが（ＤＳＢ四三〇）――あの許婚者両人のように。この花嫁は、自分がもう余所者に過ぎなくなった現世から、かの優しい殿方――我らが御主にして救世主たるキリストに他ならぬ――のいる庭園へと帰りたくてたまらず、その後間もなく天国の園生に入った〔＝亡くなった〕。

五〇〇　ファールの種（ファールザーメン）

ベンスハウゼンのある家には猟師の亡霊が出る。ファールの種（ファールザーメン）（羊歯の種（ファルンザーメン）というべきか[63]）を手に入れたりしたからである。ファールの種を手に入れるのは、太陽を撃ったあのディトマルシェンの猟師（ＤＳＢ一七六）が用いたような邪悪な技（わざ）なのだ。もっともベンスハウゼンの男は聖餅（ホスチア）を必要とはしなかった。男は夏至の日、太陽が中天に達した時、太陽を撃たねばならなかった。すると血が三滴落ちて来た。男はこれを受けて取って置くことになったのだが、これすなわちファールの種。さてこの猟師、ファールの種を身に着けている限り、撃ちたい物を撃つことができ、決して撃ち損なうことはなかった。しかしとどのつまり、至福の臨終に至ることがありっこないのは目に見えていた。かねがね猟師は、いつかおれが恐ろしい唸（うな）り声を出すのが聞こえるだろう、そうしたらおれはおしまいだ、と言っていた。事実それが起こり、年貢の納め時となって、悪魔が彼を攫（さら）って行った。後にフィアナウ[64]への街道にこの猟師が古風な服装で坐（すわ）っているのがしばしば見掛けられた。縁を巻き上げた小さな三角帽を被（かぶ）り、三匹の小さい犬を侍（はべ）らせていた。あのヴォーデ[65]のように両脇に一匹づつ、そして膝に一匹。

五〇一　ホレ夫人と忠実なエッカルト

ベンスハウゼンの下手にシュヴァルツァ[66]の町がある。昔ここを降誕祭（ヴァイナハテン）の時期にホレ夫人が荒れ狂う同勢と共に通り過ぎた。先頭には忠実なエッカルト[67]がいて、出逢う人人に、危ない目に遭わぬよう引き下がっていろ、と警告し

た。なにしろ同勢は道幅一杯に拡がっており、こうした魑魅魍魎どもにぶつかったら、ろくなことにならなかったからである。妖魔の群れが轟轟と町を押し進んで行った時、二人の男の子が道にいて、麦酒がなみなみと入った把手付き容器を持っていた。麦酒はシュヴァルツァのちょっと下手、道端にある水車小屋付き居酒屋「炭焼き亭」――いつも上等の麦酒があり、大勢の客で賑わっている――で買ったもの。この男の子たちも忠実なエッカルトに脇へ寄っているよう命じられ、怖がって路傍で縮こまっていた。もっともすぐに見つかってしまったが。荒れ狂う猟師の一行はしょっちゅう喉を渇かしているものだから、百鬼夜行のだれかれが男の子らに近づき、把手付き容器を取り上げて麦酒をちゅうちゅう吸った。行列が去った後で男の子たちはとても心配になった。麦酒を持って帰らなければ家でぶん殴られるし、そうかといってまた買いに戻るお銭はなかったから。ところが突然また忠実なエッカルトが傍にやって来て言うことには「安心するがいい、坊やたち。おまえたちが麦酒をくれてやったのはいいことだった。さもなきゃおまえたち、頸根っこが剣呑な羽目になっていたろう。さ、安心して把手付き容器を持って家へお帰り。だがな、おまえたちが今晩出逢ったできごとを三日経たないうちに人に喋ってはならんぞ」。――男の子たちが家に着くと、把手付き容器は一杯でずっしり重く、中にはシュヴァルツァの衆がこれまで飲んだためしのない麦酒が入っていた。丁度英国の濃色麦酒のようで、テルツで醸造したかのごとく、極上上の逸品。把手付き容器は一向に空っぽにならず、麦酒を注ぎ続けた。これはまことにけっこうな話だったが――三日間が過ぎ、男の子たちが沈黙を破ると、それきりおしまいとあいなった。

五〇二　樅の木立

シュヴァルツァからシュヴァルツァ川の小暗い流れを遡ると、間もなくフィアナウ村に達する。かつてここにヤーコプという名の森番がいたが、この御仁、森に入るたびにさまざまな妖かしに再再たぶらかされた。ある時こんなことがあった。ヤーコプが待ち伏せ場に行ったところ、一頭の牡角鹿が射程に入った。ところが撃とうとすると、樅の木立が銃の前に立ち塞がり、全然撃てない。なにしろ脇へ寄れば、木立もそっちへ動くのだ。かっとして銃を肩から外し、別の場所に移ると、森の木立は消えてなくなったが、牡角鹿もいなくなった。老森番にとってこれはなんともやりきれない話。そこでドライスィヒアカー[70]に出掛け、そこに住んでいた刑吏[71]にこの一件を相談した。刑吏はさして思案もせずこう答えた。「その樅の木立がまたあんたの待ち伏せ場の前の空き地に出て来たら、鹿用猟刀を引っこ抜いて、枝下ろしをしておやんなさい」。間もなく老森番が再び待ち伏せ場に出掛けると、なんとまあ、やがて一頭の牡角鹿が姿を現した。そして樅の木立も銃口の前に立ち塞がった。森番は、刑吏に教えられたように、すぐさま鹿用猟刀を鞘から抜き、木立の枝下ろしを始めた、ところがなんとも堅い木で、枝は全く落ちなかった。けれども佩刀の鋼にかなり削り屑が飛び散った。そこでヤーコプは切るのを止めて、家に帰った。ところでフィアナウ村で一人の女が瀕死の床に臥しているのが見つかった。両手両脚に夥しい傷を負っているのだ。女がどうしてそうなったのか、だれにも分からなかったが、実はこの女は魔女で、樅の木立に化けて森番を嘲弄したわけ。なぜならヤーコプは彼女が森で薪を盗んでいる現場をこれまでたびたび押さえ、背負い籠を踏み砕き、棒で殴り、森贖罪[72]を申し渡し、その他いろいろ辱めたり罵ったりしたからである。

五〇三　古城ハレンベルクの話

フィアナウからどんどん渓谷の上手へ進んで行くと、ヘッセン領シュマルカルデンの境界を越え、シュタインバハ＝ハレンベルク[73]に達する。ここではハレンベルク城の廃墟が高みにあってこの大きな村の長く連なる家並みを見下ろしている。この界隈には、山の頂きにも谷の底にも、数多くの伝説がある。ハレンベルクの城塞は、ヘンネベルクの館を建てたのと同じ棟梁が建てた由。ヘンネベルク伯爵家の持ち城の一つでもあったわけ。山上の城壁にはいまなお空洞が見られる。この中に小さな柩が発見された。柩には子どもの亡骸が入っていた[74]。城の傍では時折白衣の乙女の姿が見られる。彼女は真昼刻城山を下りて古い麦芽蔵のところまで行く。これには飾りに小さな塔が附属していて、塔にはいまだに小さな鐘が吊られている。この鐘は昔ハレンベルク城に下がっていたもので、銀のように爽やかな音色を出す。そこで銀の小鐘とも呼ばれる。かつてシュヴァルツァ在住の数名のユダヤ人が、この鐘を譲り渡してもらえるなら、鐘に詰まるだけの銀貨を代償に差し上げよう、と申し出たことがあったそうな。もっとも人人は提案された交換には応じなかった。鐘には次のような銘がある。「恵ミ深キまりあニ讃エアレ。ＭＣＣＣＸＸ[75]」。この鐘の削り屑は癲癇や急性疾患に効く、との俗信があり、それゆえ縁の周りには鑢の痕がたくさん見られる。削り屑は牛酪付き麺麭に載せて病人に服用させる。霊験アリ、とのこと。

シュタインバハ＝ハレンベルクから程遠からぬところに幾つも銀を掘った坑がある。これらを流れが一つ貫流している。流れの下手には洞窟があり、昔そこからヴェネチア人たちが莫大な財宝を運び出した。ある炭焼きが彼らにいつも坩堝を貸してやらねばならなかった。ヴェネチア人たちはその中で貴金属を溶かしたのである。とうと

う炭焼きは考えた。「おれだって地下へ下りて行って、自分用にいくらか持って来て、溶かしたっていいじゃねえか」。そこで洞窟に入った。しかし、おそろしくでかい犬がいて、牙を剝き出し、目を燃えるようにぎらつかせ、悪魔の化身のごとき唸り声を挙げたので、炭焼きは一攫千金どころではなくなった。

五〇四　エーバース村とエーバース地所

シュタインバハ＝ハレンベルクからシュマルカルデン市へ向かって丘陵のような牧草地が延びており、昔そこにエーバースドルフなる村があった。村は裕福で住民は金銀銅の採鉱業を営んでいた。こうして得た富のため彼らは傲慢になり、神聖なものを冒瀆し、もはや教会詣でをしなくなり、神を蔑する奢侈逸楽に耽った。さてエーバースドルフにはある信心深い娘が奉公していた。この娘はシュマルカルデン近郊の村シュプリングシュティレンの生まれだった。日曜日、うちへ帰って聖体拝領をしたいのでお暇をください、と主人に頼んだもの。こうした神様に嘉される用事だというのに、彼女は叱られ嘲られたが、とにかく出掛けるのは許され、泣きながら歩いて行った。ところが戻って来ると、村がどこにもない。村のあった場所の真ん中が小高くなっていて、そこから教会の尖塔の黄金の十字架が、墓の大きな十字架のように突き出していた。村は埋まってしまったのだった。けれども娘はまだ地底深くで雄鶏どもが心配そうに啼いているのを耳にした。そこで娘は故郷の村へ取って返し、目撃したことを告げた。だれも彼女の言うことを信じなかったが、とにもかくにもシュプリングシュティレン衆が大勢連れ立って行き、起こった奇蹟を目の当たりにした。そうこうする内十字架も地底に沈み、雄鶏も村内で啼かなくなり、不気味な静けさが村のあった場所の上に垂れ籠めた。暫くするとシュプリングシュティレンの村民は〔エーバースドルフ

の」地所を占有するようになった。そういうしだいで今日でもなお多数のシュプリングシュティレン衆がエーバース地所（グルント）に牧草地を持っている。例の教会の丘はいまだに渓谷の真ん中にあるし、その近くにはかつての庭の境界だった昔の生け垣の線が見える。

五〇五　ガダマールの見た幻影

エーバース地所（グルント）からアスバハと盆地状の谷に達する。この谷間に古い都市シュマルカルデンがある。かつてここで開催された諸侯会議、ルター博士の再再の滞在――ルターは陶器市場（トプフマルクト）〔＝今日のルター広場（プラッツ）〕に面した執事（レントマイスター）バルタザール・ヴィルヘルム[77]の家――現在大商人ザナーの家――に宿泊、ここで説教をも行った[78]――、それからメランヒトン[79]によってここで執筆されたキリスト教の信仰に関するあの有名な論文で名高い。

一五二六年のこと、シュマルカルデンにその名をジークムント・ガダマールという敬虔（けいけん）な男が住んでいた。この年彼は市長の一人だった。――というのもこの都市には長いこと、市政を司（つかさど）るのは二人の市長、二人の自治体後見人（ゲマインデフォアムント）[80]、一つならぬ市参事会という制度が存在したからである。彼らは毎年自治体により新たに選出されたのだが、ただし、ある年の二人目の自治体後見人（ゲマインデフォアムント）は次の年の一人目として選ばれるのだった。この敬虔なガダマール殿は、バルタザール・ヴィルヘルム――ルターの後の宿主――が早くもそうしたように、福音派という新しい教理に転向していた。それゆえ両者はさまざまな攻撃に遭（あ）っていたしだいである。ある晩ガダマール殿は悶々（もんもん）として床に就いたが、どうしたことかどことも知れぬ部屋に入った。そこには兇暴（きょうぼう）な様子の獅子（ライオン）が一頭いたが、彼は全然怖くはなく、勇気凛々（りんりん）だった。それから幾人かの諸侯が環（わ）になって立っているのを見た。彼ら――ほぼ七人

――は獅子にどう対抗したものか相談していた。なお一つの卓子に老人が坐っていたが、何の関心も示さず、眠っているように見えた。獅子は諸侯に向かい怒って襲い掛かったが、諸侯は武器を持たず臆していた。しかし一人が果敢に椅子を手に取り、それで獅子を防いだ。獅子は椅子に爪を立て、爪は椅子に嵌まり込んだ。するとその諸侯はすぐさま右手にヘッセン風の牡山羊剣というか闘剣を持ち、ぐさりと獅子を突いた。ただしガダマールはぐさりという音は聞いたが、獅子が傷ついたかどうか見なかった。他の諸侯は臆したままだったが、獅子の尻尾を切り落とせ、尻尾にやつの最大の力が宿っているのだ、と助言した。そして真ん中のだれかが獣の尻尾を切り落としたが、幻視者はその人がどこから剣を手に入れたか目にしなかった。それから一同はその部屋から出て行き、相談を始め、家は真っ暗になった。獅子は椅子から身をもぎ離し、吼え猛って口から泡を吹き、目玉をぎょろぎょろさせたので白眼しか見えないほどだった。こうした激怒ぶりに気を取られ、ガダマールは諸侯たちがまたしても部屋に入って来たことに初め気付かなかった。彼らは相変わらず武装していなかった。そして獅子は彼らを引き裂こうとした。すると卓子に坐っていた老人――まどろんでいるように思われたのだが――が立ち上がり、獅子に対して指を二本だけ挙げたが、口は利かなかった。すると獅子はおとなしくなった。男は変容し、イエス・キリストとなった。そして何か人間の形をしたものがガダマールにこう告げた。「見たことをよく覚えておけ。忘れるでない」と。

後、一五三七年、シュマルカルデンのアウアー門の外にある池――死人の水溜まりと呼ばれる――の辺りの空と地面に、雲状の塊があるのを多くの人が目にした。高く塔のようなもやもやした形があり、塔の上には光がちらちら見えた。そして高い鋸壁の周りには戦士の亡霊が幾つも浮かんでいた。塔の下には巨人のように大きな白髪の男がいて、水を掬っていたが、そこへ塔の背後から恐ろしい龍が出て来て、男に向かい、呑もうとするかのようにかっと口を開いた。しかし男はびくともせず、龍に何か――杯か本のような物を差し出した。すると龍は弾けて消

えた。それから何もかも霧に包み込まれた。

五〇六　ハーバー森と鷹の城

シュマルカルデンからずっと谷を遡った高み、ゼーリゲン渓谷の背後で、ジルゲという小川――本来はゼーリゲ。なにしろこの土地の名の由来はこの小川なのだ――が右手の、樹木に覆われた谷間の土地へと流れ込んでいる。この土地を見下ろして巌頭を持つ二つの山塊が向かい合っている。これらの頂きには往古騎士の城が一つづつあった。片方は鷹の城といったが、もう一方の名は忘れられている。城塞に拠る双方の騎士は憎み合い、闘いをこととしていたが、とりわけ争いの対象はファルケンブルクの正面とその敵城の側面に拡がる山林だった。後者はこれを自己の所有地として要求したのである。森は今日に至るまでハーバー森、荒れ果てた城址はハーバーホルツの頭と呼ばれている。騎士たちはこのように憎み合っていたが、彼らはそれぞれ成人の子どもを持っていた。片や息子、片や娘で、二人は父親の憎しみにも関わらず相思相愛だったのである。もっとも彼らは相手の城に行くことはできもせず、許されもしなかった。父親たちにしてみれば子どもらのこうした恋ほど厭わしいものはなかったからである。そこで恋人たちはジルゲ谷の心地よい泉の畔で秘かに落ち合うことにし、そこに小屋を作り、甘い睦言を交わした。しかし残念ながらそういうしだいで結局娘のお腹が隠しおおせなくなり、父親が彼女をひどく虐待したので、体の具合が悪くなり、亡くなった。娘の亡霊はゼーリゲン渓谷の愛の小屋に逃げ込み、もう何日もそこで空しく待ちぼうけていた恋人の前に出現した。そこで青年の心臓も苦悩のために破れたのである。以来しばしば騎士令嬢は姿を現し、澄んだ小川で赤児の襁褓を洗い、それらを乾かすためにハーバーホルツ下手の草原に拡げる。

五〇七　ヘルマンス山の騎士たち

シュタインバハ＝ハレンベルクから程遠からず、森に覆われた山並みの中央右手に二つの山――大小のヘルマンス山がある。大ヘルマンスベルクには家くらいの高さの斑岩でできた険しい尾根が通っている。巨人か悪魔が築いた壁[82]のごとくで、灰色に苔むし、老樹が生い繁っている。この高みにはその昔城があったとか。城主は伯爵で、名をヘルマンといった。彼は配下の騎士らと邪悪な暮らしを送り、十二人の命を犠牲にすることによって莫大な財宝を獲た。その悪業の罰として彼は家臣ともども山の胎内に呪封された。時折これら騎士たちが激しく荒れ廻る音が聞こえ、伯爵が徘徊する姿も見られる。伯爵が自分の方へ近づいて来るのを目にした森番や猟番は少なくなかった。その顔は蜘蛛の巣のようである。ある案内人が他郷の人の伴をして、シュタインバハ＝ハレンベルクからメーリスに通じる森の牧草地を歩いていた。新雪が積もったばかりだった。すると伯爵の亡霊がありありとこちらへやって来て、二人の傍を通り過ぎた。その外貌にびっくりした彼らは振り返ったが、姿は消え失せた。亡霊が歩いていた雪に足跡は見当たらなかった。

かつて牧人が大ヘルマンスベルクで群れの番をしていると、唸り屋（群れの牡牛）[83]がどこかへ行ってしまった。そこで若い雇い人は牡牛を探しに森へ入った。するとどこかの殿たちの一団が九柱戯を楽しんでいるのに出逢った。若者の姿を目にした人人は、柱を起こしてくれ、と合図した。そうしてやっていると、その内彼らは遊びを終えて立ち去ったが、柱を持って行って欲しい、と若者に言った。若者は遊び道具を背負い、群れに戻った。その間に牡牛も見つかっていたので、牛たちを追って村に帰った。すると、一体全体どこへ行っていたんだ、と訝しがら

れた。もう三日も帰って来なかったではないか、というのだ。雇い人は、群れからはものの半時間とは離れていない、どこかの殿たちが柱を起こすよう言い付けたのだ、と誓った。すると、労賃は貰ったのか、と更に訊かれた。「あいさ、頂戴したともね」と雇い人。「おいら、道具一式全部運んで来た。外の階段の下にあるで」。――それでは、と老牛飼いが自ら柱の詰まった背嚢を階段の下から引っ張り出そうとしたが、できなかった。ところが若者が手を掛けると、すぐに取り出せた。柱はどれも混じりけのない黄金だった。別の時、この若い雇い人がまた森で牛の群れの番をしていて、辺りをぶらつく内、あの一団に再会、もう一度柱を起こしてやった。そしてやはり柱を貰った。こうして二度も有卦に入ったわけ。

大ヘルマンスベルク山麓のある村で、冬の宵、男たちは坐り込んで骨牌遊びをし、女中は煖炉の長椅子に腰掛けていた。もう夜も更けていたので、彼女は糸車を前にこくりこくりしていた。目を覚まさせようと、主人が声を掛けた。「姐や、ヘルマンスベルクさ登って、わしらに葡萄酒一壜持って来てくれろ」。彼がこんなことを言ったのは、昔の城の埋もれた穴蔵に何フーダー[84]ものおっそろしく古い葡萄酒が寝かされている、との伝説があったからである。女中は頭の鈍い子で、寝惚けていたが、本当に出掛けて行って、山で葡萄酒を一壜手に入れた――どうやってだか言えなかったけれど。彼女が山から下りて来て、部屋に戻ると、主人は怒鳴りつけた。「どこさ行ってただ。こんげに長えことどこにいた」。――「あれ、旦那様、あたしに言い付けたでねえけ」と娘は言い訳した。「ヘルマンスベルクさ登って、みんなに葡萄酒一壜持って来う、って。だから、あたしゃそうしただ。ここにその葡萄酒があるだよ」。――男たちはこれを聞き、これを見て、不思議がった。壜は全体灰色で黴だらけだった。けれどもとにかく男たちは壜を開け、ご機嫌で古い巌山葡萄酒[85]を飲んだ。これは極上で火のように喉を焼いた。

五〇八　冷たい泉の畔の蛇

大ヘルマンス山とルップ山の間にドンナースハウク――幾つかの地図ではシュタインハウクと記されている――というまた別の高山がある。その山麓がユンカーと呼ばれる森と牧草地――その昔ルップベルク山上に居を構えていた郷士の領地だった――へなだれている辺りに湧き水――冷たい泉――が滾滾と迸り出ている。かつてここでベーレンバハの牛飼いが群れの番をしていたところ、ルップベルクの姫君が山から下りて来ていわく「あそこの冷たい泉の傍に大きな石があるでしょ。あの石の下に宝物がどっさりあるの。どちらも掘ってくださいな。そうすれば、わたし、あらゆる苦患から救われるのです」。牛飼いは泉のところへ行った。ところがその石の上には巨大な蛇がいて、シュウシュウ音を立てながら仰天した牛飼いに鎌首を擡げ、かっと開いた口と恐ろしい牙を見せつけた。牛飼いは怯えて逃げた。その後石はどこかへ無くなり、宝も同様で、姫君はもはやだれにも姿を見せない。けれども泉はいまだに湧き続けている。

五〇九　ルップ山の姫君たち

ルップ山――棒砂糖の形[96]をしており、テューリンゲン山地全山の中で一番尖っている――の頂きにはその昔城があった。ゲルハルト・フォン・ノルデックがこれを破却し、その資材を用い、聖者ブラジウスを顕彰して礼拝堂を建立、後代その地にブラジウスの庵村ができた。ルップベルク城の地底には莫大な財宝がある。これはいずれも

皆ヨハンネスという名の三人の長男によって運び出し得る。ただし彼らは財宝を黒犬となって守護している悪魔の生贄にならなければならない。宝探しをした者は少なくないが、だれもうまく行かなかった。ルップベルクからさまよい出るのは白衣の姫君一人だけとは限らない。三人ということもある。単独ないし連れ立って。救済してもらおう、とくしゃみをする。その際しばしば乾かすために洗濯物を携えている。

五一〇　ライスィゲン巌の話

メーリスの下手に樹木の生い繁った山が険しく聳え、ベルンスハウゼンからブラージエンツェレへと登って行く街道を見下ろしている。幾つかの本ではこの山はライスィヒベルクと呼ばれている。これについてヘンネベルク[87]のさる老歴史家のいわく「山の名はもぎ取り巌から来た、とも考えられる。かなり高い断崖で、夜間この麓はあまり静かではない。落石が真下を通っている街道に転がって来るので、驚かされる人が多い。噂によればそこではたくさんの妖怪変化が目撃されるという」。もぎ取り巌の向かい側では昔鍵束を腰に提げた小柄な女が徘徊した。真昼刻人人の前に現れ、「一プフントを四分の三、一カンネ[88]を四分の三」と金切り声で悲痛にかきくどいたもの。これは、アルンシュタット近郊ヴァルツァー森に出没する麦酒酒場の女将ホレ夫人みたいに（DSB五八七）、生前お顧客をこんな具合に瞞くらかした女商人だったのである。もっとも現在はその姿も見えず声も聞こえない。もしかするととうとう救済されたのかも知れない。

山の彼方、もぎ取り巌の背後にはあのヘールゼルベルクがある。ここにはある領地管理官が呪封されており、火男となって出没しなければならない。

一五六一年クリンゲスベルクの麓に割れ目が生じ、大地が崩れ、播種の終わった十アカー[89]の畑を五肘尺も覆い、四アカーの牧草地を荒廃させ、樹樹を薙ぎ倒し、山は一夜にして十六靴尺[90]移動した。これは全くの凶兆と見なされた。

五一一　神の野の鐘

シュネーコプフの峰からレンシュタイクに従って南東に向かい、次いで果てしない森を抜ける寂しい山路を真南に辿ると、高い鷲山に達する。山上には大きな牧草地が拡がっている。その名を神の野という。昔この高みには町があった。もっともゴッテスフェルトとは呼ばれていなかった。なにしろ住民は神を蔑ろにし、悪徳に耽ったので、神の懲罰の御手が町を地上から完全に消し去ったくらいだから。町は住民もろとも地中に沈み、神が裁きを下したもうた場所は神の審判の野と名付けられ、それが転じて後世ゴッテスフェルトとなったしだい。永の歳月が流れ、アードラースベルクの山腹でシュロイジンゲン[91]の牛飼いが畜群の番をしていたところ、一頭の野豚がある場所をせっせと掘り返しているのを目にしたので、近づいてみると、鐘の耳が片方地面に出ていた。牛飼いは、それが再び沈んでしまわないようにと、すぐさま所持の布切れ（手拭い）を見つけた物の上に投げ[92]、人人を急いで呼びに行き、それを掘り出した。鐘は荷車でシュロイジンゲンに運ばれ、教会の鐘楼に上げられた。しかし、先ず鳴らしてみると、なんともぞっとするような恐ろしい音を出し、三度目に叩くと破裂してしまった。鋳直したが、そうしても異様な響きしか出さない。まるで「牝豚め、出てけ、牝豚め、出てけ」と怒鳴っているかのよう。そうしてそれから再び破裂した。三度鋳直したが、鐘の音はこれっぽっちも良くならず、またまた破裂。以後警鐘にしか使わ

れなかった。

この界隈には鍵束ハインツエ巌（シュリュッセルハインツェシュタイン）なるものもある。垂直の斑岩の巌（いわ）である。この巌の周りでは幽霊騎手を見掛けることがある。この騎手は乗馬もろともこの巌壁から顛落（てんらく）し、人も馬も死んだ。

五一二　盗賊城（ラウブブルク）ヘルマンシュタインその他

シュネーコプフから北東を指し、渓谷の中へ歩を進めると、なんとも物寂しい幾つもの小径（こみち）を経て、イルム川の水源のある往昔のレングヴィッツガウ[93]とヘルマンシュタイン――ただし民間の俗称はハンマーシュタイン――という巨大な巌山（いわやま）に至る。この巌山の頂きには城塞――というか、とにかく物見の砦（とりで）があった。これはザクセンからテューリンゲンを通過してフランケンに向かう街道を監視するには絶好の盗賊城（ラウブブルク）[94]だった由。あるマインツの司教がエアフルトから軍を派遣してこれを破却したとのこと。界隈（かいわい）はなんとも不気味で、辺りに行った木樵（きこり）たちはこれまでしばしば恐ろしい轟音（ごうおん）に脅（おびや）かされた。ヘルマン騎士の亡霊は真夜中黒馬に乗って巌山の周囲を騎行する。洗礼者ヨハネ（ヨハン）の祝日（スナハト）[95]の前夜、いち早く現場に着こう、と出掛けた薬草採りたちが目にした。

イルメナウ[96]周辺にはヘルマンシュタインの他に数箇所盗賊城があったということで、その一つシュトゥルムハイデの城は皇帝ルードルフ[97]が一二九〇年に壊滅させた。イルメナウ市民はご認可を賜（たまわ）って特に自ら仕返しをやりたがり、二十九人の盗賊を捕らえた。彼らはエアフルトで一人残らず首を刎（は）ねられた。伝説によれば、イルメナウのすぐ近く、アイヒクト[98]寄りにあった第二の城は、城にとってはけっこうならざるある夜、城にいた者全員とともに地中に沈み、それがあった場所には大きな池ができた。

五一三　部屋の洞窟群の小人たち

イルメナウから程遠からぬところにアンゲルローデなる村があり、その近くに裂け目がたくさん入った断崖がある。巌の部屋のような穴や洞窟がいろいろあるので、部屋の洞窟群と呼ばれている。これら部屋の洞窟群にはかつて小人たちが夥しく棲んでいた。彼らは物見――三十年戦争時代スウェーデン軍の前哨の一つがそこにあったので、アンゲルローデ村の上手にある山の一画をそう唱える――からクンメルという張り出した巌角――アンゲルローデの居酒屋がここに見事な巌穴蔵を持っていた[99]――まで横穴を掘削し、これを通って居酒屋の穴蔵に到達、葡萄酒やら食料品やらに頗る損害を与えた。この小人どもは地中深くの巌の部屋で愉快に暮らし、居酒屋の葡萄酒、麦酒その他の貯蔵品を楽しんでいた。そればかりではない、この連中更に、周辺の村村の住民にさまざまな悪戯、冗談を仕掛けるのを常としていた。居酒屋の亭主は盗人が何者か長いこと分からず、使用人や家族を疑り、彼らの気を悪くさせ、大いに嫌な思いをしていたが、とうとう、足跡でこうした目に見えない便乗屋たちを突き留められるかもと、穴蔵に灰を撒くことを思いついた。そしてある晩実行、翌朝検分に行くと、目にしたのは鵞鳥の蹼に似た無数の小さい足跡。それらは穴蔵の一番奥にある巌の裂け目から続いていて、またその中へと消えていた。亭主がある賢い男の許へ相談に行くと、男はこう教えた。目に見えない小人が近くにいるようだ、と思えたら、水松の枝で打つといい。枝が当たった小人はどれもすぐに姿が現れるだろう。十字の形も嫌がる。黄金の日曜日に水松を十字の形にして彼らの通り道に置くと、それを最後に二度と足踏みしない、と。亭主は助言に従うことにし、それを更に他の者たちにも伝え、次の三位一体の日曜日にアンゲルローデ村の半分もがカンマー

レッヒャーに登って入り、水松の枝を折り、それを十字の形にして、小人（ツヴェルク）たちがこれまで家畜を魔法に掛けた厩（うまや）の入口に挿（さ）し、小人（ツヴェルク）たちがいろいろな物を持ち出した穴蔵に入れた。小人（ツヴェルク）たちの何人かが水松の笞（むち）にぶたれて姿を現したかどうかは分からないが、それでも例の賢い男の助言は尊重された。なにしろ小人（ツヴェルク）が見えるようにならなかったのなら、小人（ツヴェルク）に笞が当たらなかった証拠だからね。さて悪戯小人（いたずらツヴェルク）たちは立ち去った。ある夜のこと、キルヒェンホルツから村を抜け、あちら側の不毛の巌の高みを上がり、リッパースローデに向かって間断なくチョコチョコパタパタ、幾千もの小さな人たちの群れが通り過ぎて行くような音が耳にされ、低い啜（すす）り泣きも聞こえた。彼らは決して戻って来なかった。その時からというもの、アンゲルローデでは、毎年三位一体（トリニーティス）の日曜日（ゾンターク）に老いも若きもヴァイセンベルクに登り、カンマーレッヒャーに入って、そこで水松の枝を折り、十字の形にして、台所、穴蔵、家の部屋部屋、厩に挿すのが習慣になった。それで小人（ツヴェルク）や魔女の所業を防ぐという俗信は無くなったが、習俗は残った。殊に村の陽気な若者たちは上述の日に山から水松の枝を取って来て、不思議な巌の部屋（フェルゼンカンマー）に入れるのをおもしろがる。――こんな伝説もある。アンゲルローデ村を見下ろす、ぞっとするように美しい巌の迷宮たるカンマーレッヒャーないしフェルゼンカンマーに、黄金の枝角を持つ雪白の牡角鹿（ヒルシュ）の姿が見られる。ただし見えるのは日曜生まれの子どもたちだけで、それも童貞・処女でなければならない、と。こうした者には牡角鹿（ヒルシュ）を捕らえ、最大の巌穴の深みに連れて行く力が与えられている。牡角鹿（ヒルシュ）はそこで黄金の枝角を巌にぶち当てる。すると角は折れ、幸運児の報償となり、同時に山の胎内への通路が開ける。中では次に部屋が現れ、全ては金銀、真珠、宝石が満ち溢れている。選ばれた者は安心してそれらを集め、運べる限り運んでよい。さて牡角鹿（ヒルシュ）には一年経つと新しい角が増えるが、選ばれた幸運児＝日曜生まれの子にして心清らか、一点非の打ち所のない人物なんぞ、毎年は――いやそれどころか、百年に一度だって見つかりはしない。

五一四　歌人の山の話

イルメナウとシュタットイルム(102)――双方イルム河畔に位置する――の間に孤立した高峰が聳えている。これが歌人の山である。テューリンゲン邦には伝説の山が多いがその一つで、纏わる伝説はあるいは他の伝説と類似し、あるいは独特である。その名は、ヘールゼーレンベルクのように、時折山の内部から聞こえる唄や響きに由来する由。山の中には男が一人呪封されているともいう。それから城が山の胎内深くに呪われて沈んでいる。時時山の内部に通じ、下って行く入口をだれかがうまく発見する。ある羊飼いが黄色い花を見掛けて手折ったところ、どこかの王女が現れ、山の内部に案内してくれた。そこでは髪も髭も氷のように白い騎士たちが大勢卓子に坐っており、全員の髭が卓子を貫いて伸びていた。そしてキフホイザーの牛飼いや羊飼いの体験と同様、鳥たち――ここでは黒と白の鳥たち――は翔んでいるか、という問いがあって、〔翔んでいる、と返辞すると、騎士たちは〕再びまどろみに陥る。丸天井の大広間は武器、馬、財宝で満ち溢れている。それから褒美だが――これは隠し一杯の砂。ただし羊飼いはこれをうっちゃったりせず、お蔭で裕福になる。ジンガーベルクでは魔法の山の惑わしの伝説も繰り返される。ある荷馬車の駅者だが、山中で家財道具が一式揃った屋敷を見つけた。駅者は道中筋にある大きな旅籠屋だと思い込んで、山の内部へ馬車を乗り入れた。厩は立派で、もてなしは華やか。翌朝上機嫌で馬車に馬たちを付けた駅者は、もう一度振り向いて建物に入り、宿賃を支払おうとした。――家は無かった。厩も無かった。宿の家族も使用人も消えていた。駅者はぞっとして、そこを退散、次の旅籠屋に立ち寄った。そこで暦が目に入り、壁から外し、記されている年数を読んで仰天した。七年と七箇月と七日、彼はジンガーベルクの中にいたのだった。

――ある羊飼いは丸百年もそこで過ごした。山裾にはしばしば白衣の姫君が出現する。彼女は城があった場所にいなくてはいけないのである。彼女は折折狩人や木樵、それから旅人をもからかう。なお、これはよくある伝説だが、年に一度、エアフルトの全カトリック教会でジンガーベルクのために祈禱が捧げられる。カトリックではないアルンシュタットですらシュペア丘やシュネーコプフのために祈るのと同様で、山が割れて、水が流れ出し、平地を悉く浸さないように、である。もっともジンガーベルクは名詮自称歌人の山だからして、そして歌人なる者はまず水なんてお好きではないからして、この山の胎内には何十万樽もの葡萄酒が詰まっている。城の騎士たちが積み上げ、まことに奇態な話ながら、自分たちでは飲まなかったのである。これらの葡萄酒の幾分かは毎年山の胎内から漏れ出し、山の泉の水に混じる。それゆえここの湧き水は飲むと爽快で元気が出る。――もし、もはやこの山のために祈られなくなったら、それからそもそも祈禱が行われなくなったら、酒樽は全て破裂し、葡萄酒の洪水が山から奔出、第二の大洪水のごとく、家畜と人の子もろとも全土をその中に沈ませることになろう。そんなことになったら大いによろしくないし、またあらずもがなのことである。だから、人間は神様と祈禱を決して忘れてはならない。

五一五　歌人の山城を呪詛したルター博士

歌人の山のけっこうな葡萄酒について界隈の地域伝説にはまだ若干語り種がある。その昔さる伯爵が山上の城で隠居暮らしをしていた。この御仁、財宝を溜め込んだ吝ん坊という評判だった。できるだけ早くご老体の遺産を相続したい、とうずうずした若い親族が、城を襲い、伯爵を殺し、財宝を山分けにしよう、と何人かの追い剝ぎども

と組んだ。彼らはこれを挙行、伯爵はお亡くなりになった、と噂を流した。この若い騎士は城に居坐り、強盗仲間と無軌道な暮らしを始め、旅人たちを待ち伏せし、略奪したり、城へ拉致して来て、高額な身代金と交換に解放したりした。ある時彼らは二人の令嬢と伴回りを連れた身分ある奥方を虜囚にした。この女性たちを取り合って大変な争いが起こった。なにしろ連中は女性たちを身代金と引き替えにしようとせず、我が物にしようと思ったからである。これから一番金目になる獲物を捕まえた者が、一番綺麗なのを戴くことにしようじゃないか、と相談が決まり、よくよく見張っていろ、と家政婦の婆さんに厳命して囚われの美女たちを預けると、騎士たちは城を後にした。追い剝ぎどもの一人の手に落ちた最初の獲物は幾人かのエアフルトの修道士で、その中にはルター博士もいた。博士だけが人質として残され、残りの僧は、博士のための身代金を送れ、と釈放された。従士が一人、修道士の張り番を務め、追い剝ぎは更なる獲物を探しに出掛けた。しかし従士はくたびれて睡かったので、坐り込んだ芝生の上でこくりこくりやりだし、博士はそこを立ち去った。すると、高みに堂堂たる城が見えたので、そこに保護して貰えるのでは、と思った。しかし囚われの奥方が城壁の上に立っていて、鋸壁から「急いで逃げて。ここは強盗と人殺しの巣です」と叫んだ。ルターにしてみれば、この言い付けに従いたいのはやまやまだったが、追い剝ぎ一味の手に走り込んでしまい、この者どもによって城へ連行された。さて夕方になると、強盗たちは捕虜の修道士を宴会の場に連れて来させ、なにか小唄でも一くさり唸って、我らが退屈凌ぎをつかまつれ、と要求した。修道士は強盗たちに調子を合わせるふりをし、ラテン語の呪文を歌って聞かせた。これは彼らには意味不明だったが、その秘密の力のせいでとろとろ寝入った。だれもが――下僕たちも賄い婆さんも――眠ってしまうと、ルターは囚われの女性たちをその財宝も持って城から連れ出し、歩きながら唄の一つを歌った。こうして彼は、その唄の節回しを山の上で響かせる者以外、二度と人間の目に触れぬよう、城をそこにいる全ての者ともども呪詛したのであ

る。――間もなく城は忘れ去られ、夥しい歳月が経過、歌人の山の頂きは荒寥として物寂しかった。そこへある時羊飼いが一人、畜群を追って上がって来た。そして所持のシャルマイ(103)でほぼあの唄と同じ節回しを吹き始めた。するとなんと、あの城が目の前にそそり立ったのだ。数数の門も広間も開いていたので、勇気を出して中へ入ってみると、何もかもしんと静まりかえり、眠っているかのようだった。樽や把手付き容器に満ち溢れている葡萄酒を、携えていた瓢箪の水筒に一杯入れ、畜群に戻ろうと城を出た。すると城は彼の背後ですぐさまた消え失せた。葡萄酒は素晴らしく、極上絶品の風味、その上羊飼いがいくら飲んでも無くならなかった。けれどもどんなに探しても、二度と再び城を見つけることはできなかった。なにしろせっかく城が教えてくれた魔法が分からず、山頂であの唄の旋律を吹くことに思い至らなかったからである。暫くして羊飼いは友だちのところに行き、ジンガーベルク城での体験を物語り、「まあとにかくこの酒を味わってみろや」と勧めたもの。ところがさて相手は飲もうとしていわく「この莫迦たれ。何も入ってねえじゃねえか」。――要するに男の子たちが秘密を喋った時のシュヴァルツァの男の子たちの麦酒杯や、ペルヒテの麦酒と同じことになったわけ。瓢箪の水筒は空っぽになり、以後そのまま――（DSB五〇一、DSB五七五）。

五一六　パウリーナの庵

歌人の山を下ると、その東麓のジンゲン村から静かな道が更に森閑とした谷間へと通じている。この谷間にはテューリンゲンの全修道院の廃墟の内でも最も美しく最も崇高なものが隠されている。すなわちパウリーナの庵で、これには少なからぬ伝説が纏わっている。皇帝ハインリヒ四世の内膳正モリヒョー伯の息女パウリーナは、両

親の死後暫く、メルゼブルクなる母方の伯父ヴェルナー司教の許で暮らしていたが、ある時レンゲヴィッツにジッツォなる伯爵――ケーフェルンブルクとシュヴァルツブルク伯とも名乗っていた――を訪ねようと思った。彼女は腰元一人と下僕一人を伴に連れただけで騎行したが、当時は広漠として物凄かった森の中で迷った。下僕が辺りを調べるため送り出されたが、戻って来なかった。そこでパウリーナは腰元と二人きりで人跡稀な森の中に取り残された。彼女らは長いこと乗馬を駈り立てたので、とうとう馬たちは疲れ切って前進できなくなった。二つの小川（ベーレンバハとローテンバハ）が繞り流れている、とある草原に来て、人の住んでいない炭焼き小屋に出くわし、小屋の中に炭の粉にまみれた麺麭と乾涸らびた藁の寝床を見つけた時には、太陽はもう最も高い梢を照らしているに過ぎなかった。その夜パウリーナはここで祭壇のようなものに向かって祈っている夢を見た。目が覚めると、彼女はその辺に転がっている何本かの木材を組み合わせて祭壇を拵え、頸に下げていた小さな磔刑像をその上に安置し、一心不乱に祈りを捧げた。その内に腰元が小屋から出て来て、自分の見た夢を物語ったが、それは奇しくもパウリーナの夢とぴったり符合した。パウリーナはこれを天の啓示と思い、ここに庵を造ろうと決心した。朝になると女たちは旅を続け、貧寒たるちっぽけな漁村に辿り着き、ここでようやくいくらかの麺麭と魚を手に入れた。この村は漁師郷といったが、たっぷり礼をして貰った住民たちが女伯を讃えて後に女伯郷と改名した。パウリーナはその後間もなくジッツォ伯からこの辺りの地所をいくらか譲り受け、庵を造るという決意を実行、彼女に従ってこの寂しい森に移って来た女性たちと共に敬虔な瞑想に身を捧げた。後にこの女子修道院は規模を増し、大きな教会の建立が始まり、やがて男子修道院もこの地にできた。教会はまことに善美を尽くした造りで、さまざまな石の彫刻で装飾された。それらの中には一頭の無翼龍もあった。なぜならパウリーナがかつてリンネ川の谷を上って来た時、おぞましい無翼龍に襲われたからである。これは――界隈の脅威だったが――ロイトニッツの下手の洞窟に巣

くっていた。パウリーナは十字を切り、守護聖人に縋った。そこで怪物は打ち倒された。この冒険を記念して彼女は無翼龍を石に刻ませた。この彫刻は修道院附属教会正面玄関の傍らなる保存された柱頭に現在なお見られる。

五一七　パウリーナの労賃支払いの奇蹟

修道院建立の間パウリーナはパウリーンツェレの近傍で北にあるキーンベルク山上のある家に住んだ。この家の名残は現在まだ見つかる。彼女はここから修道院造営を見守っていた。ここからだと谷全体と建築用石材が運んで来られる街道を一望できたからである。毎夕彼女は前掛け一杯の貨幣を携えて建築労働者たちの許に下りて行き、祈禱を捧げるよう促し、銘銘片手で摑めるだけ貨幣を取らせた。一度ある労務者が深く手を差し込んで他の者より多く握ろうと考えた。けれども後で数えてみると、当然の給金より鐚一文多くも少なくもなかった。こうした奇蹟のお蔭でパウリーナ修道院は民衆の間で大いに尊崇された。

五一八　教会の列柱と悪魔

パウリーンツェレの教会建立の棟梁となった石工は、両側からそれぞれ一つの石でできた列柱を立てて行き、それで教会を支えようと構想した。これを聞いた者は皆、こうした大胆な計画に驚き、これが実行されるのを見ようと、たくさんの壁工の親方が助力を申し込んだ。パウリーナは棟梁の頼みに応えて、柱が一本石切場で切り出されるたびに、うまく行くよう祈った。お蔭で最後の二本を除き、全ての柱が無事に設置された。しかし最後の二本が

切り出されることになった時、パウリーナは祈禱を何か魔物に妨げられ、一瞬地震が発生、二本の柱がぶつかり合い、そのためそれぞれから欠片が砕け落ちた。けれども石工は欠片を巧妙かつぴったりくっつけたので、こうした伎倆と女伯の祈禱の力をだれもが讃歎した。

棟梁はかねて悪魔と約束を取り交わしていた。悪魔が手を貸してくれたら、報酬として教会に入る最初の魂をくれてやろう、というもの。さて教会が落成、献堂式を挙げることになると、教会の入口からまず豚が追い込まれた。悪魔は一杯喰わされたことを怒りかつ恥じ、猛然と豚をとっ捕まえ、諸共に天井を破って去った。その際いかにも悪魔らしくすさまじく臭いすかしっ屁を残した。これは香煙をも駆逐せんばかりだった。それから天井には穴が一つ開いたままとなり、二度と元通りに塞ぐことはできなかった。

五一九　黒騎士ヴィッテキント

パウリーンツェレから程遠からぬ巌だらけの森谷にシュヴァルツブルク城が壮麗に聳え立っている。テューリンゲン最古の城塞の一つがあった場所である。シュヴァルツブルク伯爵家の家系伝説によれば、ザクセンの大豪族ヴィッテキント[原]の近親で名前も同じ者が、かつてカール大帝〔＝シャルルマーニュ〕に囚われたことがある、と。カールはこのザクセンの族長とその子息たちが示した勇猛果敢な振る舞いが大層御意に召し、彼らをキリスト教に改宗させ、洗礼を受けさせ、自ら名付けの父となってやった。ヴィッテキント、添え名して黒のは、ルートヴィヒなる洗礼名を授かり、ヴィッテキントとヴァルペルトといった二人の子息たちはカールとルートヴィヒと呼ばれるようになった。父ヴィッテキントは黒い城を築き、それを長男に相続させ、次男のルートヴィヒはグライ

ヒェン城の建設者になった。カール大帝はその名付け子カールをシュヴァルツブルク伯に叙し、テューリンゲン山地（ヴァルト）に周囲二十哩（マイル）の領地を与えた。大カールが髭（ひげ）もじゃのルートヴィヒをテューリンゲンの伯爵の一人に昇格させた時[106]、十二人の高貴な封臣を附したが、その中にはシュヴァルツブルク伯たちもいた。彼らは極めて初期、既に一〇九九年、「神の恩寵により」と記されている。彼らは後に帝国の四伯爵[107]に数えられた。確固たるシュヴァルツィンブルク家[108]は、これに触れている最古の文献の記すところによれば、城の名からそう称される前から高貴な伯爵の家系の一つである。シュヴァルツブルク伯と名乗った初代は同時にテューリンゲン伯にしてケーフェルンブルク伯と称した。その名はジッツォ、その父はグンダール。この名がシュヴァルツブルク諸侯の世襲名ギュンターのもととなった。グンダールは十一世紀末と十二世紀初頭に生きていた。ジッツォ伯はシュヴァルツブルクの近くにある村ジッツェンドルフの創始者である。ジッツォの子息たちはシュヴァルツブルク城やケーフェルンブルク城に居を構えた。名門シュヴァルツブルク家からはドイツ皇帝が一人[109]、大司教が二人、司教が何人も、ドイツ騎士修道会の総長（ドイチャー・オルデン・グロースマイスター）、そして剛勇の戦士が少なからず出ている。

五二〇　グライフの巌（グライフェンシュタイン）

その名をハインリヒというテューリンゲンのさる伯爵が十字軍の遠征から鷲頭獅子身有翼獣（グライフ）[110]を連れ帰った。いや、それは鷹（たか）で、呼び名がグライフだったに過ぎない、とも。ある時伯爵はグライフを蒼鷺（あおさぎ）目掛けて放った。グライフは翔（と）んで行ったが戻って来なかった。伯爵は意気銷沈（しょうちん）、下僕たちに、見つかるかどうか、至るところ捜（さが）し回れ、と命じたが、徒労だった。翌朝伯爵は自身鷹を捜しに再度城を出た。鷹がいないのに堪えきれなかったのだ。

すると愛鷹がケッセルベルクの方角へ天高く翔んでおり、突然鳥たちの群れに急降下するのが目に入った。鳥たちは近くの山に下り立った。伯爵が急いでその山に登ると、いつも城内法廷[111]を開く場所の繁みの中で愛鷹が獲物を引き裂いているのを見つけた。周りでは歌鳥たちが巣からばたばた羽ばたいて逃げていた。「おやおや、この腕白め」と伯爵はふざけて「わしはおまえを子どもみたいに束縛していたわけかな。だが、おまえはわしの許を離れたいのだのう。もちろんここはわしの手の上よりずっと素晴らしい。全くの話、おまえの選んだ居城は悪くない」。――伯爵はグライフを手に止まらせて撫でながらこう言い、辺りを見回した。そしてこの場所からは谷も界隈も広く一望できるので、大いに気に入ったものだから、ここに城を築こうという気になった。その年の内に基礎工事が行われ、造営は数箇年続いた。なにしろ永久に立つ城壁をとでもいうかのように、堅固な建築だった。事実、脆弱な砂岩を崩壊しないよう頑丈に積むのに使われた灰泥は、石と石をより一層ぴっちり接合させるため葡萄酒で捏ねられたとか。さて伯爵はここを選んだ愛鷹のグライフの思い出にこの城をグライフの巌と命名したが――民衆はただ「古いお城」と呼び、ある包囲攻撃の際、破壊され炎上した、と信じている。もっともこうした意見は歴史に背馳するのだが。史上、城はブランケンブルク[112]といい、歴代のシュヴァルツブルク伯が所有、居を構えた。

五二一　ブランケンブルクの修道士

古城ブランケンブルクの中庭に黄昏刻しばしば髪も髭も白い修道士が出現、自分に随いてくるよう、人人を手招きする。もっとも今日に至るまで、ある羊飼いの少年――草の生い繁った中庭に羊群を放していた――を除き、あえて従った者はいない。腰のところを縄で括った長い灰色の僧衣を纏った男は少年を鉄の門に連れて行った。修道

士が門に指を触れると、両開きの扉がぱっと開き、地下の大広間が見通せた。そこでは天井から輝いている洋灯(ランプ)の光が何千もの黄金の什器(じゅうき)に照り映(は)えていた。大広間の床にはターラー銀貨が敷き詰められていて、四隅には金貨が山のように積まれていた。修道士が、中へ入って取るがよい、と身振りで勧めたのに、男の子はどうしても勇気が出なかった。仰天したあまり呪縛されたようにその場に立ちすくんでいる少年に、修道士は長いこと目配せしていたが、突然消え失せた。そして門と広間はもはや影も形も無くなった。

ここブランケンブルクで誕生した皇帝ギュンター[113]を毒殺したのはかの医師フライデンクだそうだが、彼はここを徘徊(はいかい)しなければならない。――かかる不実な裏切り者である彼のような人物を、だれかが信頼してやるまでは。

以前は、初めてグライフェンシュタインを訪ねた子どもは皆、麺麭(パン)を一切れ持っていなければならなかった。例の修道士が現れた時、その麺麭で宥(なだ)めてやれるのだ、と言われて。修道士を怖がって両親に纏(まつ)わりついている子どもは深い井戸――今は残念ながらほとんど埋まってしまっているが――を見せてもらったもの。これはかつてシュヴァルツァ川から水が通じていたほど深かったそうな。鸛(こうのとり)はこの井戸から赤ちゃんをママたちのところに運び、赤ん坊のお兄ちゃんお姉ちゃんには砂糖菓子の入った大きな袋を置いて行く。

五二二　危険な担保

ブランケンブルク城山(さんか)下、ヴァッツドルフ[115]とかいう村のある田舎邸(カウントリー・ハウス)で糸紡ぎ部屋の集まりがあり[116]、折しも担保が請(う)け戻されることになった[117]。「担保は何にしたらいい。あたしが持ってるこの担保[118]」――そう問い掛けがあると、だれか考え無しの娘っこが言うことには「お城に上(のぼ)って、あすこの古い煖炉(だんろ)から貼付陶片(タイル)を一つ持って来る」。こ

の軽はずみな提案は通ってしまった。けれども勇敢な若い衆だって実行には怖気を振るうようなこと。担保はある娘（ゾフィー・ブラントという名前だった由）のもので、この子は、怖がっているのを見せまい、と出掛けて行った。城の、たった一つだけ残っている崩れかけた小部屋に踏み込み、壊れた煖炉から貼付陶片を砕き取るのに一所懸命になっていると、近くで跫音と低い話し声が聞こえた。びっくり仰天して煖炉の後ろに潜り込み、身を隠した。それは、略奪から引き揚げて来て、ここで獲物の分配をしようとした何人もの強盗たちだった。彼らは部屋の真ん中で火を焚き、飲んだり喰ったりした。そして獲物の分配を済ませると、床にのうのうと大の字になって眠った。娘は怖くて怖くて半分死んだようになっていたが、強盗どもがぐっすり寝込んだのに気付き、隠れ処から忍び出ると、戸口に横たわっている強盗の体をまたいで外へ出、強盗どもがすぐあとから追い掛けて来るのではないか、と怯えながら、全力を振り絞って逃げ去った。死人さながらの蒼白な顔で糸紡ぎ部屋に戻った娘は、自分を迎えた一同の歓呼の声もろくすっぽ耳に入らず、手を震わせながら貼付陶片を卓子の上に置くなり、気を失って床にくずおれた。

五二三　愚かな楽士たち

ブランケンブルク[19]の町で舞踏の伴奏を務めた小ゲーリッツ[20]在住の楽士数人が、家に帰ろう、とかの古い城の傍を通り掛かった。月は皓皓と黄色い城壁を照らし、荒廃した窓から緑の繁みが覗いていた。楽士の一人がいわく「どうだなあ、おぬしたち、あすこの高みをうろついていなさる昔の伯爵がたに、ひとつ小夜曲を差し上げるてのはよ。ああいうお偉い殿様ってなあ、うんと喜んでくださるだろうぜ。ことに、こんな山の上じゃあめったに聴かれ

ない音楽と来ちゃあな」。他の者も、そりゃいいね、となり、快い緩調円舞曲（ドレーヤー）を一曲演奏した。陽気な旋律が夜のしじまに響き渡り、その音色は古い壁また壁に穏やかに谺（こだま）した。見上げる城の、穴と化した窓からは、老いさらばえた顔が幾つもにこやかに頷（うなず）いているように思われた。最後の一節の響きが消えて行くと、白髪（しらが）の侏儒（しゅじゅ）が一人[121]楽士たちに歩み寄り――彼らはそれがやって来るのが見えなかった――銘銘に山毛欅（ぶな）の小枝を一本づつ贈り、こう言った。「これをお子さんがたに持って行ってくだされ。子ども衆は山毛欅の実[122]を食べるのが好きだでのう」。――途中でだれもが貰（もら）った枝をげらげら笑いながら投げ棄てて「あの不思議な男がせめて砂糖菓子でも土産にくれればよかったのに。だってな、うちのちびどもだって今年は山毛欅の実なんぞ喰（く）いはしねえもの。胡桃（くるみ）が豊作だったでのう。胡桃にゃあなんたってちゃんとしたぴゅうず（ピューフヒェン）（核（さね））が入ってら」と言い交わした。――低音大提琴（バス）の奏者だけが記念に自分の楽器に小枝を差し込んでおいた。翌朝彼の子どもたちは嬉しそうにピョンピョコ跳びはねて来て、こう訊（き）いた。「ねえねえ、父さん、父さんがお土産に持って帰ったあの黄色い小さな実はなんだね。あれ、食べられないのけ。だってさあ、堅過ぎて歯が立たないだ」。――そこで父親が例の枝をとっくり眺めると、なんとまあ、枝は混じりけのない黄金（きん）に変わっていた。そこで彼は村一番の金持ちになった。他の楽士たちは自分らが棄てた小枝を見つけようと、道端の草の根を分けて捜（さが）し廻ったが、影も形も無かったばかりでなく、目に見えない手によって情け容赦なく鼻をぴしりと弾（はじ）かれたそうな。

五二四　癒やしの山（ハイルスベルク）

ブランケンブルク、シュヴァルツブルク、ケーフェルンブルク一帯にキリスト教が移入されるに至った経緯につ

いてはこのような伝説がある。ヴィンフリート・ボニファチウスがテューリンゲンに布教を行っている途中、石だらけの高原――現在トラッペンドルフがある――を越えて荒寥たる森林を抜けた。彼は扈従の者らと共にとある谷間に野宿したので、乗馬を放して草を食ませた。馬は怪我をしていたので、激しく地面を脚で掻いた。するとそこから泉が噴出、馬の脚はその湧き水ですぐさま癒えた。丁度ハイリゲンブルンの噴泉（ＤＳＢ二四二）でも神の奇蹟の御力が啓示されたように。癒やしの水の評判は近在の住民にたちどころに伝わったので、彼らは群れをなして押し寄せ、ヴィンフリートの説教を聴聞し、癒やしの泉の水で洗礼を受け、たくさんの者がそこに定住した。かくして癒やしの山村（ハイルスベルク）[123]ができたのである。ヴィンフリートは村に教会を建立、そして後にその守護聖人となり、村もこの聖者の肖像を村の印章に採用した。教会の鐘楼にはあの馬の癒やされた脚の蹄鉄が釘づけにされた。

カール大帝〔＝シャルルマーニュ〕の子息ルートヴィヒ王[124]がテューリンゲンを行幸していた折、ハイルスベルクの由緒あるボニファチウス礼拝堂へ立ち寄り、そもそも建立の縁起はしかじか、との物語を聴き、祈りを捧げ、この小教会にたっぷり喜捨を施し、かつまた、自らの寄進が永遠に記憶されるよう、大きな石に碑銘を刻ませた。これは一八一六年までその地に残っていた。この石、その後はヴァイマルに運ばれ、しっかりした管理の下で保存されている。さて、この歳経た碑銘は石でできた謎謎胡桃でも申すべき代物で、学者の皆様におかれてはそれぞれお持ちの知恵の歯で噛み開ければよろしい。もっともいまだにだれ一人――弁髪や鬘の時代にも[125]、最新流行の森の精髭（ヴァルトシュラット）[126]の時代にも――この謎の碑銘に正しく道理に叶った解読を施した者はいない。解読の試みは公の出版物で周知されるが、今日に至るまで児戯に類する研究段階に留まっている。

五二五　死者が見える女

ルードルフシュタットの城館[127]にかつて一人の姫君が住んでいた。この姫君にはまことに悲しい天分があった。侯家でだれかが死ぬたびに、棺台の上の本当の死者の代わりに次に死ぬ者が見えるのだった。この第二の視覚は姫君を全く陰鬱にした。なにしろ〔既に死んだ、およびこれから死ぬ〕家族二人を思って心痛めたからである。だからといって棺の中を覗くのを止めるわけには行かなかったが、何を目撃したかは深い秘密として胸の奥底に隠していた。そういうしだいで生涯は悲哀の裡に過ぎた。しかしある時、彼女は遺言を草し、我と我が身の葬儀の段取りを指示、その後間もなく――その前の棺の中に自分自身の姿を見たのだ――安らかに息を引き取り、そして暗澹たる才能を墓の中へ持って行った。

ルードルフシュタットの城館には丸天井の城門の間があるが、これには厳重に錠を下ろした鉄の扉が附いている。時折真夜中、蝶番が動きもしないのに、大理石のように蒼白な顔をした白衣の姿がこの扉を通り、階段を下り、城の中庭を横切って、また消えてしまう。この幻影はあの死者が見えた姫君の亡霊で、侯家で死者が出るたびに目にされるのだ、ということである。

五二六　朝餐

ルードルフシュタットの城館にはシュヴァルツブルク伯未亡人カタリーナ[128]――生まれはヘンネベルク伯爵家の姫

君――が君臨していた。三十年戦争が諸邦を荒れ狂っていた頃のことである。[128] 彼女はいまだ成年に達しない子息たちの所領のために、手を尽くして皇帝の保護状（シュッツブリーフ）[129]を獲得していた。なにしろ、この邦にはかの血に渇いたアルバ公[131]の強盗さながらの軍勢が接近中だったから。公爵はルードルフシュタットに到着すると、居城の伯爵夫人に自分を朝餐に招くよう要求した。この招待の押し付けは謝絶できなかった。公爵が随行者および家臣たちと美味を楽しんでいる間、イスパニアの兵士どもは彼らの習慣通り農夫たちから家畜を奪い去り、金銭を略奪・強要した。哀訴嘆願が櫛（くし）の歯を引くように到来すると、伯爵夫人は男の侍臣全てと城の下僕一同に歯まで〔＝完全に〕武装するよう命じると、食堂に入ってアルバ公の許（もと）に歩み寄り、皇帝の特許状を示しながら、公爵の暴兵（ブルダテスカ）どもの不埒（ふらち）な所業を述べ立てた。しかしアルバは「戦は戦でござるよ」と嘯（うそぶ）いた。すると伯爵夫人いわく「公爵様、御身（おんみ）の軍勢にご書状をお書きあそばせ。汝（なんじ）らの奪った物をわらわの臣下に悉皆（しっかい）返却せよ、汝らの無軌道を即刻禁止する、と」。「伯爵夫人殿、なんとしてさようなことが」と公爵は不機嫌に言い返し、要請に従う様子はつゆ示さなかった。すると伯爵夫人はかっとしてこう叫んだ。「御前（ごぜん）にはそのおつもりがおありでないか。――されば、神かけて、牡牛（おうし）の血には殿様の血を」[130]。勇気凛凛（りんりん）かつ決然とした奥方が手で合図するなり、扉という扉からどっと男たちが押し入って来た。抜き身の剣や尖った鋭い鉤槍（かぎやり）を携えた甲冑武者（かっちゅう）の群れが。公爵は蒼白（そうはく）になり、同席していたブラウンシュヴァイク公と囁（ささや）き交わし、それから命令書を書いた。ブラウンシュヴァイク公は哄笑（こうしょう）し、冗談に紛らわせたものの内心は本気で、素晴らしきドイツ女性を誉め讃（たた）えた。さて、このドイツ女性の方は大層へりくだってお礼を言上すると、武装した者たちを退場させた。アルバは何も言わずに立ち去ったが、その後長いことルードルフシュタットの朝餐を思い出したことであろう。この果敢な伯爵夫人はルードルフシュタットの教会に憩（いこ）うている。彼女の奥津城（おくつき）の上には頌徳文（しょうとくぶん）を刻んだ美しい金属の記念碑が置かれている。彼女は迫害された新教徒（プロテスタント）の聖職者、とりわけカスパール・

アクィラ[134]とユーストゥス・ヨーナス[135]の偉大な保護者だった。

五二七　首縊りの柏

ザーレ川の彼方、ルードルフシュタットとザールフェルトの間に山並みがあり、その最高峰はクルムという。これにも少なからぬ伝説が纏わっている。かつて美しい柏の森があり、森には特に大きな極めて古い柏の樹が聳えていた。三十年戦争時代、ある部隊がライヒェンバハ村の森山の麓に宿営、その地で大いに楽しくやらかして、去って行った。その翌日、神の家では聖体拝受が信徒たちに執り行われ、暴兵どもの退散を主に感謝したが、その時、遙か昔ある敬虔な男が教会に寄進した黄金の聖餐杯が失くなっているのが分かった。あらゆる形跡から推して、聖餐杯は兵士どもに盗まれた、と思われた。そこで老村長――高齢の御仁だった――は、自分が軍人たちの跡を追い、命を危険に曝す羽目になろうとも、奪われた教会所有の高脚杯を返してくれ、と隊長に要求する、と申し出た。途中の森で兵士の群れに追いついた彼は、あの柏の巨木の下で横になっていた隊長を見つけ、訴えを開陳した。厳しい目付きで、部下の誰かが聖餐杯を窃取した、との告発を聴いた隊長は即座にこう命じた。犯人が我らの中におるなら、杯を出せ、と。――だれの手も動かず、自分がやった、と名乗り出る者もいなかった。「よろしい、それなら」と今度は隊長は村長に向かって呼び掛けた。「おぬしらの杯を探すがいい。持っているのをおぬしが見つけたやつは、ただちにこの柏で吊るし首にいたす。しかしながら、おぬしが杯を見つけられなんだら、おぬしが吊るし首だ。わしの部下にさような濡れ衣を着せた廉でな」。

死ぬほど驚愕した村長は捜索を始めたが、何も見つからなかった。これでもう我が生涯も終わり、と考えた時、

繁みの蔭からピカリと光る物がある。そこには兵士が一人、背嚢を枕にのうのうと眠っていたのだが、その背嚢の中から聖餐杯が輝いたのだ。「ありました！」と大声で村長が叫び、杯を引っ張り出した。眠りこけていた兵士は仲間の呪詛と跫音に目を覚まされ、ただただぼうっとして告訴を聴いた。警衛下士(注)も既に索を持って歩み寄った。僅かな猶予の後、隊長は警衛下士に、泥棒を絞首するよう命じた。漸く事のしだいに合点が行った男は大声で無実を誓ったが、何もかも無駄で、柏の木へと押しこくられたので、絶望のどん底で叫んだ。「おれが正真正銘無実の罪で死ぬんだったら、この森の柏は今後決して青青と育つことがないように」。――こうして彼は死んだが、これは冤罪だった。彼を吊した人間こそ当の泥棒だったのだ。警衛下士は隊長の誓言を耳にすると、急いでこっそり、杯を自分の背嚢から取り出し、それを眠っている朋輩の背嚢に突っ込んだわけ。さて戦友が絞首され、村長が無事に見つかって手許に戻った聖餐杯を携え、ライヒェンバハへ急いで戻って行くとすぐさま、絞首人の胸の中で良心の蛇が目を覚まし、柏を見掛けると、身震いするようになった。どこにも安息の場が無くなった彼は、部隊を脱走、あの柏に戻り、憐れな仲間の絞首索を切り落とし、夥しく苦い悔恨の涙を流しながら埋葬し、この首縊りの柏の大枝で我と我が身の首を縊った。一説では、彼は犯行を隊長に告白、隊長はすぐさま同じ樹で彼に同じ扱いをした、となっている。

森ではあの首縊りの樹を除き、全ての柏が死に絶えた。無実の罪で殺された男の呪いのせいである。そして森に再び柏が生えることはなかった。首縊りの柏すらとうとう枯れてしまった――あるいは嵐で倒された。

五二八　男の水の精（ヴァッサーマン）

クルムの峰の下にある村下（ウンター）＝プライリップ[132]――下って行くとザーレ河畔に達する――には貴重な木の彫像と手回し風琴（オルガン）のあるとても古い教会が建っている。この風琴（オルガン）は敬虔（けいけん）公エルンストが自身演奏したとか。この村の産婆の家の扉がある夜どんどん叩かれた。外にいるのは小さな男で、産婆を呼んだ。そこで産婆が階下に下りると、男は村を抜け、ザーレ川の方角へどんどん下って行き、河畔で産婆に目隠しをし、細枝を手にして河面（かわも）を打った。すると水が左右に分かれ、二人は水底へと階段を降りた。行き着いて小部屋に入ると、小さな男は産婆の目隠しを取った。彼女が目にしたのは小さな寝台に横たわっている小さな女で、女は彼女の助けを緊急に必要としていた。それから男は部屋を出て行った。産婆がやるべき仕事を首尾良く済ませると、小さな女はこう告げた。「あたしはあなたのように洗礼を受けたキリスト教徒です。でもあの厭（いや）らしい水の精があたしを取り替えたんです。あたしがまだ六箇月の時にね。あれは三日目になるとあたしの赤ちゃんをいつも食べてしまうんです。あれはすぐ戻って来るでしょう。そしてあなたにどっさりお金を渡そうとするでしょう。だけど、他であなたに払われるより多く取ってはいけません。あなたがたの商売のひとはできるったけたくさん貰（もら）いたがりますけどね。出されても、長細白麺麭（ヴェーク）[133]なんかをお土産に持って帰っちゃいけませんし、葡萄酒（ワイン）も飲まないで。さもないと後であれがあなたの頸（くび）を捻（ひね）ります」。――産婆はきちんと教えられた通りにし、無事に、かつ騙（だま）されもせず、家に連れ戻された。別れ際、水の精はぶつぶつと呟（つぶや）いた。「あんたは利巧に振る舞った。相応の礼より余計に取らずでなあ」。――さてそれからというもの、この産婆はもはや先方の家で思うさま飲んだり食べたり、土産にいろいろ持ち帰ったりしなくなった。そし

て貧しい人たちに大きなターラー銀貨をせびることもなくなった。

五二九　グロースヴィッツの取替え子（ヴェクセルバルク）

地方は同じだが、ザールフェルトの向こうで、若い衆や娘らが灯り部屋〔＝糸紡ぎ部屋〕[139]に集まって、皆わいわい陽気だった。例外は同家の子守娘（こ）で、これはもう、いらいらむしゃくしゃしていた。理由は、奉公先のここの子どもが異形（いぎょう）な上泣き喚（わめ）いてばかりで、苦労があんまりひど過ぎたから。悲しいかな、これは取替え子（ヴェクセルバルク）[140]だったのだ。この百姓屋敷（ホーフ）[141]の後屋（こうおく）には壊れかけた古い穴蔵があり、時時中に明かりが見えた。若い衆や娘らが糸紡ぎ部屋の集まりをやっていた[142]この宵にもこれが起こった。そこで娘たちは「男の人たちが穴蔵に入って、どんな明かりなんだか見て来たらどう」と言った。しかし若者連にはその気はなくて、言うことには「女の子たちこそあそこに行ったらどうだい。やってのける子がいたら、仕立て下ろしの下裳（スカート）を買ってあげよう。ただし、何か証拠の品を持って来なくちゃいけないけどね」。――娘たちのだれにもその気はなかったが、あのむしゃくしゃしていた子守はこう言った。「あんたたちがその間ちびのぎゃあつくぼうず（バルク）のお守りをしてくれるってえなら、あたしが行ってみせる」。ああ、いいともさ、ということになって、子守は出掛けて行った。穴蔵の戸は開いており、階段の下でなにやら明かりがぼんやり光っていた。子守娘が、変わったことがあるか、と覗（のぞ）き込んでいると、穴蔵の奥でぶつぶつ声がした。「覗くんなら、投げるぞ」。娘っこはびくともしないで返辞した。「投げるんなら、受け止める」。――これがなお二回繰り返され、それから娘が前掛けを拡（ひろ）げると、穴蔵の奥から何か黒い物が飛んで来て、どさりと彼女の前掛けに入り、ばたばたもがいた。それは幼児だった。これはもう証拠として充分。娘はその子を抱いて屋敷前面

の母屋に急いだ。一同が不思議、不思議と仰天して子どもを眺めていると、屋敷の主婦がやって来て叫び始めた。「ああ神様、ああ神様、あたしの子だ、あたしの愛しい子だ。どうしてまあ、元通りこんなに可愛くなって」。――これは本当にこの女性の子どもで、揺り籠の中にいた取替え子はというと、いずこへともなく消えていた。――かくなるしだいで、あの辺りでは、男にせよ女にせよ、何か思いがけないものを貰うと、「娘が子どもを授かったみたいになっちゃった[143]」という慣用句ができた。

五三〇　鰊小人（ヘーリングスメンヒェン）

ザールフェルト[144]のヨハンネス教会（キルヒェ）[145]の傍にごく古い、砕けかけた石像が見られる。一匹の魚を掲げた男の小人の姿。これはこのごく古い都市の象徴である。悲しいことながら、八七五年この町で、カール大帝〔＝シャルルマーニュ〕の三人の孫――ルートヴィヒドイツ人王（デア・ドイチェ）[146]の子息ら、カールマン[147]、小ルートヴィヒ[148]、カール肥満王（デア・ディッケ）[149]――が素晴らしい大ドイツ国を初めてお互いの間で分け合ったのだ[150]。この地の名高いベネディクト派修道院は既にカール大帝が建立していた。鰊小人（ヘーリングスメンヒェン）が立っている場所はテューリンゲン族とソルブ語を話すヴェンド人[151]の郷国の境界だったという。後者はテューリンゲン族と常に敵対状態にあり、相手をテューリンゲンの鰊鼻（にしんばな）[152]としか呼ばなかった。ザールフェルトのごく古いソルベン城（ブルク）――町の上手の端にあって川と森に面しており、いまだに巨大な廃墟（はいきょ）として讃歎されている――はソルブ人に対する防塞だった由。それが本当ならばね。庶民はソルベンブルクではなく、高い群れ（デア・ホーエ・シュヴァルム）[153]と呼んでいる。微（び）に入り細（さい）に穿（うが）つ考証家連は賢いことこの上なくこの名称を「高キそるぶ人ノ城（アルクス・アルタ・ソラバルム）[154]」とお訳しあそばす。カッティ族（カッテン）[155]――ハッテン――ヘッセンと同様、ソラバルム――スバルム――シュ

ヴァルム。反論できないなあ。ま、当たってなければ、間違いというだけのこと。

五三一　教会と橋が同価格

ザールフェルトの民衆の間では周知の伝承だが、五つの高く幅広な円弧橋脚（アーチ）を持つ大きく美しいザール橋（ブリュッケザンクト）は聖ヨハンニス教会（キルヒェ）と同時に建設され、橋の造営金額は教会の建立費より三ヘラー（156）高かっただけだ、という。教会建立はドイツ人棟梁（とうりょう）に、架橋は南国人の親方に（157）任された。両名はどちらの工事が先に竣工（しゅんこう）するか互いに争い、この競い合いは妬（ねた）み嫉（そね）みの醜悪な闘いとなった。彼らは生死を賭（と）してまで張り合おうとし、相手の工事の進捗（しんちょく）ぶりを修羅（しゅら）を燃やして監視するに至った。教会はとうとう、塔の尖端に石を一個取り付けて、その上に十字架を置けば完成、ということに。しかし、夜になり、工事完了は明朝に延ばさざるを得なくなった。橋を架けていた親方はこれを聞き知り、折しも荒れ狂う嵐の夜を突き、松明（たいまつ）を点（とも）し、瀝青環（ペッヒラング）（158）を炎炎と燃やして、工事遂行に邁進（まいしん）させた。いや、それ ばかりか彼は、憎い競争相手に勝利できるように悪魔の助けを頼み、自分の魂を約束した、とも言われる。棟梁は早朝に仕事に掛かり、塔の尖端に攀（よ）じ登った。しかし徒弟が最後の石を渡し、彼がこれを嵌（は）め込み、それから十字架を固定しようとした時、高らかな歓声が橋の方から響いて来た。橋が竣工した、との徴（しるし）だった。棟梁は死ぬほどの驚きに戦（おのの）いた。塔の十字架は彼の手から滑り落ちた。聖なる証（あかし）は憎悪と憤怒に凝り固まった男に掲げられたくなかったのだ。落ちる十字架の後を追って棟梁も顚落（てんらく）、扶壁（ふへき）の鋭い角で体を打ち砕いた。その瞬間橋の上で甲高い嘲笑（ちょうしょう）が聞こえた。嘲笑したのは架橋工事の親方か、その脇に立っていて、直後に親方を橋から引っ攫（さら）って行った見知らぬ男だったのか、いずれとも。親方の姿は二度と見られなかった。――これと大層よく似た伝説がレーゲン

スブルク大聖堂とレーゲンスブルク橋にもある（ＤＳＢ八五四）。

五三二　髭の生えた乙女

ザールフェルトの橋にはある救難聖女（ザンクト・ゲヒュルフェ）の像を祀った礼拝堂がある。これには一つならぬ伝説が纏わっている。この礼拝堂を建立したのはアルンシュタットの二人の伯爵だとか。かつては聖霊降臨祭（プフィングステン）（三年毎）と万聖節（アラーハイリゲンタク）には贖宥を求めて夥しい群衆が詣でた。ザールフェルトの伝説にいわく。ソルブ語を話すヴェンド人のある君侯の息女がこっそりキリストの教えに改宗、異教徒の求愛者がひっきりなしに結婚を申し込むのを撥ねつけ、どこか修道院に入りたい、と望んだ。こうした信仰と意図、とりわけスラヴ人の神神からの離反が分かると、彼女の父は激怒し、自分の命令に従わないなら、彼女が信仰を捧げているキリスト教の神と同じ死に方をさせてやる、と誓った。しかし高貴な乙女は毅然として態度を変えなかったので、この異常な父親は残忍な約束を守り、彼女の両腕を十字架に釘付けにさせた。こうして非道にも磔の身を大衆の目に曝された彼女は苛烈な苦しみの中で救世主に、恩寵をお示しになって、体をそれと分からぬように変えてください、と懇願した。願いは聴き届けられ、濃い髭が生え、容姿が男に変容するという奇蹟が起こった。秘かに姫を愛していたある貴族の若者が傍らに寄って、携えた弦楽器を奏で、彼女の痛みを和らげると、彼女はお礼の徴として黄金の靴を片方、足から落とした。この物語は後に美しい石の彫刻となって橋の礼拝堂で示された。この石像は今日なおちゃんと保存されている。

別の説ではこうである。その石の彫刻は聖なる苦難を物語っているのだ、と。姫の実父が道ならぬ愛を迫り、遂に姫は神に体が醜くなるよう懇願、そのために父親は娘を磔刑に処したのだ。彼女が信心した救い主と同じ死を遂

げるように、と。かくして姫は聖なる殉教者となった。父親の欲情と冷酷さがこの上なく苛烈な苦しみを齎したので、後に彼女は苦難聖女（ハイリゲ・キュンメルニス）――もっともローマの聖徒祭暦には載っていない――と呼ばれるようになり、たくさんの聖像や礼拝堂が彼女を顕彰して作られた。かつて貧しい楽士が餓死しそうになった。彼は苦しい最中でも苦難聖女に絶大な信頼を寄せていたので、その聖像の前に跪き、お助けくださいまし、と懇願した。聖像は豪華絢爛たるもので、黄金の靴を履いていた。さて、楽士が祈りを捧げ、それから聖像の前で敬虔な曲を奏でると、御像は黄金の靴を片方、楽士の丁度真ん前に足から落とした。楽士はありがたがってこの貴重な贈り物を貰い、それを売りに出掛けた。ところが金細工師は、像ばかりでなくその靴も拵えた当の人間で、よくよく見覚えがあったから、楽士を法廷へ引き出し、窃盗の廉で告訴した。そこで楽士は裁かれ、死刑を宣告された。刑場へ引かれる途中、楽士はまた聖像の傍を通ることになった。そこで彼はもう一度跪き、苦難聖女に、わたくしの無実を証してください、と懇願した。するとなんと、聖女は履いていたもう一方の靴もあからさまに投げてよこしたのである。――こうして楽士の無実は明らかになり、民衆は皆、神のお助けを、救い主を、聖女を誉め讃えた。そのため聖女の像は更に増え、それも、楽士と脱がれた靴が一緒の像になった。ウィーンに一つ、エアランゲン近郊のエッタースドルフに一つ、等等。

五三三　ザールフェルトの女子修道院

いつとは知れぬ大昔、現在の宮中調剤所（ホーフアポテーケ）[103]の家屋は女子修道院だった[104]。これはかの高い群れ（デア・ホーエ・シュヴァルム）に次いでごく古い、全くビザンティン風建築様式で、いまだに謎めいた石の彫刻が少なからず附属している。この家屋には以

前不気味な代物が出没した、という。かなり狭い内部の許す限り多くの修道女、女子修道院長、男子修道院長らが歩き回り、地下の通路をうろつくのだった。通路の一本目は聖ペトルス修道院(ペータースクロスター)――そこには現在城館が建っている――に、二本目は跣足修道士修道院(バールフューサークロスター)[181]に、三本目はザーレ川の下を抜けて彼方(かなた)の――橋の円弧(アーチ)の一つにある救難聖女礼拝堂(ゲフュルフテンカペレ)の地下に休憩地点がある――アルテンザールフェルト[182]へ、四本目はソルベンブルクの地下へ、五本目は小さい館(シュレスヒェン)キッツァーシュタイン[183]の地下およびその他修道女たちが赴き、またその訪問が待たれていた所へ通じていた。現在宮中調剤所(ホーフアポテーケ)の調剤室となっている所は以前修道院の食堂で、待合室は修道女たちの寝室だった。穴蔵の石炭庫の床には落とし戸――後に塞(ふさ)がれた――が開いていたが、修道女たちは世間の目に触れさせてはならぬものをこの中に秘かに葬った。しかし時折、主として幼児殉教者の日[184]に、それは血みどろの恐ろしい姿で出現、石灰を振り掛けても[185]、落とし戸でも、地下室の扉でも封じ込められはしなかった。また修道院内には――嫉妬が原因で――争い・不和が絶えず、このため建物の外に犬と猫が象徴として描かれたのだ、と言う者もいる。もっとも、これは獅子(ライオン)と熊の姿なのだが……。とうとうある朝、修道院は閉め切られ、そのままになり、中からもはや顔一つ覗(のぞ)かなくなった。ようよう再び開かれた時、内部は数年来無人だったかのように、生気無く荒れ果てていた。修道女たちがいずこに去ったのか、とんと分からない。彼女たちはお馴染(なじ)みの通路を使用、二度と帰らなかったのだ、との説もあれば、呪われて、永久(とこしえ)に院内の部屋部屋から出ることはできず、この極めて古い建物の石が積まれている限り、亡霊となって出没しなければならないのだ、とも言われる。この期限はもっと短い、とも、修道女らが出たのはザールフェルトに修道士が存在した間だけで、こうした時期はとっくに終わったから、お化け修道女らは今はもう皆救われているのだ、とも。――建物の前には大きな石があった、あるいはいまだにある。晦日(みそか)の夜には必ずこの石の上に面梟(めんふくろう)が止まり、羽ばたきをして、かのトゥート＝オーゼル[186]さながら、骨髄に徹するような鋭い啼(な)き声

を挙げる。

五三四　銀の風琴（オルガン）

ザールフェルトの跣足修道士修道院（バールフューサークロスター）には大きく美しい附属教会があり、これはアンドレーアス聖者に奉献されたものだが、後に貨幣鋳造所が教会内に置かれたことがあるので、その後鋳造所がとっくに自前の建物に移ってからも、相変わらず貨幣教会（ミュンツキルヒェ）と呼ばれている。この教会およびかつては修道院だった建物全体はなんとも不気味で、修道士らの亡霊が徘徊（はいかい）、炭火がちらちら燃え、地下の財宝がかっと輝く。修道院だった建物の中には、以前のラテン語学校（リュッテンウム）、現在の古典語中高等学校（ギュムナジウム）がある。〔ラテン語学校時代〕ある教師が通りを帰って来たところ、教会が明明と照明されているのを見た。そこで中へ入ると目にしたのは食卓一杯の燃える蠟燭（ろうそく）と燦（きら）めく食器の数数で、食卓に着いているのは絢爛（けんらん）豪華な装いの殿様およびその宮廷人一同。鉱夫らが床を掘っていて、激しく瓦礫（がれき）を投げ出す。それが教師のすぐ足許（あしもと）まで飛んで来て、いくらかは足に落ち、靴の中にまで入った。「ほうほう、まああんまり急ぎなさんなって」と教師は低声（こごえ）で鉱夫の一人に呼び掛けた。すると雷鳴のような轟（とどろ）きで巨大な扉が幾つも閉まり、蠟燭はぱっと消え、教師は恐ろしい深い闇の中に独り残された。怖さに震えながら跪（ひざまず）き、一くさりお祈りを唱えて立ち上がり、出口を捜（さが）すと、聖具室の潜（くぐ）り戸が見つかり、それは学校の広間（ホール）に通じていた。翌朝〔自室の〕床を見るとなにやら光る物がある。それは履いていた靴の中で、前の夜飛んで来て靴の中にまで入った塵芥（ちりあくた）が悉（ここ）く燦然（さんぜん）と輝く黄金に変わっていたのだった。

昔からの、そしていまだに語り伝えられている伝説に、古い貨幣教会（ミュンツキルヒェ）には銀の風琴（オルガン）が埋まっている、というのが

ある。埋めたのは跣足修道士修道院（バールフューサークロスター）の修道士たちで、宗教改革が彼らをザールフェルトから追った時のこと。彼らは修道院の財宝を携えてエアフルトへ逃亡したのだったが、風琴（オルガン）は持って行けなかった。ザールフェルト公クリスティアン・エルンスト[167]はこの宝を掘り出したいと思い、鉱夫や財宝巫術師（ふじゅつ）を何人か招き、森閑とした真夜中、掘削を開始させた。間もなく、もう櫃（ひつ）に行き当たったと覚しく、金属的な空ろな音がした。しんと静まりかえり、全員固唾（かたず）を呑んで耳を欹（そばだ）てた。さて鉱夫たちが黙黙と仕事を続けていると、突然「燃えてるう」という叫び。同時にぱっと焔（ほのお）が燃え上がるのが見え、鈍い響きと共に宝は地底へ沈んだ[168]。もっとも焔は妖（あや）かしの作り出した幻影ではなく、実際に教会の屋根の棰（たるき）が燃えたので、その痕（あと）は梁（はり）にいまだに見られる。どうして火が出たのかだれにも分からず、今日に至るまで財宝と銀の風琴（オルガン）は掘り出されないままである。

五三五　神の御手（みて）

ザクセン選帝侯ヨーハン・フリードリヒ寛容公（デア・グロースミューティゲ）[169]にとってまことに不運だったミュールベルクの戦い[170]後、選帝侯は捕虜となり、彼を打ち破った皇帝カール五世に随（つ）き従わねばならなかった。行軍の途中両者はザールフェルトへやって来た。皇帝は落成したばかりの旅館黄金鵞鳥屋（ツア・ゴルドネン・ガンス）――市庁舎の近くにあり、現在黄金錨屋（ツム・ゴルデネン・アンカー）という――に宿泊、選帝侯は中庭近くの穴蔵部屋に仮寓（かぐう）をあてがわれた。部屋の前には警護のイスパニア兵らが立哨（りっしょう）した。皇帝と選帝侯はこの新築旅館の最初の客だった。この邦（くに）の主（あるじ）ではあるが、今は敵の思うがままの高貴な囚人は、その性格の特徴である威厳をもって運命に耐えていたが、この穴蔵の獄舎に入れられてから、何か山のような重みが心にのし掛かるようで、不安でならなくなった。押し潰されるような心配が我慢できず、見張りの兵士らに、中庭で

ちょっと新鮮な空気を吸うのを許可して欲しい、と頼んだ。皇帝は、認めてもよろしいですか、と訊ねられて、承諾した。そこでヨーハン・フリードリヒが牢獄から外へ出た途端、轟音と共に穴蔵の天井が崩壊、もしまだ下にいたら、すんでのところ選帝侯を圧死させるところだった。全てを見そなわす神の摂理がこうしてありありと示されたので、カール五世は心動かされて高位の囚人をもっと良い部屋へ移すよう指示した。

五年の間ヨーハン・フリードリヒは虜囚の憂き目を堪え忍んだが、遂に自由の身となると、ザールフェルトを再訪、忠良な臣民の歓呼に囲まれて黄金鵞鳥屋にもう一度泊まった。そして市庁舎での厳かな集まりで忠誠な諸等族に対し、皇帝から与えられた領土返還状を公にしたのである。

五三六　授かった幸運

ザールフェルトのすぐ近くにグラーバ修道院の故地[四]がある。ここの青年がこんな夢をみた。自分にはある莫大な財宝が与えられると決まっていて、しかるべき時に、夢で極めて詳細に示された場所で掘るだけでよいのだ。そこには金貨がぎっしり詰まった壺があるだろう、と。翌日知人の一人に逢った青年は、この不思議な夢を相手に物語った。相手はそれを聞いてげらげら笑い、そんなことはありっこないから止しな、と言った。しかし知人はその日の夜になるとこっそりその場所へ出掛け、穴を掘った。すると本当に話の通りの壺が出て来た。もっとも壺の縁まで一杯になっていたのは待望の金貨ではなく黄色い蟻だった。瞞されたのにかんかんになったこのご立派なご友人は、くたびれ儲けと飛んだ夜なべ仕事の仕返しをしようと、夢物語を聞かせてこうした不愉快千万な幻滅を味わわせてくれた仲間の寝床の中へ、小さな黄色い蟻を撒き散らした。蟻に咬まれて目を覚ましたら、さぞかし悲鳴を

挙げるだろう、と聴き耳を立てていたが、一向気配もなく、あちらは死んだようにぐっすり。青年が朝になって目を開けると、寝床の中は金貨だらけだった。なにしろ幸運は他ならぬ彼に授けられたのだから。

五三七　小鼠（こねずみ）

ザールフェルトから程遠からぬ下ヴィルバハ村には騎士の荘園（リッタージッツ）[121]があるが、昔ここの下僕がしげしげ、それもひどく夢魔（アルプトルーデ）[123]に悩まされ、全然安眠できず、打つ手もなかった。なにしろあのルール〔＝ルーラ〕の御仁が使った、鍵穴を塞（ふさ）ぐという間違いのない方法（ＤＳＢ四七八）を彼は知らず、聞かされもしなかったからである。さていつかある時、宵も更けた頃、奉公人たちが部屋に集まり、果物の皮を剝（む）いていると、睡気（ねむけ）の差した女中が一人、少し休もうと、長腰掛（ベンチ）けに寝そべった。そうしてしばらく横たわっていたが、幾人かが、彼女は眠っているのか、すぐにはまた起きないのか、と見遣（や）ると、なんとまあ、眠っている者の口から赤い小鼠が一匹這（は）い出して来たので、だれもがびっくり仰天、お互い肘（ひじ）突き合って教えたもの。鼠は羽目板を窓の縁まで駈（か）け上がると、窓が開いていたので、そこからぱっといなくなった。下男下女たちと一緒にいて、林檎（りんご）を剝くのを、それから食べるのも手伝っていた侍女が好奇心を起こし、眠っている女中を起こそうとした。他の者たちは、そんなことをしちゃいけない、どうやら良いこっちゃないよ、と注意したのだが、侍女は止めようとせず、近寄って女中を揺さぶった。ところがその体は硬く強張（こわば）っていた。そこで別の場所に移してみたが、前から死んでいるかのようだった。その後すぐ例の赤い鼠がまた窓からピョンと跳び込んで来て、元の体に這い入ろうとした。あのちっぽけな指くらいの長さの小動物が女――低地地方のフィリフォルデ附近で牧草を刈る者たちが見た女（ＤＳＢ一五〇）で、実は夢魔（マール）だったわけだが

――の体に戻ろうとしたように。しかし、さっき這い出した場所に女中の口が見つからなかったので、おどおどあちこち走り回っていたが、そのうち消え失せた。さて、この女中は二度と息を吹き返さず、死んだままだった。侍女は自分の考え無しを悔やんだが、今更どうしようもなかった。もっとも、あの下僕の睡眠中、彼におっかぶさって苦しめた夢魔（トルーデ）は同じこの女中だったのである。その証拠に、女中が死んでしまってからというもの、下男はアルプやらトルーデやらに胸を押されて悩まされることはとんとなくなったから。

五三八　寡婦（かふ）の呪い

ザールフェルトとグレーフェンタールの間に金持ち村（ライヒマンスドルフ）[四]がある。ここではその昔鉱産物が無尽蔵、鉱山業は無窮だった。だからいまだに近くの山は黄金山（ゴルトベルク）と呼ばれている。もう一つはヴェーヌスベルクの山という。山内に僥倖（ツーフェリヒ・グリュック）なる名を持つ鉱坑がある。多分ヴェーヌスベルクを掘り進んだ者がたまたま幸運（ツーフェリヒグリュック）に恵まれたからなのだろう。村は以前別の名だったが、豊かな鉱業生産が全住民を金持ちにしたので、金持ち村（ライヒマンスドルフ）になったのである。もう一三三五年のことになるが、オルラミュンデ伯爵家とシュヴァルツブルク一門は金銀鉱山の産出額を競い合い、比較し合った。この村の周囲ほぼ二哩（マイル）の範囲内における縦坑（たてあな）からの産額で、この縦坑の数は二百二十にも上（のぼ）った。住民は――伝説の語るところによれば――莫大な地場産の金銀を採掘し得たので、九柱戯の柱（ピン）を黄金で作り、黄金の球をこれへ転がすほどだった。村は鉱山都市の特権を享受し、冗談ではあるが、ザールフェルトの郭外市（かくがいし）[五]と呼ばれたくらい。

ある時こんなことが起こった。ライヒマンスドルフの縦坑の一つでグルデン金貨四千枚と評価される大きく純良な金鉱石が見つかった。鉱塊は採掘場で安楽椅子（いす）の形にされた。折しもあるザクセン公が豊かな鉱山を視察しよう

とやって来たので、その鉱塊を板の上に綱でしっかりと固定し、公爵は一人の鉱夫に付き添われてこれに坐り、縦坑へ吊り下ろされた。ご満悦で地上に戻った公爵は一握りのドゥカーテン金貨を与えて若いお伴への褒美とした。若者はその後間もなくその金を見せびらかし、教会堂開基祭の踊りで楽しくやった。そして、鉱石を盗んだ、との嫌疑を蒙り、即刻秘密裁判に掛けられ、拷問されたあげく、犯してもいない窃盗を自白する羽目に陥った。当時の流儀では、泥棒を何年も拘置して大事に面倒を見てやったりはせず、あっさり片づけてしまうのが常だったので、無実の鉱夫は刑場に引かれて絞首架で吊されることになった。彼の哀れな母親は息子の助命を懇願したが、甲斐はなかった。彼女も息子自身も潔白を誓い、あの金貨は気前の良い公爵様の贈り物だ、と言ったが、甲斐はなかった。若者は哀れにも絞首されねばならなかった。絶望のどん底に突き落とされた老母はふらふらと刑場を出ると、息子が公爵とともに降りて行ったあの極めて豊かな坑道へ向かい、坑口を三度よろめき廻り、地獄の名において恐ろしい魔法の呪詛を唱えた。それから携えて来た罌粟種の詰まった壺を摑んで叫んだ。「あたしの罪のない倅を死なせた報いにこの鉱山が呪われますように。深みに落ちて行くこの罌粟種の数ほどの年の間、一粒の黄金も見つかりませんように」。こう叫び終わると彼女は、魔法の仕上げとして、地下の精霊どもに呪詛成就の生贄を捧げるべく、縦坑の底へ跳び込んだ。彼女の体が地底で砕けると、地下の霹靂が全山地に轟き渡り、主坑は崩壊、急激な出水に呑み込まれ、更にライヒマンスドルフ鉱山の大部分が——それとともに地域住民の驕りと栄華も——終焉を迎えた。ちなみに——フォイクトラント[186]のシュライスにあった豊かな縦坑も同じようにある年寄りの魔女に呪われて滅亡した。

五三九　荒れ狂うベルタ（ディ・ヴィルデ・ベルタ）

ザールフェルト周辺地域、ザール河谷（ターール）、曠野（ハイデ）[177]、カムスドルフの鉱山、オルレ地域（ガウ）、それから彼方（かなた）のフォイクトラント――この土地自体もそうだが――の方角に掛けて、民間伝承は無数の神話的登場形態をさまざまに集団分けしている。すなわち、まず巨人族、小人族（ツヴェルク）。小人族には山の小人（ベルクメンヒェン）、家のちびさん（ハイムヒェン）のような家精・お助け精、悪戯小人（ヴィヒトライン）、臆病な森の小人たる苔男（モースマン）、女の樹の小人（ホルツヴァイベル）や女の苔小人（モースヴァイベル）がある。森の小人（ヴァルトツヴェルク）は荒れ狂う猟師（デア・ヴィルデ・イェーガー）がしょっちゅうと言っていいほどホイホイと喚声挙げて追い詰め、駈（か）り立て、殺す対象とされる。ディトマルシェン地方のヴォーデが地べた（ウンターイルディッシェ）の下の衆を狩るように[178]。次いで有翼龍（ドラッヘ）、ザーレ川（ザーレ）の女の水の精（ニクセ）、最後に荒れ狂う猟師（デア・ヴィルデ・イェーガー）自体とその狩猟の伴侶である荒れ狂うベルタ（ディ・ヴィルデ・ベルタ）[179]。荒れ狂う猟師（デア・ヴィルデ・イェーガー）自体には特定の名はない――一度だけベルンディートリヒ[180]なる名のそれに出くわしたことがあるが、保証はあやふや。片や伴侶の方は鉄のベルタ（ディ・アイゼルネ・ベルタ）、ビルダベルタ、ヒルダベルタ（フルダ＝ベルタか）と呼ばれ、南ドイツではペルヒタおよびプレヒタである[181]。ベルタ、猟人および苔小人（モースロイテ）の外貌（がいぼう）と申せば、髪は伸ばしほうだい、梳（くしけず）ることなくもじゃもじゃ。ヒルダベルタだが、これの属性は、ヘールゼーレンベルク周辺で狩りをするフルダと全く同じで、物臭女中の亜麻（あま）束をもつれさせ、下裳（スカート）をずたずたに引き毟（むし）る。特に年の最後の日には。さて、そこでこの日に団子（クレーセ）[182]と鰊（にしん）[183]――テューリンゲンの鰊鼻どもの好物[184]――を食べる習慣の人が少なくないのだが、それでなくてもベルタを持ち出して子どもらを脅かす大人は、「もしこれを食べなかったりするとね、荒れ狂うベルタ（ディ・ヴィルデ・ベルタ）がやって来て、おまえたちのお腹を切り裂いて、中身を引っ張り出し、またお腹を縫うんだよ。縫い針の代わりに犁（すき）を、綴じ糸の代わりに車輪止め鎖[185]を使ってね」と彼らに言う。ところで大晦日に鰊を食べ

るのにはもう一つ広く流布している理由がある。鰊の魚卵だが、これをこの日に食べると、翌年お金が授かる、と信じられているのだ。同日の昼、扁豆を食べるのも同じ理由からである。

五四〇　頭に刺さった斧

ザールフェルト周辺のある森の村の農夫が、精霊が野や森を頻繁にうろつく十二夜[107]に薪を採りに荷車を駆して出掛けた。狭い凹道に差し掛かると、向こうから荒れ狂う狩りの女が二匹の猫に牽かせた馬車でやって来るのに行き逢った。農夫は道を避けることができず、あるいは避けようとせず、ひどく罵り始めた。するとベルタ夫人は携えた斧を振り上げ、真っ向から農夫の額に激しい一撃を喰らわせ、頭蓋に手の幅の深さまで打ち込んだ。そして輓馬もろとも轟轟と農夫の頭と荷車を飛び越えて行ってしまった。激しい一撃で農夫は気が遠くなり、これでもう最期と思った。しかし意識を取り戻すと、元気で怪我一つしていないのが分かった。さはさりながら——ベルタ夫人の薪割り斧が柄もろとも肉に生えたように頭の真ん中に突き刺さったまま、しっかりとぐらつきもしない。こうして農夫は村に戻ったが、斧を頭で運んでいるのでだれもがびっくり仰天。以後彼は家に引き籠もっているか、高い帽子を被るかしなければならなかった。なにしろいかなる理髪師兼軍医[108]もこの斧を彼の頭から取れなかったからである。けれども農夫は仕事に勤しむことはできた。さて、もう一年もこうした罰を受けていた農夫は、ある日のことまた薪を採りに荷車を駆して出掛けた。すると全く前回と同じ状況で狩りの女に出逢った。しかし今度は急いで道を避け、役獣を後戻りさせ、ベルタ夫人に場所を譲った。すると森女はまことに愛想良く礼を言い、片手で農夫の額をさっと撫でた。そしてベルタは行ってしまった。すると斧が農夫の額から手に落ちて来た。頭には見ても

触っても傷痕（きずあと）はなく、斧を自身つらつら眺め、ひとにも吟味させたところ、それが純金製であることが判明した。

五四一　ホーエンヴァルトの半分こ

ゾルビスバハ近在の男が夜ホーエンヴァルト――ザーレ川岸辺のカウルスドルフ近郊――からヴァライダ谷（タール）へと下って行くと、折しも荒れ狂う同勢（ダス・ヴィルデ・ヘーア）が山の背で狩りに進発、女の森の小人（ヴァルトヴァイプヒェン）たちや灰色の男の苔小人（モースメンヒェン）らが迫害者に追いまくられ、縮み上がって逃げて来るところだった。恐ろしいどよめきを耳にし、凄（すさ）まじい駈（か）り立ての光景を月明かりで目の当たりにした旅人は、とうとう恐怖のあまり訳の分からぬ狂気に襲われ、ついこう叫んでしまった。

ほうい（フッサ）[188]、ほうい（フッサ）、半分こ、
ここなるホーエンヴァルトのわしに。

「ほほほうい（フッサー）」とそれに対する応答が響き渡った。そして翌朝男の家中、いずれも頸（くび）を捻（ひね）られ、足を引き抜かれた鳥たちの屍骸（しがい）や、一部は男もこれまで見たことのない野獣肉で一杯になった。いやもう、梟（ヴィヒテル）も鶫（ヴァハテル）も一緒くたという有様。その上門柱には女の森の小人（ヴァルトヴァイプヒェン）と男の苔小人（モースメンヒェン）の片身半分[190]が引っかけられており、法外な悪臭を放っていた。

五四二　疫病神（ピュンシュピェン）どん

クルムの峰――異教時代にはよく火を噴いたといい、またあの首縊（くく）りの柏（アイヒェ）の所在地――が聳（そび）えている曠野（ハイデ）では、荒れ狂う猟師（デア・ヴィルデ・イェーガー）が苔男・苔女（モース・ロイテ）をしばしば大いに好んで駈（か）り立てる。ある時アルンスゲロイトの農夫がその物音を聴きつけ、ゾルビスバハの男のように彼も狩りの掛け声を挙げ、同様の羽目になった。もっともあれほどたっぷり頂戴（ちょうだい）したわけではない。荒れ狂う狩猟隊に「やれ、やれえ（ユー・フ・ヘー）」と歓呼したのみで、半分呉れや、とねだりはしなかったから。幸いにも女の森（ヴァルトヴァイプヒェン）の小人を片身半分発見しただけで済んだ。これは腐りきって緑色になっており、家の扉の脇に附いている鉤（かぎ）――家畜を処理する時いつも仔牛とか豚を吊しておく――に引っかけられていた。恐れ戦（おのの）いた農夫がある地主の許（もと）に駈（か）けつけ、相談すると、その肉に触らないように、吊したままにしておけ、と言われた。農夫がその通りにしていると、悪臭芬芬（ふんぷん）の肉片は消えてなくなった。農夫は二度と狩りの掛け声に同調しなかった。

遙かザーレ川を見下ろせるプライリップ村の九柱戯場に、日曜日、村の若い衆が集まって夜になるまで楽しくやっていた。すると突然荒れ狂う猟師（デア・ヴィルデ・イェーガー）が――頭が無かったが――ザーレ川の彼方で馬を走らせているのが見えた。「おうい、みんなあ、おら、あいつに一つあくたれをこいてやるべえ」とお先走（さきばし）りの若者が叫んだ。「おら、知ってるだ。どうすりゃあいつをほんとに怒らせられっか」。他の者が、黙っていろ、と宥（なだ）めたが無駄で、その若者は進み出て、大声でこう怒鳴った。

疫病神（ピュンシュピェン）どん[98]、疫病神（ピュンシュピェン）どん、

綺麗な赤い靴下持っとるな。

この文句が口から出た途端、ザーレ川をバシャバシャと横断して荒れ狂う猟師（デア・ヴィルデ・イェーガー）が迫って来た。若者たちは急いで逃げに掛かり、最寄りの家屋に跳び込み、錠を下ろし、閂（かんぬき）を掛けた。彼らが中に入るやいなや、荒れ狂う猟師（デア・ヴィルデ・イェーガー）はもう扉の外に来て、どんどんがたがた凄（すさ）まじい音を立てた。白白明（しらじらあ）けに怯（おび）えきった青年たちが外へ出ると、戸口の前に赤い肉片が落ちていて、恐ろしい悪臭を放っていた。何よりも困ったのは、この臭い肉をいくら片づけてもしょっちゅう戻って来たことで、やっとこさ次の週の土曜日の晩に消え失せた。

五四三　ヴェレ夫人

高き物見村（ディ・ホーエ・ヴァルト）はザールフェルトを見下ろすカウルスドルフ近郊にある、その名は昔ここに建っていた塔に由来する。この塔には昔賢い女[10]が住んでいて、周辺の者が相談にやって来た。この秘法に通じた女性（ネ）[10]はヴェレ夫人と言われたので、いまだにディ・ホーエ・ヴァルトの下の谷はヴァレイダ谷（タール）と呼ばれている。ヴェレ夫人は時折山の洞窟（どうくつ）にも引き籠もった。そこで今日なおその辺りに亡霊として出現する由。雪のように白い亜麻布（あまぬの）の衣を纏（まと）い、幅広の帯を腰に締め、踵（かかと）までも届く波打つ髪を靡（なび）かせて。彼女もまた荒れ狂う同勢（ダス・ヴィルデ・ヘーア）の近くに、いや、それに随（つ）き従っていたことがあったとか。ただし、彼女は男の森の小人（ヴァルトメンヒェン）や女の森の小人（ヴァルトヴァイプヒェン）を追いかけ回すのに手を貸すわけではなく、庇（かば）ってやるのだった。近在の農夫らは、薪採（たきぎ）りから家に帰る際、時時彼女が森の中の高みに立っているのを目にしたもの。荒れ狂う同勢（ダス・ヴィルデ・ヘーア）が進発する時、狩りの角笛が鳴り渡るのに耳を傾けているのだった。かつてある考え無しの

農夫が、山裾を通り過ぎて行く荒れ狂う同勢に向かい、「あんたらあ、あすこにござる奥方に取った獲物をいくらか売る気けえ」と訊いた、という話がある。次の日、この男がヴァレーデン山の幅広な巌上で体を切り刻まれて横たわっているのが発見された。この女性は時折薄黄色の牝牛の恰好で山峡をさまよい歩いていることがあった。

近くのロクヴィッツ谷にトルーデンクッペという名の巌山がある。この山上にも白衣の女性が徘徊する。後ろに引きずる長い髪を風に靡かせて。彼女は大きな庖丁を携えており、独りぼっちの旅人がいると繁みに誘い込んで、巨大な古の生贄の石の上で殺すのだとか。

五四四　ザーレ川の女の水の精たち

ザーレ川の女の水の精たちについては伝説が多い。この流れ[105]はフィヒテル山地（ＤＳＢ六九六）の水源からバルビー近くでエルベ川に合流するまで、広大な領域をうねくねと曲がりくねっている。

ザーレ川と小都市ラニス[106]の間にあるヴィルヘルムス村[107]ではかつてザーレ川の女の水の精が頻繁に現れた。彼女はそこの山の池で下着を晒したもの。それは花のように白く、赤い縁取りだった。荷馬車で通り掛かった農夫が、その洗濯物を堆肥まみれの笞で数回引っぱたいたので、汚らしい染みが付いた。すると突然女の水の精が馬車の脇に立ち、二度とそんなことをしてはいけない、さもないとおしまいよ、と叱った。――下男はぶつぶつ言いながら立ち去った。次に同じ場所を通り掛かると、またまたあえかな衣類が出ていたが、水の精はいなかった。大概の連中の心に潜んでいる意地悪根性に駈られた若者は、花のように白い下着を思い切り笞打ち、汚らしい筋を何本も附けた。こういう悪戯に夢中だったのでとんと気付かなかったが、傍の山の池から水が際限もなくどっと流れ出した。とう

とう足が濡れたのを感じ、それから膝まで浸った。どんどん溢れ出す洪水から逃げようと、荷馬車に上がろうとしたが、水の精が出現、若者をぐいと引き戻し、水の中に沈め、摑まえて放さなかったので、とうとう息が絶えた。

このザーレ川の女の水の精は長い間ヴィルヘルムスドルフ近くのヴァルパー原にあるコスター泉と幾つもの丸い池で暇潰しをして暮らした。かつて村の男が打梭棒[98]にしようとヘルティヒシュテレの傍に針葉樹を探しに行った。この村人がヴァルパーヴィーゼを歩いていると、丁度日が昇った。彼は水の精が目の眩むほど真っ白な洗濯物をコスタークヴェレの縁に拡げて乾かそうとしているのを見た。彼女自身はその傍らに坐り、我が子が眠っている揺り籠を揺らしていた。この光景にびっくりした男は居心地のよろしくない場所を避けようとしたが、水の精は早くも彼に気付き、何の用事か訊くと、きっと満足できるような打梭棒を採って来てあげる、と約束、ただその間ちっちゃな赤ちゃんの揺り籠をちゃんと揺らしておいてちょうだい、と言った。男は水の精の気を悪くさせたくなかったので、揺り籠の脇に腰を下ろした。当惑して手をあてがい、自分流儀で強く揺らしたところ、こんな揺すぶられかたに馴れていないちびはわいわい泣き始めた。母親の水の精はその声に振り向き、片手を振り上げて脅し、子どもを優しくいたわるよう命じた。けれどもヴィルヘルムスドルフの村人はそのせいですっかり泡を喰い、揺り籠を引っ繰り返してしまい、一目散に逃げ去った。戻ったザーレ川の女の水の精は逃げて行く男に仕返しを誓い、三掛ける二十四時間が過ぎないうちに、莫迦をやらかしたこの御仁は死体となってザーレ川に浮かんだ。

ライツェンゲシュヴェンド村の男はずっと上手に揺らしたので、水の精から黄金の打梭棒を授かった。

泣き悲しんでいる女の水の精に出逢った男の話がある。子どもが死んでしまったが、どうしたらいいか分からない、とかきくどくのだ。そこで男は、その子を自分の馬車に乗せて村へ運び、教会墓地に埋葬しよう、と申し出た。悲嘆に昏れていた水の精は嬉しがり、そうしてもらい、男にたっぷり礼をした。

Die Saalnixen.

ある時水の精が妻のいる青年を誘惑した。青年の妻は疑いを抱き、夫の跡を跟け、夫が水の精としっぽりと抱き合っている現場を押さえた。若妻は凄まじく哀哭し、我と我が髪の毛を引き毟った。女の苦しみを見た水の精は、彼女の夫をとても愛していたが解放し、こう言った。「連れてお行き。返してあげるよ、これからもずっと。でもね、この人は二度と川岸に近寄っちゃいけない。さもないと、あたしは後悔して、取り戻すかも知れないよ」。そして流れに滑り入って消えた。

あるザーレ川の女の水の精だが、しばしばザールフェルトへやって来て、市中の肉屋の陳列台に立ち寄った。目は魚のように大きく潤んでいて、歯は緑色、下裳の裾からは水が滴っていた。イエナでは毎年水の精たちが人身御供を要求、ハレでも同様だった。それを歌ったこんな滑稽詩がある。

ハレってどこだか知ってるかい。
ハレは谷間にありまする。
綺麗な娘らその中へ。
それからザーレの水の精。[199]

ハレの産婆にプライリップのご同業と似たことが起こった。[200] この人も男の水の精に川底に連れて行かれた。そこで産婦から彼女の夫である水妖の悪意に用心するよう、それから、ドステンとドラント[201]を摑んで、しっかり持っているよう告げられた。この薬草およびこの薬草を身に着けている者に対して水妖もコーボルトも危害を加えられないのである。産婆はこうして無事に帰宅した。

訳注

(1) ヴィンターシュタイン　Winterstein.　現テューリンゲン州ゴータ郡第二の都市ヴァルタースハウゼンの一部。現人口一千ほど。レンシュタイク（DSB四七四注参照）からほんの数キロしか離れていない。その歴史は十四世紀半ば以降ヴァンゲンハイム男爵家と密接に結び付いている。

(2) ゴータ公　Herzog von Gotha.　現テューリンゲン州にあったザクセン＝ゴータ公国の君主。一六四〇年ザクセン＝ヴァイマル公国が相続分割された折に成立。ザクセン＝ヴァイマル公ヨーハン三世の次子が初代君主ザクセン＝ゴータ公エルンスト一世となる。なおこの公国は一六七二年ザクセン＝ゴータ＝アルテンブルク公国に拡大。一六八〇年相続分割により七公国に分かれる。

(3) 主猟官（イーガーマイスター）　Jägermeister.　多くは山林監督官（フォルストマイスター）を兼ね、領主の山林を管理し、狩猟行政を司った。

(4) フリーデンシュタイン城　Friedenstein.　フリーデンシュタイン城Schloß Friedensteinは一五六七年破却されたグリンメンシュタイン城Burg Grimmenstein の跡地に一六四二年建てられた前期バロック様式の城館。ザクセン＝ゴータ公エルンスト一世がその宮殿とした。DSB六〇一にも登場。

(5) バルドゥール　Baldur.　邪神ロキを除いてアサ神族のだれからも愛されていた光明の神バルドゥール――オーディンとフリッグの息子――は、ロキの企みにより、盲目の神ヘズの投げた若い寄生木に貫かれて、死者の神ヘルのしろしめす冥府に下る。バルドゥールの母フリッグに懇願されたヘルは、九つの世界のあらゆる者がバルドゥールのために涙を流すならアサ神族の世界アスガルドに返そう、と言う。神神の使者が九つの世界の隅隅まで訪ね、バルドゥールを悼んで泣いて欲しい、と頼むと、あらゆる者が泣いてくれた。しかし、ある洞穴に坐っていたセックÞökkと名乗る女巨人はそれを拒み、自分は乾いた涙を流すだろう、と答える。これは実はロキが化けたものだった。

(6) おいおい、おめえっちのヴィンターシュタインじゃああの犬が三昧場（カージヒ）（教会墓地（キルヒホーフ））に埋められてるってなあ　Na, bei euch zu Winterstein legt ja der Hund uff'm Kersich (Kirchhof) begraben!　原文は上記の通り。

(7) ヴァルタースハウゼン　Waltershausen.　現テューリンゲン州ゴータ郡第二の都市。現人口一万三千ほど。大インゼルベルク（グローサー）からほんの数キロしか離れていない。紋章は根の付いた三本の緑の樹樹が並立、その中程に一匹の青い魚が左向きになっている。

(8) イングランド王ヘンリーの亡くなったとされた妃（きさき）アンナ――生まれはクレーフェの公女　König Heinrichs von England für todt ausgegebene Gemahlin, Anna, geborene Prinzeß von Cleve.　イングランド王ヘンリー八世の四番目の妃（一五一五―五七）。ただし結婚直後離婚（一五四〇）。結婚は無効とされたが、アン・オブ・クレーヴズは危害を加えられることなく、年金を受け、ロンドン市内で安穏な生涯を終わった。ユーリヒ＝ベルク＝クレーフェ同君連合公国の君主ヴィルヘルム五世の姉。

(9) はたきを渡し［＝公衆の面前で笞打ち（むち）］ den Staubbesen verabreichen. 「はたきを与える」 den Staubbesen geben は「公衆の面前で笞刑（ちけい）に処する」の意。

(10) オーアドゥルフの町 die Stadt Ohrdruf. 現テューリンゲン州ゴータ郡の小都市。

(11) 占い棒（ヴュンシェルルーテ） Wünschelruthe. 水脈や鉱脈を探し当てる棒。金属製もあるが、大抵は二股になった（＝Y字型の）木の棒。二股を両手で持って歩いていると、ぴくっと動いて地面を指すことがあり、そこの土の下に水脈ないし鉱脈が見つかる、とされる。

(12) アルンシュタット Arnstadt. 現テューリンゲン州中部の郡庁所在地。ゲラ河畔にある。州都エアフルトの南方約二十キロ。詳しくはDSB五八四注参照。

(13) テューリンゲンの燭台（デア・テューリンギッシェ・カンデラーバー） der thüringische Kandelaber. ボニファチウスが建立した最初の教会があった場所に造られた高さ三十フィートの燭台の形をした砂石製記念碑。一八一一年ゴータ公アウグストにより、広く集められた寄付金でできた。

(14) ジッツォ Sizzo. シュヴァルツブルク伯爵にして一一四一年ケーフェルンブルクKävernburg（今日Käfernburg）伯爵ともなったジッツォ三世（一〇九三頃―一六〇）。テューリンゲン最古の大貴族の一つケーフェルンブルク＝シュヴァルツブルク（ブルク）伯爵家の始祖。ケーフェルン城はアルンシュタットを見下ろす山城で、シュヴァルツ城（ブルク）はエアフルトの南東六十五キロに位置していた。

(15) アルテンブルク Altenburg. 現テューリンゲン州東部の郡庁所在地。神聖ローマ皇帝フリードリヒ一世（赤髭王（バルバロッサ）・帝）はここに宮廷を開いた。歴史ある古都。

(16) マルク伯にしてベルクの殿エーバーハルト Eberhard, Graf von Mark und Herr zu Berg. DSB一〇七に登場。

(17) 敬虔な師父がたのためにこの上なく素晴らしい養魚池を幾つも作れる wo sich für die frommen Väter die schönsten Fischteiche anlegen lieben. 中世のカトリック教会では鳥獣肉食が禁じられる精進（素食）期間が年間長期に亘った。そこで修道院には鯉、鱒などを飼っておける養魚池が附属しているのが一般だった。

(18) アーゾルフェロート Asolverod. アーゾルフが「ローデン」roden（開墾）した土地。DSB四七六注参照。

(19) シャンパーニュのモリモン修道院で牧人となった ein Hirte wurde zu Kloster Morimont in der Champagne. DSB一〇七に詳しい。

(20) 薔薇型窓（ばら） Rose. ‚Fensterrose' あるいは ‚Rosette' とも。円形でガラスの嵌まった窓。とりわけゴシック様式の教会に見られる。

(21) タンバハ Tambach. 現テューリンゲン州ゴータ郡の小さな町タンバハ＝ディータルツTambach=Dietharzの一部。ドイツ中世の神学者、神秘思想家マイスター・エックハルトは一二六〇年頃この村で生まれた。

(22) シュマルカルデン Schmalkalden. 現テューリンゲン州シュマルカルデン＝マイニンゲン郡の小都市。フランケンの風俗が色濃

く、また長期に亘りヘッセンと政治的行政的に結び付いていた。一五三〇年神聖ローマ皇帝カール五世の下開催されたアウクスブルク帝国議会の後、一五三一年プロテスタントの帝国諸侯および帝国諸都市はシュマルカルデンに会合、反皇帝同盟を結成した。「シュマルカルデン同盟」Schmalkaldischer Bundである。

(23) ひどい病状を発症　erkrankte er so heftig.　結石だったようだ。尿路結石は発症すると多く劇痛に苦しめられるが、結石が尿管を幸い通過すれば万事落着だから、急に快癒したとしても不思議はない。

(24) ザクセン選帝侯　Kurfürst von Sachsen.　ヨーハン・フリードリヒ一世（寛容公（デア・グローミューティゲ））。在位一五三二―四七）。ヘッセン方伯フィリップ一世（在位一五〇九―六七）と共にシュマルカルデン同盟の盟主。ルターの庇護者として有名なその伯父フリードリヒ三世（賢明公（デア・ヴァイゼ））、その父ヨーハン一世（不変公（デア・ベシュテンディゲ））と共に宗教改革の強力な支持・推進者。DSB三七一注、DSB五三七参照。

(25) たんばはハ我ガぷにえる――ヤコブが神と格闘した地の名――ナリ。カシコニテ主（シュ）ハ我ニ現レタモウ。M・L・　Tambach est mea Pniel — den Namen der Stätte, wo Jacob mit Gott gerungen —ibi apparuit mihi dominus. M. L.　ヤコブが兄エサウと再会し許される前夜、独りでいると、何者かが夜明けまで彼と格闘した。ヤコブは、自分が神と格闘した、と考え、その場所をペヌエル（神の顔）と名付けた。旧約聖書創世記三十二章二十三―三十一節。

(26) レンヴェーク　Rennweg.　レンシュタイクに同じ。DSB四七四注参照。

(27) ベーア山　Beerberg.　大ベーアベルク（Großer Beerberg）はテューリンゲン山地（ヴァルト）最高峰（標高九八二・九メートル）。現テューリンゲン州イルム郡。

(28) シュネーコプフ峰　Schneekopfgipfel.　標高九七八メートル。現テューリンゲン州イルム郡。ベーアベルクと同様大層なだらかな山並みである。

(29) 悪魔の浴場（トイフェルスバート）　Teufelsbad.　シュネーコプフ山上の大きな沼穴（モーアロッホ）。これに嵌まると確実に命を失う。

(30) 悪魔の環（トイフェルスクライス）　Teufelskreis.　シュネーコプフ山上に幾つかある湿地の俗称。うっかり迷い込むと、出て来るのは難しい。

(31) シュミュッケ　Schmücke.　テューリンゲン山地（ヴァルト）レンシュタイク沿い、シュネーコプフの下部の平地にある小さな定住地。現在森ホテル・シュミュッケおよび気象ステーションがある。二本の街道の交差点にあり、十六世紀初頭木造の避難小屋が作られ、一八一二年人を宿泊させる権利を得た。一八二三年から堅固な家屋の建造が始まり、一八五一―五二年客用寝室数室と食堂が建て増しされた。この期間ヨエル（以下の注参照）がここの借地契約人（パハター）となっている。

(32) かの太っちょの縮れ毛頭　der dicke Kreiser.　‚Kreiser' は ‚Krauser' である。ヨエルを指す。恰幅の良い彼は「太っちょのヨエル」der dicke Joelで通っていた。

(33) 杜松鶫（ねずつぐみ） Klammtsvogel. 野原鶫（日本では稀）。杜松の実を好んで食べる鶫の一種。

(34) ヨエル氏 Herr Joel. ヨーハン・フリードリヒ・ヨエル Johann Friedrch Joel（一七九二―一八五二）。旅籠屋（ガストホーフ）シュミュッケの伝説的主人で諧謔家。生粋のテューリンゲン人でたくさんの逸話の持ち主。ベヒシュタインの親友だった。

(35) 馬の尻尾を飾ったトルコ（バシ）の殿様 Pascha von einem Roßschweif. オスマン・トルコ帝国の高官は身分を象徴する馬の尻尾（状）の飾りを身に着けた。

(36) ゴルトラウター Goldlauter. 現在テューリンゲン山地（ヴァルト）南部の小都市ズールの一部ゴルトラウター＝ハイダースバハの一部。大ベーアベルクの麓にある。かつて銀と銅が産出された。

(37) 三本脚だけで立っていた stand nur auf drei Beinen. 妖魔は時により三本脚の馬に騎乗する。

(38) 殺しの場（モルトフレック） Mordfleck. 実在の尾根の名。

(39) 暗闇山（フィンスターベルク） Finsterberg. 大フィンスターベルク（グローサー） Großer Finsterberg（標高九四四・一メートル）。

(40) 名前は本当にカスパールだった wirklich Caspar hieß. ヴェーバーのオペラ『魔弾の射手』Der Freischütz の男性主人公猟師マックスの同僚で、悪魔に魂を売っている猟師の名はカスパール。

(41) ゲールベルク Gehlberg. 現テューリンゲン州イルム郡の小さな村。シュネーコプフもシュミュッケもこの村に属する。

(42) 村塾の師匠（シュールディーナー） Schuldiener. ベヒシュタインは、村の学校（ドルフシューレ）の先生、すなわち「シュールマイスター」Schulmeister の意味で用いている。「学僕」とか「学校の小使い」の意ではない。一六四二年ザクセン＝ゴータ公国に一般就学義務制度が導入されてから、「シュールマイスター」は「シュールディーナー」と呼ばれるようになった。なお、村の教会のオルガン奏者兼／ないし合唱指揮者（カントル）の務めも果たした。

(43) ラウター川 die Lauter. 現テューリンゲン州ズール市の市域でゴルトラウターを通る一〇・五キロの川。

(44) 牡角鹿頭山（ヒルシュコプフ） Hirschkopf. テューリンゲン山地（ヴァルト）の山（標高七七二メートル）。

(45) もっともこの採掘場は蹄鉄一つで塞（ふさ）がれているが aber das Bergwerk ist mit einem Hufeisen versetzt. 意味不明。ただし、素晴らしい金銀の採掘場が魔法で塞がれている、との伝説は数数あり、魔法に使われた道具が「山羊の脚」だったりする。

(46) 青巌（デア・ブラウエ・シュタイン） der blaue Stein. 殺しの場（モルトフレック）の尾根から程遠からず、レンシュタイクの北方にある巌の名。現在観光名所。

(47) 殺しの場（モルトフレック）の尾根 Mordfleck. DSB四九二注参照。

(48) フライバハ Freibach. イルム川の水源である細流。

(49) 火男（フォイアーマン） Feuermann. ‚feuriger Mann' とも。ドイツ語圏の伝承で周知の存在。これは（煉獄で）生前犯した罪業を償っているさま

よえる死者とされる。俗信によれば、「煉獄」、すなわち、「浄罪界」では火で罪を浄めるとされるから、何らかの理由でたまたまこの世に出て来るそうした亡霊がかっかと燃え盛っていても当然なわけ。「火男（フォイアーマン）」は、内部から焔が噴き出している骸骨、焔の噴き出る鉛の外套を纏った鉛の男、高く幅の広い火の柱の中にいる黒い男、小脇に頭を抱えた頭無しの黒い男、火のような目をした黒い男などといった人間のような形状、もしくは、不定形（とは申せ、これもさまざま）の火として描写される。このような罰を受けるのはとりわけ、土地の境界標石を動かした罪、とされることが多い。他にも不当な行為で庶民を虐げた領地管理官（アムツマン）、フォルクト等等。

(50) ズール　Suhl. 現テューリンゲン州南部の中心都市。テューリンゲン山地（ヴァルト）の南斜面、ラウター川とハーゼル川の河谷に位置する。数世紀に亘り鉱山都市であり、また武器製造で知られた。

(51) 肉の雨が降った　Fleisch geregnet. 一定範囲に異様な物体が空から降って来る超常現象は、日本を含め世界各地で、歴史的にも観察されている。龍巻がそうしたものを巻き上げて降らせたという説明の付くものもある。魚や蛙の雨はそうしたものであろう。英語‚Fafrotskies‘（造語）「怪雨」。

(52) あのアイゼナハの乙女のように　wie die bei Eisenach.　ＤＳＢ四七三参照。

(53) ズーラ　Suhla. 原文は上記の通り。

(54) ハインリクス　Heinrichs. ハーゼル河谷に位置する。現在ズールの一部。

(55) 黒い雌鶏の領分（シュヴァルツェ・ヘンネ）　Bereich der schwarzen Henne.「黒魔術が流行っている領域」と「ヘンネベルク伯爵領」を掛けている。黒い雌鶏は黒魔術に使用される呪具の一つ。

(56) 皮剝場（シンダースラーゼン）　Schindersrasen. 廃馬廃牛の皮を剝ぐ場所。都市郊外にあった。たとえばアイゼナハには道路沿いに「アム・シンダーラーゼン」Am Schinderrasenという地名が残っている。中・近世の一般人にとっては嫌忌の対象だった。

(57) マールシュテッテ　Malstätte. おそらく「境界の地」の意。

(58) 今日のもてなし鳴り物入りだが、／来年は唄でのおもてなし。　Heut werrschrde nauf g'klunge / un übbers Joar nauf g'sunge!　原文は上記の通り。‚wirschen‘には「損なう」「悪くする」の意がある。しかしこれでは分からないので‚bewirten‘か、と推量したのだが、訳に自信は無い。識者のご高教を俟つ。

(59) ガーメルスハウゼン　Germelshausen.　ハンブルク生まれの作家フリードリヒ・ゲルシュテッカーFriedrich Gerstäcker（一八一六―七二）に同名の短編（十九世紀半ば）がある。それによれば何世紀も前に消え去ったが、百年に一度、一日だけ復活する、ということになっている。

(60) 軍医　Feldscherer.　軍医、軍医助手。軍医といっても、負傷した手足を壊疽（えそ）にならないよう切断したり、創傷を縫合したり、骨折

を接いだりが任務の一般。直訳すれば「従軍理髪師」。なお詳しくはＤＳＢ五四〇注参照。

(61) ローア　Ror.　ベヒシュタインは上記のごとく綴っているが、現在では‚Rohr‘が普通。現テューリンゲン州シュマルカルデン＝マイニンゲン郡の小村。

(62) ミカエル祭　Michaelis.　九月二十九日。大天使ミカエルの祝日。秋の収穫を感謝し、賦課された租税を払う日だった。市町村では盛大な市が立てられた。

(63) ファールの種（羊歯の種というべきか）　Fahrsamen (soll Farnsamen heißen).　その通り、「羊歯の種（ファルンザーメン）」というべきなのである。羊歯（しだ）の持つ魔力についてはヨーロッパの殆どの民族が信じて来た。数多くの伝説が妖精や小人の秘やかな生活圏である小暗い森の中で育つ神秘的なこの植物を言挙げしている。花が咲くことなく繁殖するので、羊歯は洗礼者ヨハネ（ヨハンニス）の祝日（六月二十四日）の夜だけに開花する、との民間信仰が広まった。この夜、森へ入って羊歯の下に肌着を脱いで置き、自分は全裸で朝まで待ち受けると、肌着に羊歯の種――胞子が落ちる。これを手に入れれば、さまざまのことが叶うのである。隠身もその一つ。いなくなった馬を探して野原をさまよっていた農夫が、それと気付かずに靴に羊歯の種を入れてしまい、姿が見えなくなった、という話がある。村に戻った農夫は、姿が見えないので、だれからも話し掛けられない。自分では訳が分からぬ内、とうとう怒鳴りだし、なにやかやのあげく、靴から種を棄てて解決。羊歯の種の効能を求めてのことでないだけに、却ってまことしやかである。所持の効用はこの他、金持ちになる、悪魔を祓える、隠された財宝の所在が分かる、三十年戦争時代の傭兵であれば、剣、槍、銃弾のいずれにも傷つけられない金剛不壊の体になる、といった具合。

(64) フィアナウ　Virnau.　ベヒシュタインは上記のごとく綴っているが、現在では‚Viernau‘が普通。現テューリンゲン州シュマルカルデン＝マイニンゲン郡の小さい町。

(65) ヴォーデ　Wode.　ＤＳＢ一七八参照。

(66) シュヴァルツァ　Schwarza.　現テューリンゲン州シュマルカルデン＝マイニンゲン郡の小さい町。

(67) 忠実なエッカルト　der treue Eckart.　ＤＳＢ二九をも参照のこと。

(68) 濃色麦酒（エール）　ale.　英語。大麦麦芽を使用、酵母を常温（摂氏二〇度前後）で短時間上面醗酵させ、複雑な香りと果物に似た風味と深い旨味を生み出したビールの一種。イングランド、アイルランドなどのいわば伝統的地ビールでもある。これは古風な醸造法によるものだが、現代ドイツでも多く作られており、デュッセルドルフのアルト・ビーア（通称「アルト」）Altbier (Alt)はその典型的例。

(69) テルツ　Tölz.　現バイエルン州バート・テルツ＝ヴォルフラーツハウゼン郡の郡庁所在地バート・テルツ。ミュンヒェン南方約五十キロ、イザール河畔の保養都市。かつてはビールの町で、十七世紀中葉二十二もの醸造所があった。一七八二年、主要な顧客

先ミュンヒェンは五六〇〇ヘクトリットルも買っている。しかしながら小規模経営は産業化の流れに抗し難く、次次に閉鎖された。今日復活したビール醸造会社はTÖLZER MÜHLFELDBRÄUのみ。

(70) ドライスィヒアカー　Dreißigacker.　現在は南部テューリンゲンの郡庁所在地マイニンゲン西部の地名。かつては郊外で、十八世紀初頭には領主ザクセン＝マイニンゲン公エルンスト・ルートヴィヒ一世が狩りの館を建てたし、一八〇一―四三年テューリンゲン最初の林学講習所（フォルスト・アカデミー）が経営された。初代所長として招聘されたのはルートヴィヒ・ベヒシュタインの母方の伯父かつ養父のヨーハン・マテーウス・ベヒシュタイン（一七五七―一八二二）で、亡くなったのもこの地である。

(71) 刑吏　Scharfrichter.　死刑執行人。人体に密接な関わりを持つ特殊な職業に従事しているので、解剖学、外科学、生理学等に通じてもいたろう。民衆からは、忌まれ、恐れられるとともに、玄妙な知識を持っている、と信じられたであろう。

(72) 森瞶罪（ヴァルトブーセ）　Waldbuße.　薪や粗朶（そだ）を盗んだ場合、たとえば、一日ないし数日、森で只働きをしなければならなかった。いわゆる「森瞶罪（ヴァルトブーセ）」である。これが果たされなければ、監獄に入れ、と森番に脅された。煮炊きの燃料にすら差し支えるのは、貧しい人人にとってまさに死活問題。薪や粗朶の盗みは中世のみならず近世でも行われ、はずみで森番が殺された事件（一八四四年。ザクセン＝ヴァイマル＝アイゼナハ大公国）もある。犯人ヨーハン・アーダム・ヘーネは小都市（現テューリンゲン州ヴァイマーラー・ラント郡の保養地バート・ベルカ Bad Berka）の靴屋の親方ではあったが、若くて顧客がなく、六人の子持ちで、じゃがいも粥を煮るための薪を盗んで担っているところを森番に発見され、揉み合いのあげく相手を殺してしまった。監獄に送られ、数年後に獄死。妻は情けある人たちの庇護を受けたが、六人の子の内二人を孤児院に預けねばならなかった。L・ヘフナー「山林での森番殺し」Ludwig Häfner: Der Förstermord auf der Harth. In: *Weimarer Heimat: Blätter für Natur, Geschichte und Kultur des Kreises Weimarer Land*. Vol. 15 (2001), p. 5960°

(73) シュタインバハ＝ハレンベルク　Steinbach-Hallenberg.　現テューリンゲン州シュマルカルデン＝マイニンゲン郡の小都市（現人口五千以上）。ハーゼル河谷にある。

(74) 柩には子どもの亡骸（なきがら）が入っていた　darin eine Kindesleiche.　人柱にされたのであろうか。

(75) 恵ミ深キまりあ（アヴェ・マリーア）二讃（グラツィア）エアレ。　ＭＣＣＣＣＸＸ　Ave Maria gracia, MCCCCXX.　ラテン語は上記の通り。西暦年は一四二〇年。ただしローマ数字では普通ＭＣＤＸＸ。

(76) 坩堝（るつぼ）　Harztiegel.　前後からの類推。‚Harztiegel' には「鉱滓（こうさい）」の意があるが、それでは通じない。

(77) 執事（レントマイスター）バルタザール・ヴィルヘルム　Rentmeister Balthasar Wilhelm.　ヘッセン方伯家の執事で、シュマルカルデンの古い市民の一族。ルターと同様エアフルトで神学を学んだ。ルターの盟友。

(78) 説教をも行った　eine Predigt hielt.　新教派の錚々たる諸侯らを含む会衆に対して。説教の題目は「信仰の解釈」Auslegung des Glaubens。一五三七年二月十一日のことである。

(79) メランヒトン　Melanchton.　DSB三九注参照。

(80) 自治体後見人（ゲマインデフォアムント）　Gemeindevormund.　市の幹部の内で市民の代弁者。法律顧問Syndikusにして懲戒監査官Inspector Disziplinär。

(81) ヘッセン風の牡山羊剣（ボックデーゲン）というか闘剣（カンプフデーゲン）を　einen hessischen Bock- oder Kampfdegen.　未詳。識者のご高教を俟つ。

(82) 悪魔が築いた壁　ein Teufelsmauer.　ここでは普通名詞として用いられているがDSB四〇二「悪魔の壁（トイフェルスマウアー）」、DSB八六八では「悪魔の壁と悪魔の街道（トイフェルスシュトラーセ）」のように固有名詞として扱われている。

(83) 群れの牡牛（おうし）　Heerdochse.　‚Herdochse' である。去勢していない種牡なので気が荒い。

(84) フーダー　Fuder.　昔の容量単位。酒類の場合、七五〇リットルから一九五〇リットルの間で、地域により異なる。

(85) 巖山葡萄酒（フェルゼンヴァイン）　Felsenwein.　本来は、巖肌にしがみつくように生えている葡萄の樹の葡萄から搾られた葡萄液で醸したワイン。独特の風味を持つ、とか、喉の黄金だ、とかいう讃辞がある。ただし、ここでは巖だらけの城山の廃墟から持って来たワインをこう言っただけのことか。

(86) 棒砂糖の形　die Gestalt eines Zuckerhutes.　現在この形は世界を見渡しても稀だが、十九世紀および二十世紀初頭において、白砂糖はその製造法のため、長細い円錐形に固められて、取引された。

(87) ヘンネベルク　Henneberg.　現テューリンゲン州シュマルカルデン＝マイニンゲン郡の小さい村（由緒あるヘンネベルク伯爵家発祥の地）を指すのではなく、ヘンネベルク地方（南部テューリンゲンの大部分を含む歴史的文化的名称）の意であろう。

(88) カンネ　Kanne.　容器の名称でもあるが、この場合は約一リットルの容量単位であろう。この女商人は重さも容量も四分の一少なく客に渡したのである。

(89) アカー　Acker.　二二―六五アール。

(90) 靴尺（シュー）　Schuh.　約三〇センチ。

(91) シュロイジンゲン　Schleusingen.　現テューリンゲン州ヒルトブルクハウゼン郡の大きな町。

(92) 牛飼いは、それが再び沈んでしまわないようにと、すぐさま所持の布切れ（手拭い）を見つけた物の上に投げ　Der Hirte warf gleich seinen Lappen (Halstuch) auf den Fund, damit derselbe nicht wieder versinke.　こうした俗信はおもしろい。

(93) レングヴィッツガウ　Längwitzgau.　中世の地域名で、テューリンゲン山地（ヴァルト）北縁、ほぼ今日のテューリンゲン州イルム郡に当たる。

(94) 盗賊城（ラウプブルク）　Raubburg.「ラウプブルク」Raubburg、「ラウプシュロス」Raubschloßとは盗賊騎士（ラウプリッター）の根城。盗賊騎士とは、街道ないし

舟航可能な河川における通行料の強制、追い剝ぎ、略奪・誘拐を事とする遠征行を飯の種にした騎士階級に属する者たち。中世後期にはびこった。物納経済が貨幣経済に駆逐されるようになった結果であろう。高高十数人から数十人であっても重武装したあらくれ者を擁して嶮岨な山城に拠られると、火砲が未発達な上、公権力が弱体な時代、これを排除するのは困難だった。しかし、勃興した商人は、交易が妨げられるのを座視してはおらず、たとえば都市同盟軍を組織するなどして、やがて彼らを殲滅する。

(95) 洗礼者ヨハネの祝日の前夜　Johannisnacht.　六月二十三日から二十四日に掛けての夜。夏至が直近となるので、民間信仰ではこの時期を特別視する。同じ薬草でも効能が違うなどと考えられた。薬草を夜採取するのは、夜間は薬効が草の内に潜み、昼間のように発散していない、とされたから。

(96) イルメナウ　Ilmenau.　テューリンゲン山地北縁、イルム川の開いた谷にある都市。エアフルトの南西ほぼ三十三キロ。

(97) 皇帝ルードルフ　Kaiser Rudolf.　神聖ローマ皇帝ルードルフ一世（在位一二七三―九一）。ほぼ一二四〇年以降ハプスブルク伯ルードルフ四世。弱小な領主であることが見込まれて、一二七三年ローマ＝ドイツ王に選出された（大空位時代の終焉）が、その後着着と権勢・領土を拡張した。

(98) アイヒクト　Eichigt.　現ザクセン州フォークトラント郡の村。いわゆるザクセン・フォークトラントにある。

(99) 巌穴蔵　Felsenkeller.　巌を掘って作った穴蔵（酒蔵）。

(100) ある賢い男の許へ　bei einem weisen Mann.　ヨーロッパの昔話・伝説に登場する「賢い男」weiser Mann、「賢い女」weise Frau というのは、ただ単に利巧で物識りの男女の意ではない。人間や家畜・家禽、生産手段などの不調にしかるべく対応できるだけの知識のある庶民で、有用な経験を積み重ねており、日頃から薬草採取その他必要な準備もしていた。ただし、これが老婆だったりすると、時として悪意ある者たちから、「魔女」だ、と誣告されることもあったしだい。なお「賢い女」についてはＤＳＢ五四三と同注をも参照されたい。

(101) 黄金の日曜日　der goldene Sonntag.　「三位一体の祝日」Trinitatis。聖霊降臨祭後の最初の日曜日。

(102) シュタットイルム　Stadtilm.　現テューリンゲン州の小都市。エアフルトの南方約三十キロ。

(103) シャルマイ　Schalmei.　中世のダブル・リードの木管楽器。ＤＳＢ四二九にも登場。

(104) 内膳正　Truchses.　ベヒシュタインは上記のごとく綴っているが、現在では普通 ,Truchseß'。中世ドイツの重要な宮内職の一つ。ザクセンの大豪族ヴィッテキントの　des großen Sachsenfürsten Wittekind.　ＤＳＢ一六二、ＤＳＢ三七七、ＤＳＢ三七八など参照。

(105) 大カールが髭もじゃのルートヴィヒをテューリンゲンの伯爵の一人に昇格させた時　Als der große Karl Ludwig den Bärtigen zu

(106)

einem Grafen vo Thüringen erhoben hatte.　意味不通。「髭もじゃのルートヴィヒ」Ludwig der Bärtige, Ludwig mit dem Bart としてこれまでDSBに登場したテューリンゲンの伯爵はルードヴィング家の祖であり、DSB四二四に登場する。しかし、同伝説によれば、彼を伯爵にしてくれたのは、神聖ローマ皇帝コンラート二世である。

(107) 帝国の四伯爵　Viergrafen des Reiches.　中世後期神聖ローマ皇帝が、シュヴァルツブルク、クレーフェ、ツィリCilli（スロヴェニア語ツェリェCelje）、ザヴォイエンSavoyen（フランス語サヴォアSavoie、イタリア語サヴォイアSavoia）の伯爵家に与えた称号。「四伯爵（フィーアグラーフ）」Viergrafなる称号の由来は定かではない。

(108) シュヴァルツィンブルク家　Haus Schwartzinburg.　原文は上記の通り。

(109) ドイツ皇帝が一人　ein deutscher Kaiser.　ドイツ王にして神聖ローマ皇帝ということ。

(110) 鷲頭獅子身有翼獣（グライフ）　Greif.　グリフォン。伝説の怪獣で、上半身は鷲（ないし鷹）で翼を持ち、下半身はライオン。

(111) 城内法廷　Burggericht.　城の所有者がその裁判権に服する者たちに対して開く法廷。裁判権を持つ城伯（ブルクグラーフ）の法廷もこの名で呼ばれることがある。

(112) ブランケンブルク　Blankenburg.　ブランケンブルク城は現テューリンゲン州ザールフェルト＝ルードルフシュタット郡バート・ブランケンブルク近郊の城の廃墟（ドイツ最大のものの一つ）。バート・ブランケンブルクの里山であるグライフェンシュタイン山頂（標高三九〇メートル）に聳える山城だった。山麓の都市ブランケンブルクの名称はもとよりこの城に由来する。

(113) 皇帝ギュンター　Kaiser Günther.　シュヴァルツブルク＝ブランケンブルク伯爵ギュンター二十一世（ブランケンブルク一三〇四―フランクフルト・アム・マイン一三四九）。一三四九年ドイツ王（後神聖ローマ皇帝）カール四世（ルクセンブルク家）の対立王に立てられた。ただし一敗地に塗れたギュンターは、一三四九年五月二十六日、カール四世に対し全ての要求を放棄したが、その後少ししてフランクフルトのヨハネ騎士修道会修道院で死去した。死因はペストとの説あり。彼自身は、毒を盛られた、と仄めかしたそうだが、歴史的に証拠立てられてはいない。

(114) かの医師フライデンク　der Arzt Freidenk.　フランクフルトの医師フライデンク先生（マイスター）。ギュンター王が軽い不具合を感じた時、彼はこの医師に治療を頼んだ。医師は、すぐ楽におなりです、と約束、薬を調剤して差し出した。王は医師に、毒味せよ、と要求、医師は飲んだ。そこで王は杯の残りを乾した。ところがその直後医師は蒼白になってくずおれ、三日後に亡くなった。一方王は全身が腫れ、麻痺した。同時代人は、王を毒殺すればシュパイアー司教区を与える、と医師は約束されていたのだ、と主張している。もっとも、だれか破廉恥な手が薬に毒を混ぜたことを医師が知らなかったのは明らか、と思われる。以上は次の文献に拠る。Wilhelm Zimmermann: *Der deutsche Kaisersaal*. Stuttgart 1855. (reprint 2005). S.23.

(115) ヴァッドルフ　Watzdorf.　現テューリンゲン州バート・ブランケンブルクの一部（現人口約百五十人）。

(116) 糸紡ぎ部屋の集まりがあり　war Spinnstube.　「糸紡ぎ部屋があった」の意訳。晩秋から初春までの寒く長い宵、村村ではどこかの家の大きな一部屋に既婚・未婚の女たちが集まり、一緒に糸を紡ぐ習慣があった。この部屋が「糸紡ぎ部屋（シュピンシュトゥーベ）」である。唄を歌ったり、世間の噂話に耽ったり、あるいはまた話上手が伝説、昔話、笑い話などを語ったりという具合で、退屈は随分凌げたであろう。娘たちの気を惹こうと、青年たちも楽器を抱えてやって来た。この場合のようにいろいろなゲームも行われたわけである。

(117) 担保が請け戻されることになった　es wurden Pfänder ausgelöst.　「担保遊び」（「罰金遊び」とも邦訳される）Pfänderspiel の「担保」。この遊びについてはDSB四二九注参照。ここでは一応遊びの主体は終わり、遊びで失敗を犯し、担保を預ける（罰を受ける）ことになったメンバーの担保（罰）の内容を、全員参加で無作為に決める場面である。だれの担保（罰）とは知らない状態で、問い掛け役が「だれだか知らないが今自分が手に持っている人の担保は何にする」の意味の科白を歌うように唱える（次注参照）と、メンバーのだれかが思いつきを言うわけ（自分自身の担保かも知れない）。指定されたことを実行すれば、あるいは指定された品を提出すれば、担保を請け戻したことになる。厳しい担保要求をしないのが不文律だが、無思慮な人間が妙なことを口走り、それが一座に認められてしまうこともあろう。

(118) 担保は何にしたらいい。あたしが持ってるこの担保　Was soll thun das Pfand, das ich hab' in meiner Hand?　原文は上記の通り。頭韻・脚韻を踏んでいる。

(119) ブランケンブルク　Blankenburg.　現テューリンゲン州の都市バート・ブランケンブルク。かつてブランケンブルクと呼ばれたグライフェンシュタイン城の城山下にできた定住地が同名で呼ばれ、一三二三年文書で都市の権利を与えられた。現人口約七千。

(120) 小ゲーリッツ（クライン）　Klein-Gölitz.　現テューリンゲン州バート・ブランケンブルクの一部（現人口百人足らず）。この楽士たちはブランケンブルク市のお抱え楽士だったのであろう。

(121) 白髪（しらが）の侏儒（しゅじゅ）が一人　ein graues Männchen.　気晴らし役としてかつて伯爵家に仕えていた者。

(122) 山毛欅の実　Buchecker.　堅果は三角の痩せた団栗状だが、胚乳は渋くなく、脂肪分に富んでいて、生でも食べられる。炒ればより食べ易い。

(123) 癒やしの山村（ハイルスベルク）　Dorf Heilsberg.　現テューリンゲン州ザールフェルト＝ルードルフシュタット郡の小さい町レムダ＝タイヒェルの一部。現人口は二百ばかりに過ぎないが、立派な教会があり、ゲーテもこの教会について一八一八年記している。

(124) ルートヴィヒ王　König Ludwig.　フランク王国カロリング朝国王・西ローマ皇帝（在位八一四―八四〇）。兄二人が早世したので、父の封土を単独相続。優柔不断との譏りを受けたが、大層信心深く、敬虔帝（アフロンメ）・王der Frommeと添え名された。フランス名ルイ

敬虔帝・王（ルイ・ル・ピュウ）Louis le Pieux。DSB一一九をも参照。

(125) 弁髪や鬘（かつら）の時代に　in der Zopf- und Perücken-Zeit.「弁髪」も「鬘」も近世ヨーロッパの男性のヘア・スタイル。弁髪は総髪を後頭部で一本に編んで纏めたもの。ドイツではフランス大革命以前に一般では廃れたが、軍人では十九世紀初頭にも風俗が残っている（プロイセン軍重甲騎兵連隊（ジャンダルム））。鬘（地頭は虱除けのため剃っていたようだ）は庶民とは無縁だったが、十七世紀には長大な物（ルイ十四世――因みに毛が薄かった――の肖像画など参照）が流行り、十八世紀には小さい物となった。十九世紀に入ると廃れて行く。

(126) 森の精（ヴァルトシュラート）　Waldschratt.　ベヒシュタインは上記のごとく綴っているが、現在では普通 ,Waldschrat' であり、従って発音の片仮名表記も「ヴァルトシュラート」の方がより近似値。「シュラート」Schrat が自然の精霊の一種。出没する生活圏により「森のシュラート」Waldschrat、「小川（バッハ）のシュラート」Bachschrat、「野原（ヴィーゼン）のシュラート」Wiesenschrat などに分かれる。「ヴァルトシュラート」は髪も髭ももじゃもじゃ。

(127) ルードルフシュタットの城館　Schloß zu Rudolfstadt.　ルードルフシュタットはシュヴァルツブルク＝ルードルフシュタット伯爵領（一五九九―一七〇九）、同侯爵領（一七一〇―一九一八）の首邑。現テューリンゲン州ザールフェルト＝ルードルフシュタット郡の中都市。町を見下ろすハイデックブルクHeideckburg の城館がある。

(128) シュヴァルツブルク伯未亡人カタリーナ　die verwittwete Katharina von Schwarzburg.　ヘンネベルク伯爵家に生まれ、シュヴァルツブルク伯――同伯としては初めてルター派に改宗した――ハインリヒ三十七世（―一五三八）と一五二四年結婚。シュヴァルツブルク伯爵夫人カタリーナCatharina, Gräfin zu Schwarzburg（一五〇九―六七）。「剛勇伯爵夫人」（ディ・ヘルデンミューティゲ）die Heldenmütige との添え名がある。

(129) 三十年戦争が諸邦を荒れ狂っていた頃のことである　als der dreißigjährige Krieg durch die Lande wüthete.　シラーも記しているこの逸話は一五四七年のことで、三十年戦争時代ではなく、シュマルカルデン同盟との戦争である。皇帝はカール五世で、同時にイスパニア王カルロス一世としてアルバ公の主君だった。

(130) 保護状（シュッツブリーフ）　Schutzbrief.「保護状」はあらゆる種類の支配者によって、さまざまな理由から発行された。これはその所有者ないし集団全体をその支配者の特別な保護下に置くことを証明するものである。

(131) アルバ公　Herzog Alba.　イスパニアの第三代アルバ公Douque de Alba フェルナンド・アルバレス・デ・トレドFernando Álvarez de Toledo（一五〇七―八二）。神聖ローマ皇帝カール五世にしてイスパニア王カルロス一世および次のイスパニア王フェリペ二世に仕えた将軍・政治家。オランダ独立戦争（八十年戦争）初期におけるネーデルラントの叛乱に対する苛酷な弾圧は有名。

(132) 牡牛（おうし）の血には殿様の血を　Fürstenblut für Ochsenblut!　原文は上記の通り。

(133) ブラウンシュヴァイク公　Herzog von Braunschweig.　ブラウンシュヴァイク＝リューネブルク公にしてブラウンシュヴァイク＝ヴォルフェンビュッテル侯（在位一五一四―六八）ハインリヒ二世（一四八九―一五六八）。ニーダーザクセン地域最後のカトリック君侯。数多くの戦に参加。一五二五年ドイツ農民戦争では農民と戦い、一五二八年には神聖ローマ皇帝カール五世のフランス、イタリア遠征に参加。シュマルカルデン同盟に敗れてヴォルフェンビュッテルを奪われ、バイエルン公国に亡命、カール五世の援助を受けて一五四六年失地恢復したこともある。

(134) カスパール・アクィラ　Caspar Aquila.　本名ヨーハン・カスパール・アードラーJohann Caspar Adler（一四八八―一五六〇）。宗教改革期のルター派の神学者。アクィラはラテン語で（イタリア語でもそうだが）「鷲」の意――本姓アードラーはドイツ語でやはり「鷲」。あることで彼に激怒した神聖ローマ皇帝カール五世が彼の首に五千グルデンもの懸賞金を懸けたことがある。その際彼はシュヴァルツブルク伯爵夫人カタリーナに匿ってもらった。

(135) ユーストゥス・ヨーナス　Justus Jonas.　大ユーストゥス・ヨーナスJustus Jonas der Ältere（一四九三―一五五五）。法律家、人文主義者、宗教改革期のルター派の神学者。法律家にして外交官小ユーストゥス・ヨーナスJustus Jonas der Jüngere（一五二五―六七）の父。

(136) 警衛下士（プロフォース）　Profos.　刑の訴追と執行に任じた軍の役職。十六世紀のドイツでは連隊（レギメント）の警察権を委任された役人で、軍令の執行と維持に努めた。三十年戦争までは中隊ないし小旗部隊（フェーンライン）に配属され、懲戒処罰の執行を司る。軍隊内での警官であり刑吏だった。業務は随分変化しているが、現代における後身は「憲兵」ないし「軍警察」である。

(137) 下（ウンター）＝プライリップ　Unter-Preiiipp.　現テューリンゲン州ザールフェルト＝ルードルフシュタット郡の都市ルードルフシュタットの一部。

(138) 長細白麺麭（ヴェッケ）　Weck.　上等の小麦で作った細長いパン。無論中・近世庶民が普通食べられるパンでなかった。産婦のため、一家の祝いのため用意するのであろうが、赤児を取り上げてくれるお産婆さんにも謝礼の一部としてご馳走するわけ。これを食べたり、持ち帰ったり、疲れ休めのワインを飲んだりくらいがなぜいけない、と存ずるが、どういうものかベヒシュタインはこの稼業の女性に殊の外口うるさい。

(139) 灯り部屋（＝糸紡ぎ部屋）　Lichtstube.　「糸紡ぎ部屋」Spinnstubeに同じ。DSB五二三注参照。

(140) 取替え子（ヴェクセルバルク）　Wechselbalg.　この伝説・昔話の登場形態についてはDSB一七九の注で詳しく記した。またDSB一八〇をも参照。

(141) 百姓屋敷（ホーフ）　Hof.　「バウエルンホーフ」Bauernhofである。主人である農夫一家、何人もの男女使用人の居住区画、耕作用・運搬用

の馬や牛のための厩、豚・羊・家禽用の囲いや小屋、堆肥置き場、水汲み場、巨大な納屋、荷車置き場などから成る。

(142) 糸紡ぎ部屋の集まりをやっていた　Spinnstube hatten.　DSB五二二注参照。

(143) 娘が子どもを授かったみたいになっちゃった　ich bin dazu gekommen, wie die Magd zum Kind.　原文は上記の通り。

(144) ザールフェルト　Saalfeld.　ザールフェルト・アン・デア・ザーレ。現テューリンゲン州ザールフェルト＝ルードルフシュタット郡の郡庁所在地。ザーレ河畔に位置し、現人口約二万五千。ルードルフシュタット、バート・ブランケンブルクと共にザーレ川彎曲部の近接三市として一種の都市同盟を目指している。十世紀初頭にはカロリング朝王領の一つ。十三世紀初頭にはテューリンゲンで四番目の帝国直属都市となった。

(145) ヨハンネス教会（キルヒェ）　Johanneskirche.「ヨハンニス教会」Johanniskirche。ザールフェルトの市教会。中央広場（マルクトプラッツ）のすぐ近く、旧市街のザーレ川を見下ろす丘の上にある。一三八〇年着工、一五一四年竣工。ゴシック様式。テューリンゲンの最も重要な教会建築の一つ。

(146) ルートヴィヒドイツ人王（ドイチェ）　Ludwig der Deutsche.　東フランク王ルートヴィヒ二世（在位八四三―七六）。カール大帝〔＝シャルルマーニュ〕の末子で、後継者となったルートヴィヒ敬虔帝（ドイチェ・フロンメ）・王〔＝ルイ敬虔帝（ルイ・ピュウ）・王〕の子息（三男）。従ってこの人は大帝の孫の一人。添え名「ドイツ人王（ドイチェ）」は十八世紀になってからのもの。同時代の西フランク王国の文献で、彼は「げるまにあノ王」rex Germaniae あるいは「げるまん人ノ王」rex Germanorum と呼ばれているが、もとより「ゲルマニア」「ゲルマン人」＝「ドイツ」「ドイツ人」というわけではない。

(147) カールマン　Karlmann.　カール大帝〔＝シャルルマーニュ〕の曾孫。ルートヴィヒ二世の長男。東フランク王（在位八七六―八〇）・イタリア王（八七九―八七九）カールマン二世。病を得て晩年弟たちに譲位。

(148) 小ルートヴィヒ　Ludwig der Jüngere.　カール大帝〔＝シャルルマーニュ〕の曾孫。ルートヴィヒ二世の次男。ルートヴィヒ三世。東フランク王国の大部分もロタール王国東部もイタリア王国も領有したが、嗣子無くして死去したのでこれらは弟のカールの手に渡った。

(149) カール肥満王（ディア・ディッケ）　Karl der Dicke.　カール大帝〔＝シャルルマーニュ〕の曾孫。ルートヴィヒ二世の三男で末子。一時西フランク王国（こちらではシャルル肥満王（ルー・グロ）である）をも継承、かつてのフランク王国を暫定的に統一したが、無能でこれを維持できなかった。

(150) ……が素晴らしい大ドイツ国を初めてお互いの間で分け合ったのだ　……das große herrliche deutsche Reich zum ersten unter sich getheilt haben.　広大なフランク王国が三分割されたのは七四三年「ヴェルダン条約」においてである。東フランク王国（ルートヴィヒ二世＝ドイツ人王（ドイチェ）、ロタール王国（ロタール一世）、西フランク王国（カール二世＝シャルル二世＝禿頭王（ル・ショーヴ））。ベヒシュタ

インの記す八七五年、シャルル禿頭王は兄ルートヴィヒドイツ王（デア・ドイチェ）・西ローマ皇帝が死んだので、イタリアに侵入、同地域を併合、西ローマ皇帝（カール二世）に即位している。ベヒシュタインの誇称する「大ドイツ国」――彼は東フランク王国を指してこう言っているのかも知れないが――の分割とは何だろう。

(151) ソルブ語を話すヴェンド人　Sorbenwende.「ヴェンド人」とはゲルマン人の居住地近傍ないし居住地内のスラヴ人を指すゲルマン語（後ドイツ語）。ソルブ語は西スラヴ語の一派。「ソルブ語を話すヴェンド人」は結局ソルブ人。これは中世までエルベ川東岸地域に居住していたスラヴ民族の残存者と見るべきであろう。ザクセン州北東部、ブランデンブルク州南東部に現在合わせて六万ほど。大半はドイツ語をも話す。彼らの居住地は歴史的にラウジッツと呼ばれる。

(152) テューリンゲンの鰊鼻（にしんばな）　Thüringer Heringsnasen.　鰊好きで、しかも鼻が鰊のように尖っている、というからかいか。

(153) 高い群れ（デア・ホーエ・シュヴァルム）　der hohe Schwarm.「ホーアー・シュヴァルム」Hoher Schwarm.ザーレ川上手にそそり立つゴシック建築様式の居住型塔城の廃墟。今日の遺構がいつ建設されたのか充分判明していないが、シュヴァルツブルクの諸伯によりそれ以前に存在した防禦施設の壁・基礎を利用して造られた模様（一三〇〇年頃）。十四世紀後期にはソルベンブルクと呼ばれていた。伝説によれば、七世紀の半ばスラヴ人の首長ザーモが鳩占いで城を建てる場所を選ばせたところ、鳩は柏（アビエ）の巨樹に止まった。祭司が木に斧をいれ、木が倒れると、幹の中に巣を作っていた蜜蜂の群れ（シュヴァルム）が空中高くに飛び立った。そこでザーモは築いた城を「高い群れ（ホーアー・シュヴァルム）」と命名した、と。

(154) 高キそるぶ人ノ城（アルクス・アルタ・ソラバルム）　arx alta Sorabarum.　ラテン語。

(155) カッティ族（カッテン）　Catten. ‚Chatten' あるいは ‚Katten' とも。ゲルマン人の一部族。今日のヘッセン地方の住民の大部分に相応する。

(156) 「カッティ族（カッテン）」が「ヘッセン」の語源であることは確かであろう。

(157) ヘラー　Heller.　半プフェニヒに相当。つまりごく価値の低い貨幣。

(158) 南国人の親方に　einem wälischcen jener.　ドイツから見て南の国（イタリア、フランス、イスパニア、ポルトガル）の者だが、おそらくイタリア人。

(159) 瀝青環（ペヘレンクランツ）　Pechkranz.　中・近世の軍事に使用された焼夷剤。木製の環を芯とし、これにピッチを染み込ませた布紐を何重にも巻き付けた物。包囲した都市や城塞に攻撃側が投擲機で投げ込んで放火するのに安価かつ効果的だった。ただし、この話の場合は照明道具である。

(159) 宮中調剤所（ホーフアポテーケ）　Hofapotheke.　王侯の宮廷のための薬調剤所。現在もこの名称、ないし類似の名称の薬局がドイツの幾つもの都市にある。ザールフェルトのそれはヨハンニス教会（キルヒェ）のすぐ近くにあるロマネスク様式の極めて古い建物。一六八一年家屋の所有

者、薬剤師バルタザール・カムスドルフが宮中調剤所開設の権利を取得したので、以来この名称の薬局となる。現在の名称は「中央市場薬局」Markt Apotheke。

(160) 女子修道院だった　……war ein Nonnenkloster.　その事実は無い。一一七〇年フリードリヒ赤髭帝・王の帝国代官の住まいとして建てられ、その後一二〇八年シュヴァルツブルク伯家が入手、更に一四六八年市参事会が所有、更に市民に売却された。それから宮中調剤所となった。

(161) 跣足修道士修道院　Barfüßerkloster.　一二五〇年頃建てられたフランシスコ会派修道院。現在はザールフェルト市博物館。

(162) アルテンザールフェルト　Altensaalfeld.「アルトザールフェルト」Altsaalfeld。現在はザールフェルトの市区の一つ。往古はザーレ川右岸の村で、この村の南にフリードリヒ赤髭帝・王が都市に基礎を置き、それがザールフェルトに発展した。

(163) 小さい館キッツァーシュタイン　das Schlößchen Kitzerstein.　ホーアー・シュヴァルムの近く、市壁沿いにある。

(164) 幼児殉教者の日に　am Tage der unschuldigen Kindlein.　十二月二十八日。「罪なき子どもらの日」der Tag der unschuldigen Kinder。ヘロデ王の命によりベツレヘムとその周辺一帯の二歳以下の男の子が皆殺しにされた、との新約聖書マタイ伝（二章十六節）の記述により、後世定められたキリスト教会の祝日。

(165) 石灰を振り掛けても　durch aufgeschütteten Kalk.　生石灰・消石灰は消毒に用いられる。

(166) トゥート＝オーゼル　Tut-Osel.　DSA三一七参照。

(167) ザールフェルト公クリスティアン・エルンスト　Saalfelder Herzog, Christian Ernst.　ザクセン＝コーブルク＝ザールフェルト公クリスティアン・エルンスト（在位一七二九―四五）か。

(168) ……宝は地底へ沈んだ　……sank der Schatz zur Tiefe.　呪封されている宝を掘り出す時、うっかり声を立てると、宝はまた沈んでしまう。これまでにも繰り返されている約束事である。

(169) ザクセン選帝侯ヨーハン・フリードリヒ寛容公　Kurfürst Johann Friedrich von Großmütige.　DSB三七一注参照。DSB四九一でも名が出る。

(170) ミュールベルクの戦い　der Schlacht bei Mühlberg.　プロテスタントの諸侯が結成したシュマルカルデン同盟の総帥ザクセン選帝侯にしてザクセン公ヨーハン・フリードリヒ一世は約七千の兵を率いてミュールベルク（現ブランデンブルク州エルベ＝エルスター郡の町。エルベ河畔に位置する）近郊に野営していたが、一五四七年四月二十四日神聖ローマ皇帝カール五世が指揮する歩兵一万七千、騎兵一万に奇襲され、壊滅的打撃を喫すると共に、負傷して捕虜となった。五月十九日ヴィッテンベルク条約によりいわゆるシュマルカルデン戦争はプロテスタント側の降服で終わり、ヨーハン・フリードリヒは選帝侯位を失い、選帝侯位と領土の

大部分をカール五世によって又従弟であるザクセン公モーリッツ――これもプロテスタントだったが、カール五世に味方していた――に譲渡させられ、テューリンゲンの所領しか残らなかった。

(171) グラーバ修道院の故地　Stift Graba.　グラーバ村は現在ザールフェルト市の一部。かつてベネディクト会派修道院があった。

(172) 騎士の荘園（リッタージッツ）　Rittersitz.　「騎士の荘園」Rittergut（リッターグート）とも。これを所有していることによりその領主は、法律ないし慣習法により免税特権および地方議会出席・発言権を持った。館のある広く、美しい敷地として描かれた図が幾つもある。ただし下ヴィルバハの騎士の荘園は十五世紀半ば以降ザールフェルトのベネディクト会派修道院の所有に帰し、近世には田舎屋敷（カウントリー・ハウス）としてザールフェルト市民（私人）のものとなっていた。

(173) 夢魔　Alptrude.　ＤＳＢ一五〇注参照。アルプ Alp、トルート Trud、トルーデ Trude、ドゥルーデ Drude、マール Mahr などは全て睡眠中の人を苦しめる妖魔。

(174) 金持ち村（ライヒマンスドルフ）　Reichmannsdorf.　現テューリンゲン州ザールフェルト＝ルードルフシュタット郡の村。

(175) 郭外市（かくがいし）　Vorstadt.　原文は上記の通り。

(176) フォイクトラント　Voigtland.　現在一般には「フォークトラント」Vogtland だが、ベヒシュタインはこの表記で終始する。

(177) 曠野（ハイデ）　Haide.　‚Heide' と綴る場合と同様の意味。ザールフェルト近く以外にもこの綴りの「ハイデ」は数箇所ある。

(178) ディトマルシェン地方のヴォーデが地べたの下（ウンターイルディッシェ）の衆を狩るように　wie der Wode im Ditmarschenlande die Unteriridischen.　ＤＳＢ一七八参照。

(179) 荒れ狂うベルタ（ディ・ヴィルデ・ベルタ）　Die wilde Bertha.　ＤＳ二六九によれば、シュヴァーベン、フランケン、テューリンゲンで、言うことを聴かない子どもを脅すのに「荒れ狂うベルタが来るよ」Die wilde Berta kommt. と叫ぶ由。南ドイツのペルヒタに相当するのであろう。後者は怖い属性と優しい属性を持ち、ホレ夫人と共通する女性の自然精霊だが、ベルタには好い子や働き者の女性奉公人に手厚く報いる優しい半面はあるのか。

(180) ベルンディートリヒ　Berndietrich.　ドイツ盛期中世・後期中世の極めて有名な伝説登場人物ディートリヒ・フォン・ベルン〔＝ヴェローナ〕が訛ったものか。この男性英雄の名が女性の伝説登場形態の名に擬されること自体が奇妙。

(181) 片や伴侶の方は鉄のベルタ（ディ・アイゼルネ・ベルタ）、ビルダベルタ、ヒルダベルタ（フルダ＝ベルタか）と呼ばれ、南ドイツではペルヒタおよびプレヒタである　sie aber heißt auch die eiserne Bertha, die Bildabertha, Hildabertha (Hulda-Bertha?), und im südlichen Deutschland Perchtha und Prechtha.　原文は上記の通り。

(182) 団子（クレーゼ）　Klöße.　単数形「クロース」Kloß。小麦粉の捏ね粉（擂り下ろしたじゃがいもを半分混ぜることもある）で作る、大抵は球

形の食品。茹でたものをそのまま主食とするか、シチュウの添え物とするか、スープの具とする。甘くしてデザートとする場合もある。

(183) 鰊（にしん） Häring. 普通‚Hering‘と綴る。ベヒシュタインは鰊の魚卵（数の子）に言及しているが、こちらが食べられるのは勿論丸のままの燻製鰊（雌）の場合である。丸のままの燻製鰊は三枚に下ろして、水で一晩塩抜きし、水気を拭き取り、小骨を丹念に除去する。これでそのままパン（黒パンをお勧めする）に載せて食べられる。もう一つ考えられる調理法は「鰊のマリネ」Marinierter Heringであろう。塩漬け鰊を五時間ほど水で塩抜きし、水気を拭き取り、薄切りの玉葱や月桂樹の葉などと共にマリネ液――ミルク、サワークリームなどを混ぜた物――に二日ほど漬ける。付け合わせには茹でた皮付きじゃがいもが合う。訳者は、どちらの鰊の食べ方でも美味い、と思いますが、ま、子ども向きの食材ではありませんな。

(184) テューリンゲンの鰊鼻どもの der Thüringer Häringsnasen. ＤＳＢ五三〇参照。

(185) 車輪止め鎖 Hemmkette. 馬車を減速ないし停止させるために車輪の車軸に巻き付けられる、あるいは車輪に押し当てる制動機に結ばれている鎖。

(186) 扁豆（ひらまめ） Linsen. レンズ豆。丸く扁平で小粒（直径四―九ミリ）。西アジア原産で極めて古い栽培植物の一つ。足らず勝ちの小麦・ライ麦などの補いとして干し豌豆や干し蚕豆とともに庶民の食材に多用されたと見え、ドイツの民話にはよく登場する。

(187) 十二夜 die Zwölften. クリスマスの夜（十二月二十五日）から一月六日の朝（公現祭前夜）までの期間を言う。季節の変わり目であり、ヨーロッパの多くの地方では雪や氷に閉ざされ満目蕭条としているので、民間信仰では魑魅魍魎が徘徊する、とされた。南ドイツやオーストリアの田舎では家や家畜小屋を煙で燻して魔除けとしたので「十二燻夜」die zwölf Rauhnächteとも呼ばれる。

(188) いかなる風呂屋・軍医も kein Bader und Feldscher. 「風呂屋」＝「浴場主」＝「浴場世話係」Baderは「理髪師」Barbierと考えてもよい。西欧では十三世紀から十五世紀に掛けて都市部において公共浴場（蒸し風呂）が普及した。浴場主や浴場従業員は鋏や剃刀を用いて浴客の髪や髭の手入れ（理髪）、肌のマッサージをも行ったが、時の経過と共に、大学で医学を学んだ医師にとって軽侮された下級医術、すなわち、刺胳（しらく）、浣腸、傷の治療、膏薬調製、小さな外科手術（腫物の切開、創傷の縫合など）、骨折・捻挫・脱臼の治療をも行うようになった。従ってこの業種に従事していて技術に優れている者は、従軍していれば軍医の仕事も大方務まった。いや、ともすると空虚な理論を先行させ勝ちな大学で医学を学び、臨床医療体験に乏しい医師よりも、遙かに役に立ったに違いない。しかしながら「風呂屋」「理髪師」は初め賤しい稼業とされ、手工業組合から疎外されていた。十四世紀半ば頃に漸く「風呂屋」「理髪師」の組合（ツンフト）ができたし、またしばしば他業種組合からも受け入れられるようになった。ＤＳＢ四九八注Feldscherer参照。

(189) ほうい（フッサ） Hussa! 「フッサッサ」Hussassaとも。狩猟時の掛け声。ＤＳＢ八一参照。

(190) 片身半分　Viertel. 普通は食肉として処理され、血抜き・剝皮がきちんと済んだ骨付きの大きな塊が片身。しかし、この場合はどんなものか。

(191) 疫病神どん（ヒュンシュヒェン） Hünschchen. 「ヒュンシュ」Hünsch あるいは「ヒンシュ」Hinsch は「病気」「ペスト」の意。「――ヒェン」は縮小語尾。ただし、訳にさほど自信はない。識者のご高教を俟つ。

(192) 賢い女　eine weise Frau. ＤＳＢ五一三の注にも記したが、ヨーロッパの昔話・伝説に登場する「賢い女」weise Frau はただ単に利巧で物識りの女性なのではない。ここで更に一言すれば、ドイツ語圏やその周辺地域の「賢い女」には、ローマ軍と対峙したゲルマン人にあっては尊重され、軍略をも軍の首長が諮問した部族の長老の女性、巫女的存在が、あるいは遠く narrow しているのかも知れない。

(193) 秘法に通じた女性（ルーネ）　Rune. 「ルーネ」Rune は中世高地ドイツ語で「秘密」「秘法」「ゲルマン人の秘密文書・魔呪に用いられた文字」の意で、標記のような使い方があるわけではない。ベヒシュタインの特殊な用法であろうか。

(194) ヴェレ夫人　Frau Welle. この名の音からは「ウェレダ（ヴェレダ）」Veleda が容易に連想されよう。ウェレダはゲルマン人の一部族ブルクテリの女予言者で、紀元七〇年頃ローマ皇帝ウェスパシアヌスの時代に名がある。現ヴェストファーレン州のリッペ川から遠からぬ塔に隠遁していたが、ローマ帝国に対するバタウィイ族の叛乱に関与し、叛乱側の勝利を予言した。後に囚われてイタリアのアルデアで生涯を終わる。コルネリウス・タキトゥス『同時代史』Historiae 四章六一・六五節参照。

(195) この流れ　der Fluß. すなわちザーレ川 die Saale は現バイエルン、テューリンゲン、ザクセン＝アンハルト三州を貫流する全長四一三キロ、モルダウ（チェコ語ヴルタヴァ）川に次いで二番目に長いエルベ川の支流である。上バイエルン（オーバー）、フィヒテルゲビルゲのヴァルトシュタイン――ツェルとヴァイセンシュタットの間――から流れ出し、ザールフェルト、ルードルフシュタット、イエナ、ナウムブルク、ヴァイセンフェルス、バート・デュレンベルク、メルゼブルク、ハレ、ヴェッティン、ベルンブルクなどの町町の傍を通り、バルビー近郊でエルベ川に合流する。

(196) ラニス　Ranis. 現テューリンゲン州ザーレ＝オルラ郡の小都市。

(197) ヴィルヘルムス村（ドルフ） Wilhelmsdorf. 現テューリンゲン州ザーレ＝オルラ郡の小村。海抜四二七メートルの位置にある。こんな高地の村にどうしてザーレ川の女の水の精（ニク）が出没したのだろう。

(198) 打梭棒（うちおさ）　Peitschenstecken. 織機の道具。

(199) ハレってどこだか知ってるかい。／ハレは谷間にありまする。／綺麗な娘らその中へ。／それからザーレの水の精。 Wißt ihr wohl,

wo Halle liegt? / Halle liegt im Thale: / Da sind schöne Jungfern drein, / Und Nixen in der Saale.　原文は上記の通り。終わりの二行が、女の水の精（ニクセ）に乙女の生贄を捧げることを仄めかしているのか。

(200) プライリップのご同業と似たこと　wie der zu Preilipp.　ＤＳＢ五二八参照。

(201) ドステンとドラント　Dosten und Dorant.　ＤＳＢ三〇一、ＤＳＢ三九四注参照。

訂正

分載試訳（その八）

三九ページ　七行目　温良公（デア・グロースミューティゲ）→寛容公（デア・グロースミューティゲ）

八五ページ　後ろから七行目　温良公（デア・グロースミューティゲ）→寛容公（デア・グロースミューティゲ）